

# 旭・小島古墳群 塩原屋敷遺跡Ⅱ

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅶ

2009

本庄市教育委員会

## 序

本庄市はかつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一生涯の地として広く知られています。このような豊かな歴史的背景と文化的風土にめぐまれた本庄市には、また多くの埋蔵文化財が所在し、旧石器時代から近代に至るまでの多様な遺跡が分布しています。

本書に報告の旭・小島古墳群は、その中でもとくに重要な遺跡の一つで、埼玉県的重要遺跡にも選定され、4世紀後半から7世紀まで、300年以上にわたって、継続的に造営された県内有数の規模と内容を有する古墳群として知られています。また、塩原屋敷遺跡は武田信玄の遺臣、塩原勘解由がこの地に移り住んで築いたとする伝承をもつ館跡で、当地では現在でもその子孫の方々がご活躍されています。

本庄市教育委員会では、これら遺跡の重要性に鑑み、昭和63年度から始まった小島西土地区画整理事業においても、発掘調査を実施し、遺跡の記録保存につとめてまいりました。その間に蓄積された調査成果は、学術的にも貴重なものが多く、本書にも坊主山古墳出土の形象埴輪、下野堂御手長山古墳出土の鉄製武器類、塩原屋敷遺跡で検出の大規模な区画溝や建物跡、遠く中国から運ばれた青磁などの資料が報告されています。

このような貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたしたちに与えられた責務であり、地域の歴史を明らかにすることは、わたしたちがよりよい未来を築くための手掛かりとなるものです。今後は本書が学術研究の発展に寄与するとともに、生涯学習の場に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた地元小島地区の皆様、小島西土地区画整理事業関係の各位、さらには直接発掘調査の労にあられた皆様に心よりの御礼を申し上げます。

平成21年3月

本庄市教育委員会

教育長 茂木孝彦

## 例 言

1. 本書は埼玉県本庄市小島、下野堂、万年寺地内に所在する旭・小島古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、本庄市小島西土地区画整理事業にともない、事前の記録保存を目的として、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査地点ごとの調査期間、調査面積、調査原因および調査担当者は、それぞれ各節の冒頭に記したとおりである。
4. 整理調査期間は以下のとおりである。

自 平成20年4月1日  
至 平成21年2月13日
5. 整理調査および本書の編集担当者は以下のとおりである。

本庄市教育委員会文化財保護課 太田博之
6. 本書の執筆分担は以下のとおりである。

I・II・III-1-(2)・2・3・6-(1)・(2)	本庄市教育委員会文化財保護課	太田博之
III-1-(1)・(3)・4・6-(3)	同	松本 完
III-5-(1)～(5)	同	増田一裕
III-5-(6)	株式会社パレオ・ラボ	古橋美智子・藤根 久
7. 本書に掲載した発掘現場写真の撮影は各発掘調査担当者が行なった。
8. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。
9. 本書に報告の三笠山古墳の墳丘盛土中から検出した火山灰の自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。
10. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。ご芳名を記し感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

秋元 陽光 新井 端 石橋 充 稲村 繁 犬木 努 井上裕一 江原昌俊  
大谷 徹 賀来孝代 加部 二生 車崎正彦 小林 修 坂本和俊 島田孝雄  
志村 哲 杉山晋作 滝沢 誠 鳥羽政之 長井正欣 中里正憲 中沢良一  
中島直樹 日高 慎 深澤敦仁 山崎 武 横澤真一 外尾常人 金子彰男  
田村 誠 丸山 修

11. 本報告の発掘調査、整理調査および報告書の編集・刊行に関係する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

教 育 長 坂本 敬信 (平成元・2年度)

塩原 暁 (平成3～10年度)

福島 巖 (平成11～17年度・平成18年2月17日まで)

茂木 孝彦 (平成17～20年度・平成18年2月18日から)

(本庄市教育委員会事務局)

事 務 局 長 荒井 茂 (平成元年度)

金井 善一 (平成2～5年度)

荒井 正夫 (平成6～8年度)

中村 勝 (平成9年度)

渡辺 正彦 (平成10・11年度)

倉林 進 (平成12・13年度)

揖斐 龍一 (平成14～17年度)

丸山 茂 (平成18～20年度)

参 事 宮本 清 (平成2年度)

社会教育課長 荒井 正夫 (平成元年度)

坂上 英夫 (平成2～5年度)

中島 正和 (平成6～9年度)

恩田 高治 (平成10年度)

阿部 均 (平成11・12年度)

田中 靖夫 (平成13・14年度)

吉田 敬一 (平成15～17年度)

同 課 長 補 佐 中島 正和 (平成元年度)

吉田 敬一 (平成2～6年度)

小暮 浩一 (平成7・8年度)

中村 文男 (平成9～11年度)

福島 保雄 (平成12～14年度)

桜場 幸男 (平成15～17年度)

上野 良一 (平成16・17年度)

文化財保護係長 中島 正和 (平成元年度)

長谷川 勇 (平成2～6年度)

増田 一裕 (平成7～14年度)

吉田 稔 (平成15～17年度)

文化財保護係 長谷川 勇 (平成元年度)

増田 一裕 (平成元～6年度)

太田 博之 (平成元～17年度)

赤尾 直行 (平成元～3年度)

佐藤 好司 (平成3～9年度)

遠藤 優子 (平成4～6年度)

塩原 浩 (平成7・8年度)

関根 君江 (平成9・10年度)

我妻 浩子 (平成11～15年度)

斉藤 みゆき (平成16・17年度)

松本 完 (平成12～16年度)

町田 奈緒子 (平成13～15年度)

逆井 洋美 (平成16年度)

的野 善行 (平成17～20年度)

文化財保護課長 前川 由雄 (平成17・18年度)

儘田 英夫 (平成19・20年度)

同 課 長 補 佐 増田 一裕 (平成17・18年度)

鈴木 徳雄 (平成17～19年度)

埋蔵文化財係長 鈴木 徳雄 (平成17・18年度)

係 長 太田 博之 (平成19・20年度)

埋蔵文化財係 太田 博之 (平成17・18年度)

恋河内 昭彦 (平成17～20年度)

松澤 浩一 (平成17～20年度)

松本 完 (平成17～20年度)

的野 善行 (平成17～20年度)

大熊 季広 (平成19・20年度)

調 査 担 当 者 長谷川 勇 (平成元～3年度)

佐藤 好司 (平成3～9年度)

増田 一裕 (平成9～14年度)

太田 博之 (平成12～18年度)

松本 完 (平成12～20年度)

町田 奈緒子 (平成13～15年度)

的野 善行 (平成17～20年度)

大熊 季広 (平成19・20年度)

## 凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は国土標準座標第IX系に基づく。
2. 各遺構における方位針は座標北を示す。
3. 塩原屋敷遺跡におけるグリッドの呼称は、北東隅杭が基準となり、東から西へ向かいA～、北から南へ向かい1～となる。
4. グリッドは、1辺10mの正方形に設定し、各グリッド北東隅杭の呼称を当該グリッドの呼称としている。5. 本調査における各種遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真図版中の遺構名称も同一の記号で記述した。  
SF…方形竪穴状遺構    SK…土坑    SD…溝
6. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に以下のとおりである。  
[遺構図]  
遺構平面図…1/40・1/80・1/100・1/160・1/200・1/320・1/500・1/640  
土層・遺構断面図…1/40・1/80  
[遺物実測図・拓影図]  
埴輪…1/4    縄文土器…1/3    鉄製品…1/3    須恵器…1/4  
弥生土器…1/3    土師器…1/4    青磁…1/2  
その他のものについては、個別にスケールを示した。
7. 本書の本文中および観察表で用いた円筒埴輪の各部名称は、突帯を下から上に向かって順に第1突帯、第2突帯、第3突帯とし、各段を基部の側から口縁部に向かって順に第1段、第2段、第3段……とした。
8. 円筒埴輪観察表の「底部・巻き」の「左・右」は、基部を成形する粘土板の巻き合わせの方向を示し、製作者側（上）からみて左端を上重ねたものを「右」、右端を上重ねたものを「左」とした。
9. 円筒埴輪観察表の「底部・圧痕」の「棒状」、「木目状」等の記載はあくまでも視覚的な分類によるものである。
10. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
11. 遺構断面図のスクリーントーンのうちストライプは地山のローム層を示し、アミは埴丘盛土層を示す。
12. 観察表中の遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修の新版「標準土色帖」2000年版によった。
13. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行数値地図1/50,000「高崎」に加筆したものをを用いた。
14. 本書で使用した位置図は、本庄市発行「本庄市都市計画図（デジタル版・1/2,500対応）」に加筆したものをを用いた。
15. 本書で用いた古墳時代の区分は前方後円墳集成歳内編年（広瀬1992）に拠った。文中での表記は単に「集成〇期」として略記した。
16. 本書の引用・参考文献は巻末に一括して記載した。

# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
3 旭・小島古墳群の概要	6
III 調査の成果	
1 御手長山古墳	10
2 坊主山古墳	16
3 下野堂御手長山古墳	35
4 屋敷内4号墳	41
5 三壺山古墳	46
6 旭・小島古墳群遺構外	60
7 塩原屋敷遺跡	73
IV 結 語	107
引用・参考文献	
写真	

## 挿図・付図目次

図1 周辺の道跡……………	3	図34 地中探査レーダーによる墳丘調査資料……………	55
図2 旭・小島古墳分布図……………	8	図35 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(1)……………	61
図3 調査区位置図……………	9	図36 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(2)……………	63
図4 御手長山古墳G地点……………	11・12	図37 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(3)……………	64
図5 御手長山古墳……………	13	図38 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(4)……………	66
図6 御手長山古墳G地点土層断面図……………	14	図39 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(5)……………	68
図7 SK-1平面図および土層断面図……………	14	図40 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(6)……………	69
図8 御手長山古墳出土土門筒埴輪実測図……………	15	図41 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(7)……………	70
図9 坊主山古墳……………	17・18	図42 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(8)……………	71
図10 坊主山古墳A地点……………	19	図43 塩原屋敷遺跡 SF 平面図および土層断面図(1)……………	76
図11 坊主山古墳土層断面図……………	20	図44 塩原屋敷遺跡 SF 平面図および土層断面図(2)……………	77
図12 坊主山古墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(1)……………	21	図45 塩原屋敷遺跡 SF 平面図および土層断面図(3)……………	78
図13 坊主山古墳出土土門筒・朝顔形埴輪実測図(2)……………	22	図46 塩原屋敷遺跡 SF 平面図および土層断面図(4)……………	79
図14 坊主山古墳出土形象埴輪実測図(1)……………	23	図47 塩原屋敷遺跡 SF 平面図および土層断面図(5)……………	80
図15 坊主山古墳出土形象埴輪実測図(2)……………	25	図48 塩原屋敷遺跡 SD 土層断面図(1)……………	82
図16 坊主山古墳出土形象埴輪実測図(3)……………	27	図49 塩原屋敷遺跡 SD 土層断面図(2)……………	84
図17 坊主山古墳出土形象埴輪実測図(4)……………	29	図50 塩原屋敷遺跡 SD 土層断面図(3)……………	87
図18 坊主山古墳出土形象埴輪実測図(5)……………	30	図51 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(1)……………	91
図19 坊主山古墳出土形象埴輪実測図(6)……………	31	図52 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(2)……………	92
図20 坊主山古墳出土土器実測図……………	32	図53 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(3)……………	95
図21 下野堂御手長山古墳……………	33・34	図54 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(4)……………	96
図22 下野堂御手長山古墳土層断面図……………	36	図55 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(5)……………	98
図23 下野堂御手長山古墳石室床面検出状況……………	37	図56 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(6)……………	100
図24 下野堂御手長山古墳石室掘り方・根石検出状況……………	38	図57 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(7)……………	101
図25 下野堂御手長山古墳石室掘り方検出状況……………	39	図58 塩原屋敷遺跡遺構外出土縄文・弥生土器・	
図26 下野堂御手長山古墳出土鉄製品実測図……………	40	石器実測図……………	103
図27 屋敷内4号墳土層断面図……………	42	図59 塩原屋敷遺跡遺構外出土土門筒・朝顔形埴輪、	
図28 屋敷内4号墳……………	43・44	形象埴輪実測図……………	104
図29 屋敷内4号墳出土土器実測図……………	45	図60 塩原屋敷遺跡遺構外出土土器実測図……………	105
図30 三奈山古墳……………	47・48		
図31 三奈山古墳トレンチ・グリッド配置図……………	49	付図1 三奈山古墳土層断面図……………	
図32 三奈山古墳墳丘平面復元図……………	51	付図2 三奈山古墳墳丘構築状況図……………	
図33 旭・小島古墳群における各期の墳丘構築変化……………	54	付図3 塩原屋敷遺跡全体図……………	

## 写真目次

写真1	御手長山古墳G地点 周堀検出状況 [南東から]	写真5	塩原屋敷遺跡SD-17検出状況 [南東から]
	御手長山古墳G地点 SK 検出状況 [南西から]		塩原屋敷遺跡SD-1 検出状況 [北東から]
	坊主山古墳A地点 周堀検出状況 [北西から]		塩原屋敷遺跡SD-4 検出状況 [北西から]
	下野堂御手長山古墳A地点 周堀検出状況 [北西から]		塩原屋敷遺跡SD-10検出状況 [南東から]
	下野堂御手長山古墳B地点 石室検出状況 [西から]		塩原屋敷遺跡SD-11・12検出状況 [北西から]
	下野堂御手長山古墳B地点 石室検出状況 [東から]	写真6	御手長山古墳出土円筒埴輪
	下野堂御手長山古墳B地点 石室検出状況 [東から]		坊主山古墳出土円筒・朝顔形埴輪(1)
	三笠山古墳B地点 周堀検出状況 [南東から]	写真7	坊主山古墳出土円筒・朝顔形埴輪(2)
写真2	三笠山古墳空中写真 (昭和56年撮影)	写真8	坊主山古墳出土円筒・朝顔形埴輪(3)
	往時の三笠山古墳全景 [南から]	写真9	坊主山古墳出土土形象埴輪(1)
	三笠山古墳周堀検出状況 [西から]	写真10	坊主山古墳出土土形象埴輪(2)
	三笠山古墳周堀検出状況 [陸橋部分]	写真11	坊主山古墳出土土形象埴輪(3)
	三笠山古墳西断面中央付近盛土状況	写真12	坊主山古墳出土土形象埴輪(4)
	三笠山古墳東断面中央付近盛土状況	写真13	坊主山古墳出土土形象埴輪(5)
	三笠山古墳南断面中央付近盛土状況		坊主山古墳出土土器
	三笠山古墳北断面中央付近盛土状況 (矢印はFA 検出部分)	写真14	下野堂御手長山古墳出土鉄製品
写真3	三笠山古墳E地点 周堀検出状況 [北西から]		屋敷内4号墳出土土器
	屋敷内4号墳A地点 周堀検出状況 [東から]	写15	旭・小島古墳群遺構外出土遺物(1)
	屋敷内4号墳A地点 周堀検出状況 [北西から]	写16	旭・小島古墳群遺構外出土遺物(2)
	塩原屋敷遺跡 内出前IIA地点 調査区全景 [北東から]	写17	旭・小島古墳群遺構外出土遺物(3)
	塩原屋敷遺跡 内出前IIA地点 調査区全景 [北東から]	写18	旭・小島古墳群遺構外出土遺物(4)
	塩原屋敷遺跡SF-2 検出状況 [東から]	写19	旭・小島古墳群遺構外出土遺物(5)
	塩原屋敷遺跡SF-3 検出状況 [北西から]	写20	旭・小島古墳群遺構外出土遺物(6)
	塩原屋敷遺跡SF-4 検出状況 [北西から]	写21	旭・小島古墳群遺構外出土遺物(7)
写真4	塩原屋敷遺跡SF-5 検出状況 [北から]	写22	旭・小島古墳群遺構外出土遺物(8)
	塩原屋敷遺跡SF-7、SD-21・22検出状況 [北東から]	写23	旭・小島古墳群遺構外出土遺物(9)
	塩原屋敷遺跡SD-1・7・8・9検出状況 [北東から]	写24	塩原屋敷遺跡出土遺物(1)
	塩原屋敷遺跡SD-1・8 検出状況 [北東から]		塩原屋敷遺跡出土遺物(2)
	塩原屋敷遺跡SD-1 検出状況 [北から]	写25	塩原屋敷遺跡出土遺物(3)
	塩原屋敷遺跡SD-2・3 検出状況 [南西から]	写26	塩原屋敷遺跡出土遺物(4)
	塩原屋敷遺跡SD-14・16検出状況 [東から]		塩原屋敷遺跡出土遺物(5)
			塩原屋敷遺跡遺構外出土土器・弥生土器・石器
			塩原屋敷遺跡遺構外出土円筒・朝顔形埴輪(1)
			塩原屋敷遺跡遺構外出土円筒・朝顔形埴輪(2)
			塩原屋敷遺跡遺構外出土土器
			三笠山古墳のテラフラ顕微鏡写真



## I 調査に至る経過

昭和63年本庄市長織茂良平から、市内小島地区において「小島西土地区画整理事業」の計画があり、これに関係する埋蔵文化財の所在及び取扱いについての協議の申し入れが本庄市教育委員会に出された。本庄市長から協議のあった「小島西土地区画整理事業計画」は、本庄市大字小島、下野堂、万年寺地区におよぶ大規模なものであり、道路、下水道の整備計画域も広範であることから、当該事業地に埋蔵文化財が所在する場合、相当程度の影響が及ぶことが予測された。本庄市教育委員会事務局では、これを受けて、埼玉県教育委員会発行の「本庄市遺跡分布地図」をもとに、当該開発計画予定地における埋蔵文化財包蔵地の所在を確認した。その結果、同地には埼玉県選定重要遺跡である旭・小島古墳群（53-171）の所在することが判明した。

本庄市教育委員会では、このような状況を踏まえ、ただちに旭・小島古墳群の保存について本庄市と協議を開始した。その結果、本庄市教育委員会教育長と本庄市長との間で、旭・小島古墳群の保存に関する「本庄都市計画事業小島西土地区画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」が締結され、1）事業施行区域は埼玉県選定重要遺跡の範囲内であることから、現在丘を有する古墳のみならず事業区全域協議対象とすること、2）本庄市指定文化財131号古墳（万年寺八幡山古墳）、132号古墳（万年寺つじ山古墳）、136号古墳（蜷影山古墳）、137号古墳（山の神古墳）の4古墳は保留地として公有地化を図るとともに、周堀についても可能な限り現状保存を図ること、3）前項に掲げた古墳以外については、古墳跡その他すべての遺構について発掘調査の対象とし、確実な記録保存の措置を講ずること、4）調査の結果重要な遺構が発見された場合は、保存措置について協議すること等が謳われた。

この協定書の締結を経て、本庄市教育委員会は、昭和63年8月25日付け本教社発第229号で、埼玉県教育委員会あてに当該開発計画にかかる埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。埼玉県教育委員会からは平成63年12月28日付け教文第847号で「埋蔵文化財の取り扱いについて」の回答があり、1）本庄市教育委員会教育長と本庄市長が締結した「本庄都市計画事業小島西土地区画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」のとおり実施すること、2）ただし、市指定文化財135号古墳（前の山古墳）の石室については調査終了後、136古墳（蜷影山古墳）、137号古墳（山の神古墳）の存在する公有地に復元保存し、活用を図ること、3）調査中に重要な遺構等が確認された場合には、別途協議を行うことの指導があった。

現地での発掘調査は平成元年4月から開始し、平成20年度をもって終了した。調査原因は、道路・下水道建設、調整池整備、個人住宅その他建造物の建設、曳家、宅地、駐車場その他の造成工事等開発行為に伴うものが主であるが、136号古墳（蜷影山古墳）、137号古墳（山の神古墳）等公有地化の図られた区域は、公園としての土地利用が計画されており、これらについては保存整備を目的とした範囲確認調査も実施している。整理調査は発掘調査と平行しつつ平成元年度から断続的に行っている。

なお、各地点の発掘調査ならびに整理調査期間、調査担当者、調査原因・目的、調査面積等の情報は各節の冒頭に記したとおりである。

## II 遺跡の環境

### 1 地理的環境

本庄市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地、さらにその南方に連なる山地とに大別される。低地には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。台地は身馴川（小山川）扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川（小山川）扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、大久保山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、小山川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。神流川扇状地は群馬県藤岡市浄方寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本庄市鶴森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。また、山地は上武山地の北縁にあたり、奥秩父山地に比べ浸食が進み、谷が広く、起伏の少ない地形を特徴としている。本書に報告する旭・小島古墳群は、本庄市小島から上里町神保原にかけての本庄台地扇端部に立地している。台地縁辺部は東流する元小山川の浸食により比高差6～10mの段丘崖が発達している。

### 2 歴史的環境

本庄市が所在する児玉地域は、上野国に隣接し、武蔵国にありながら過去において常に隣国の影響下にあった地域である。また、古墳時代にあつては美里町南志戸川遺跡、同日の森遺跡などにみる畿内系、東海系土器の流入、本庄市ミカド遺跡で推定された初期須恵器窯の存在など、当該期における流通や生産の中心地としての地位を占めていたと考えられる。さらに、和泉期の竈導入に見るような先進性や格子タタキ調整技法による土器・埴輪から想定される渡来系工人の移入も含め、その地域的特殊性についてはすでに多くの議論がなされている。本節ではこれらの成果をふまえつつ、児玉地域の古墳の変遷を概観し、旭・小島古墳群をめぐる歴史的環境の理解としたい。

本庄市鷺山古墳は、現在、児玉地域において最古とされる古墳である（坂本1986）。女堀川中流域の丘陵上に位置し、手形形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後方墳となることが判明した。特異な形に広がる前方部の平面形や手形形土器の出土から、築造は前方後円墳集成畿内編年（広瀬1992、以下単に集成〇期と略す）2期以前に遡るものとされ、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は、口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部のみに穿孔を有し、ナデ調整による壺形土器に比べ、より儀器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階の資料とする理解も可能であり、鷺山古墳の帰属時期は、なお検討の余地を残すといえる。

美里町長板聖天塚古墳（径50m）は志戸川右岸の丘陵上に占地する円墳である。粘土櫛と木棺直葬の計6基の埋葬施設から稜雲文方格規矩鏡、獸首鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は鏡の型式、精製品を含む滑石製の刀子の形態などから、古墳時代前期後半を降らないと考えられる。



- ★旭・小島古墳群 1. 北原古墳群 2. 御堂坂古墳群 3. 塚合古墳群 4. 鶴森古墳群 5. 西五十子古墳群  
 6. 公卿塚古墳群 7. 有勝寺裏地輪窓跡 8. 前山1・2号墳 9. 塚本山古墳群 10. 四方田古墳群  
 11. 鷺山古墳 12. 金鑽神社古墳 13. 生野山古墳群 14. 生野山9号墳 15. 生野山將軍塚古墳  
 16. 蛭川地輪窓跡 17. 八幡山地輪窓跡 18. 今井古墳群 19. 本郷古墳群 20. 大御堂古墳群 21. 帯刀古墳群

図1 周辺の遺跡

また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長胴化の進行した特異な壘形埴輪を持ち、長板聖天塚古墳に次ぐ時期の築造とされる。大久保山丘陵上に立地する本市市北堀前山2号墳は従来、径28mの円墳とされてきたが本市市教育委員会による2・3次調査の結果一辺30m前後の方墳となること確認された(南毛古墳文化研究会2001・松本2002)。埋葬施設に粘土槨を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか周堀から土師器埴が検出されている。この北堀前山2号墳と同一尾根上の上位に位置する本市市北堀前山1号墳は、その立地から築造時期は北堀前山2号墳を遡るものと推定される。現在は径30~40mの円墳とされるが、墳裾から南西方向の尾根上に若干の高まりを認めることから、全長60~70m程度の方墳となる可能性も考えられている。

集成6期を前後する時期には、生野山丘陵の本庄市生野山將軍塚古墳(径60m)、同金鑽神社古墳(径68m)、女堀川流域の本庄市公卿塚古墳(径60m)などの大型の円墳が相次いで築造される。兎玉地方で古墳がもっとも大型化するのはこの段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葦石の存在も確認されている。また、生野山將軍塚・金鑽神社・公卿塚の3古墳では埴輪に格子タタキ技法の存在することが知られている。生野山將軍塚での実態は明らかではないが、公卿塚ではヨコハケ及びナデ調整によるものと併せ、金鑽神社古墳ではヨコハケを欠き、一次タテハケのみのものがこれに加わる。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでも初期須恵器、半島系軟質土器などの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来系工人の関与があった可能性は高い。

これら3古墳に比べてやや規模の小さい志戸川流域の美里町志戸川古墳(径40m)、小山川上流域の本庄市長沖157号墳(径32m)ではⅢ式の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志戸川古墳では短甲形埴輪の草摺部分が出土している。形象埴輪群全体の組成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている事実を確認できる。詳細は不明ながら志戸川左岸の水田地帯に存在する美里町道灌山古墳(径40m)、同勝丸稲荷古墳(径30m)もこの頃の築造と推定される。

これに対し、集成7・8期には前段階のような直径60mクラス的大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の長沖14号墳(径34m)、生野山丘陵の生野山9号墳(径42m)など30~40m台の円墳となる。なお、生野山9号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、古式群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳(径12m)、同77号墳(径14m)、本市市塚合古墳群の本庄東小学校1号墳(径19m)、同2号墳(径12m)、同旭・小島古墳群の三空山2号墳(径22m)、上前原5号墳(径26m)、杉の根7号墳(規模未詳)などいずれも10~20m前半台の小型円墳で、Ⅳ式の2条突帯3段構成の円筒埴輪を樹立し、TK208段階並行の土器を伴う。美里町広木大町古墳群、本市市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、深谷市白山古墳群などはやや遅れて、Ⅴ式の円筒埴輪とTK23・47段階並行の土器を出土する群集墳である。なお、神川町青柳古墳群では、集成9期前半に、いち早く横穴式石室を導入することが知られている。

集成10期に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展にともなってこの時期新たに出現してくる群集墳である。広木大町古墳群、塚本山古墳群、旭・小島古墳

群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋葬施設とする小型円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。

また、集成9期以降になると首長墓として前方後円墳が採用されるようになる。小山川上流域では本庄市長沖古墳群の長沖25号墳（40m）、同31号墳（51m）、同秋山古墳群の秋山諏訪山古墳（60m）、同生野山古墳群の生野山鏡子塚古墳（58m）、生野山16号墳（58m）、小山川中流の深谷市四十塚古墳群の寅稲荷古墳（52m）、本庄市塚合古墳群中の大林二子山古墳（規模未詳）、同旭・小島古墳群の下野堂二子塚古墳（規模未詳）、神流川流域の神川町青柳古墳群の白岩鏡子塚古墳（46m）、中新里諏訪山古墳（42m）などが知られる。

終末期には、前方後円墳に代わる首長墓として、深谷市前原愛宕山古墳（辺37m）のような大型の方墳や旭・小島古墳群の上里町浅間山古墳（径38m）のような大型の円墳が採用されている。また各地の群集墳も後期後半段階からの連続的な造営が確認できる。

埴輪生産遺跡は、児玉地域で4箇所を確認している。また、未確認ながら埴輪生産遺跡の所在を想定できる地点が複数存在している。この地域では、鴻巣市生田塚窯や深谷市割山窯のような大規模な操業は見られず、狭い地域に小規模な生産遺跡が散在する点に特色がある。

美里町宇佐久保埴輪窯跡は、上武山地の北東側に連なる丘陵の端部に位置し、南北を二つの小谷によって挟まれ、東方へ延びる舌状丘陵の北側裾部に占地している。埴輪窯跡は、採土により掘削された丘陵の断面で、いずれも焼土層の落ち込みとして確認されたもので、窯体の規模や構造が判明するものはない。分布調査において確認できた窯跡は12基で、掘削による丘陵断面はさらに東西方向に延長していたが、他には窯跡を認めなかったことから、報告者はこの丘陵斜面に構築された窯の総数は、調査時に確認した12基を上回らないと予測している。

本庄市八幡山埴輪窯跡は、かつて県立児玉高等学校の敷地内に所在した埴輪窯跡群である。1930年、八高線敷設工事の土取り中に発見され、その際、人物埴輪、馬形埴輪などが出土した。その後、1961に高等学校の校地拡張工事に伴い、2基の埴輪窯を調査している。窯は「半地下式有段登窯」とされ、円筒埴輪、女子人物埴輪の頭部を検出している。現在、遺物の所在が明らかではなく、窯の操業年代、埴輪の型式の特徴などは不明である。

本庄市赤坂埴輪窯跡は、女堀川右岸の本庄台地北東端部に位置する。工場建設に際する整地作業中に、焼土とともに馬形埴輪が出土し、また、その後、工場内に機械を設置するために掘削を行ったところ、ふたたび焼土とともに大型の馬形埴輪と家形埴輪が出土したことなどから埴輪窯跡の存在が想定されている。本庄市教育委員会では、この際出土したと考えられる家形埴輪片1点を保管している。

本庄市有勝寺裏埴輪窯跡は近年の確認調査で、5基以上の窯跡が比較的良好な状態で遺存していることが確認された。遺物は鞍形埴輪4点、騎形埴輪1点をはじめ、家、大刀、鞆、馬、人物など多種の形象埴輪を出土している。円筒埴輪は外面二次調整を欠き、板押圧による基部調整を施す個体がみられること、各種器財埴輪が出揃っていることから、操業時期は6世紀後半段階以降のものと推定される。

なお、実態は全く不明ながら、美里町から深谷市にかけての山崎山周辺にも埴輪生産遺跡の存在を指摘する意見がある（橋本・佐々木ほか1980）。

### 3 旭・小島古墳群の概要

旭・小島古墳群は本庄古地北縁部に立地し、本庄市小島地区から上里町神保原地区にかけて分布する。群中央に南南西から北北東方向へ伸びる埋没谷が存在し、現在でも微低地を形成しており、古墳群はこの微低地を隔てて大きく東西二群に分れる。前方後円墳、帆立貝式古墳、円墳、方墳の混成による古墳群で、前期から終末期まで、断続的な造営を認める。以下、時期を追って古墳群の形成過程を概述する。

旭・小島古墳群の形成は西群に群在する方墳の築造をもって開始されると考えられる。方墳は現在まで20基余りが検出されている。万年寺つつじ山古墳（辺25m）は、高さ1.7mの墳丘が残存し、確認調査時に、表土直下で、刀子、斧、直刃鎌、短冊形鉄斧などの石製模造品が出土している。出土地点は墳丘中心から北西方向に大きく外れる位置にあり、埋蔵施設その他の遺構に伴う状況とは認定できない。直刃鎌、短冊形鉄斧を含むことから集成4期後半に該当すると考えられる（南毛古墳文化研究会2001、太田・松本2005）。

下野堂10号墓（辺24m）では、周堀の立ち上がり部から石剣が出土している。碧玉製とされ、埋蔵施設に伴う状況では確認されていないが、型的には古墳副葬品のうちに見られる石剣と同形の資料である（並木1976）。

林10号墳、同20号墳は、1辺30mを超える方墳で、群集墳を主体的に構成するような小型円墳をはるかに凌ぐ規模を有する。また、林13号墳（辺10m）では、木棺直葬と推定される埋葬施設が検出されている。

これらの方墳は、これまで「方形周溝墓」として一括される場合が多かった。しかし、最近の調査の結果、円墳とされてきた本庄市北堀前山2号墳が、一辺25m方墳である事実が確認されたこと、万年寺つつじ山古墳・下野堂10号墓などに見るように方墳の副葬遺物に古墳副葬品と同様の品目が含まれていること、さらに古墳時代前・中期の小型方墳群が各地に確認できることなどから、旭・小島古墳群の方形墳墓についても古墳とすることが妥当である。

万年寺八幡山古墳（径43m）は、埋葬施設に箱式石棺を有することが知られていたが、近年の確認調査で石棺内から鉄剣2本が出土した。この箱式石棺は墳丘中心を大きくはずれる位置にあることから、同墳には墳丘中央部に未確認の中心埋葬施設が存在すると考えられる。埴輪を伴わず、数次の周堀調査によっても土器類を検出できていないため築造時期の詳細は不明で、集成4期に遡る可能性も考えられる（南毛古墳文化研究会2001）。南東側の万年寺つつじ山古墳とは相互の墳丘が近接することから、周堀の重複が予想されるが、遺構上での前後関係は判明していない。

集成5・6期に属する古墳は少ない。林8号墳（径30m）のように埴輪をもたず、和泉式の土師器をわずかに出土する古墳がみられる。当該期の児玉地域の首長墓は、本庄市公卿塚古墳（径65m）、同金鑽神社古墳（径68m）、同生野山將軍塚古墳（径60m）、美里町志渡川古墳（径40m）などの大・中型円墳の存在が目立つが、現状において旭・小島古墳群にはこれらに匹敵する中期の有力古墳が認められない。また、上記の諸古墳にはすでに埴輪の樹立も認められるが、旭・小島古墳群では埴輪の導入も他に遅れるようである。

集成7期には群集墳の築造が開始され、埴輪も導入される。三志山2号墳（径43m）では、外面二次調整B種ヨコハケの円筒埴輪に和泉式後半期の土師器内斜口縁杯が共伴する。また、上原原5号墳

(径26m)でも外面二次調整B種ヨコハケの円筒埴輪を備えることが判明しており、東群の形成も集成7期には確実に始まっている。円筒埴輪は二条突帯三段構成の小型品で、半円形の透孔をもつ。家、人物、馬などの形象埴輪は確認できない。北浦3号墳は埴輪をもたないが、出土した直立口縁をもつ土師器坏は、典型的な坏蓋模倣坏出現以前の型式で、和泉期後半段階に該当し、築造時期は集成7期に遡る。さらに、出土遺物がなく所属年代を確定できない小型円墳の中にも、当該期の築造される推測される事例が含まれる。

集成8期においても群集墳の造営は継続し、三空山8号墳(規模不詳)では円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに家、女子人物、男子武装人物、盾持人物、馬など豊富な形象埴輪が加わっている。武装人物は埼玉稲荷山古墳出土例に酷似した眉庇付冑の表現があり注目される。この集成8期前後には、三空山7号墳(29m)などの帆立貝式古墳を中核とし、その周囲に低平な墳丘をもち、竪穴系埋葬施設を備える小規模な円墳が数多く築造されるようになり、前段階からの連続的な造営を認めることができる。

集成7・8期において活発な群集墳の造営は、つぎの集成9期に入ると一時的に停滞するようで、旭・小島古墳群では、いまのところ集成9期の古墳は見当たらない。

これに対し、集成10期になると古墳の造営はふたたび活発化し、とくに東群には大型の円墳が集中するようになる。小島御手長山古墳(径42m)はそれらの中で最大の規模を有し、角閃石安山岩を用いた横穴式石室が検出されている。副葬品に挂甲、直刀、鉄鏃、馬具などがあり、埴輪は円筒、朝顔、家、人物、大型の馬などが出土している。隣接する坊主山古墳(径35m)、山の神古墳(径40m±)、蚕影山古墳(径25m)、前の山古墳(径30m±)なども、埋葬施設に横穴式石室を備え埴輪を樹立する古墳で、築造時期はいずれも集成10期段階に降ると考えられる。坊主山古墳では、かつて直刀、刀装具、鉄鏃、玉類が出土したことがあり、前の山古墳でも耳環、ガラス玉を検出している。山の神古墳、蚕影山古墳、前の山古墳では段築、墓石の存在が確認されている。

いっぽう、西群の上里町側にも神保原浅間山古墳(径30m)があり、横穴式石室からは直刀、鉄鏃、耳環、玉類のほか銅鏡1点が出土している。同じく西群の南端部に位置する下野堂二子山古墳は旭・小島古墳群中で唯一の前方後円墳である。墳丘はすでに削平を受け、段築・墓石・埋葬施設などの状況は不明であるが、航空写真・地籍図の分析から全長60m前後の規模と推定される。試掘調査では年代を示す資料を得られていないものの、埴輪をもたないことから集成10期後半の築造が考えられている。

終末期には、下野堂開拓1号墳(径22m)、下野堂御手長山古墳(径22m)、堂場地区に集中する堂場1～9号墳など、不整形の周堀をめぐらす直径10～20m前半の円墳が知られる。下野堂開拓1号墳(径22m)は石室攪乱層からは鉄製の金交具、刀子、釘が出土し、石室前庭部から大量の土師器・須恵器片のほか青銅製の巡方3点、丸柄2点が検出されている。堂場1～9号墳では7世紀前半から後半までの土器が相伴しており長期間の追葬が想定される。これら終末期の古墳は、北側の台地縁辺から離れ、群の南寄りに分布する傾向が認められる。とくにJR高崎線以南に分布展開する古墳は、下野堂二子山古墳を除き、すべて終末期の古墳であり、この時期、群の中央に伸びる埋没谷の奥部に新たな墓域を展開していることがわかる。なお、終末期には首長墳として方墳を採用する地域もあるが、群内ではいまのところ確認できない。

- 1 小島御手長山古墳
- 2 坊主山古墳
- 3 下野堂御手長山古墳
- 4 屋敷内 4 号墳
- 5 三基山古墳
- 6 御影塚古墳
- 7 万年寺八幡山古墳
- 8 万年寺つつじ山古墳
- 9 林 8 号墳
- 10 林10号墳
- 11 林20号墳
- 12 北浦 3 号墳
- 13 前の山古墳
- 14 蒸影山古墳
- 15 山の神古墳
- 16 上前原 5 号墳
- 17 下野堂二子塚古墳
- 18 開拓 1 号墳
- 19 杉ノ根 1 号墳
- 20 下野堂10号墳
- 21 石神塚古墳
- 22 屋敷内 3 号墳
- 23 三基山 2 号墳
- 24 三基山 6 号墳
- 25 三基山 9 号墳

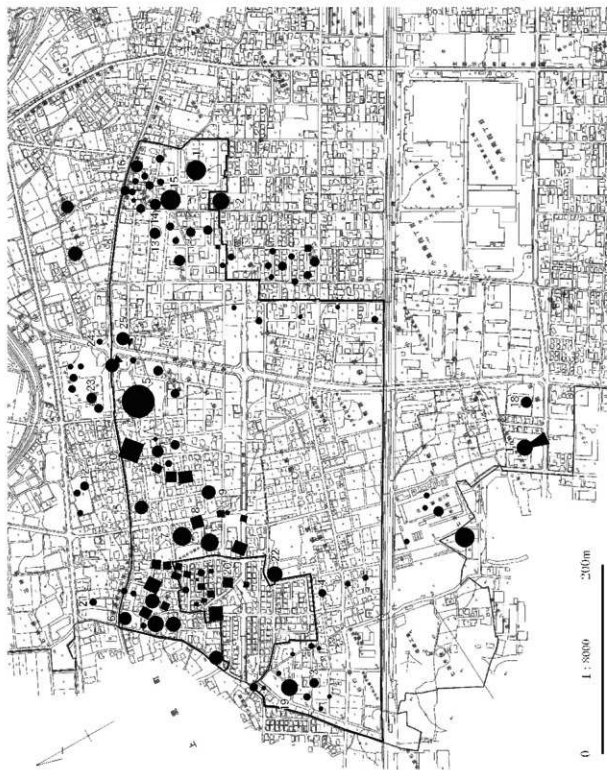


図 2 旭・小島古墳群分布図





图3 居住区位置图

### III 調査の成果

#### 1 御手長山古墳

[G地点]

調査期間 平成18年10月17日～平成18年11月14日

調査面積 306㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係 松本完・的野善行

##### (1) 遺構

##### a. 墳丘

G地点の調査では、墳丘の調査を行っていないが、墳丘に相当する範囲で、いわゆる旧表土の黒褐色土の堆積を確認している。黒褐色土の範囲がそのまま墳丘の範囲を示すものではないが、黒褐色土層を近世以降の耕作土が被覆していることから見て、墳丘の削平が比較的新しい時期であることが判る。

##### b. 周堀

G地点の調査では、周堀の南東の一角を調査した。周堀は、調査地点のほぼ中央を斜めに横切っており、周堀内縁の調査区界北壁寄りの一角を攪乱により壊されている。また、周堀外縁の一部は、1号土坑を切って構築されている。調査地点ほぼ中央での周堀の幅は、9.5m前後である。断面形は、墳丘側がやや深くなる船底形で、墳丘側最深部での深さは44cm、中央での深さは25cm前後である。堀底は、角礫の混じるシルトがかったロームを掘り込んで造られており、全体に凹凸が著しい。

覆土は、調査区界の南北壁でやや異なるが、南壁を例にとれば、As-Aを含む粒子の粗い表土層が周溝覆土を被覆し、周溝覆土の上層は、旧表土の黒褐色土が混じるやや粒子の粗い暗褐色土、中層は黒褐色土を主とする土、下層は基層のロームと黒褐色土の混じりあった暗褐色土が堆積するという状況である。北壁では、南壁で見られた黒褐色土を主とする層が墳丘側に偏り、全体に黒褐色土が分散する傾向が見られるようであった。

##### c. 1号土坑

G地点のほぼ中央、調査区界の北壁に接する位置で検出した。調査できたのは、遺構の南西半のみである。小島御手長山古墳の周堀と重複し、北側坑壁の一部を壊されている。確認面は、ローム層上面である。

平面形は、やや不整な楕円形、あるいは卵形と推定され、現存長は、197cmである。断面形はU字状に近く、底面はかなり狭小である。最深部での深さは、88cmである。覆土は、18層に分けられた。全体的にロームと暗褐色土、黒褐色土の混合土からなり、中層に黒褐色土を主とする土層が見られ、下部にロームが卓越する土層が集中するようであった。

遺物は一切検出できなかったが、覆土から見て古墳時代以前の遺構の可能性があるとと思われる。

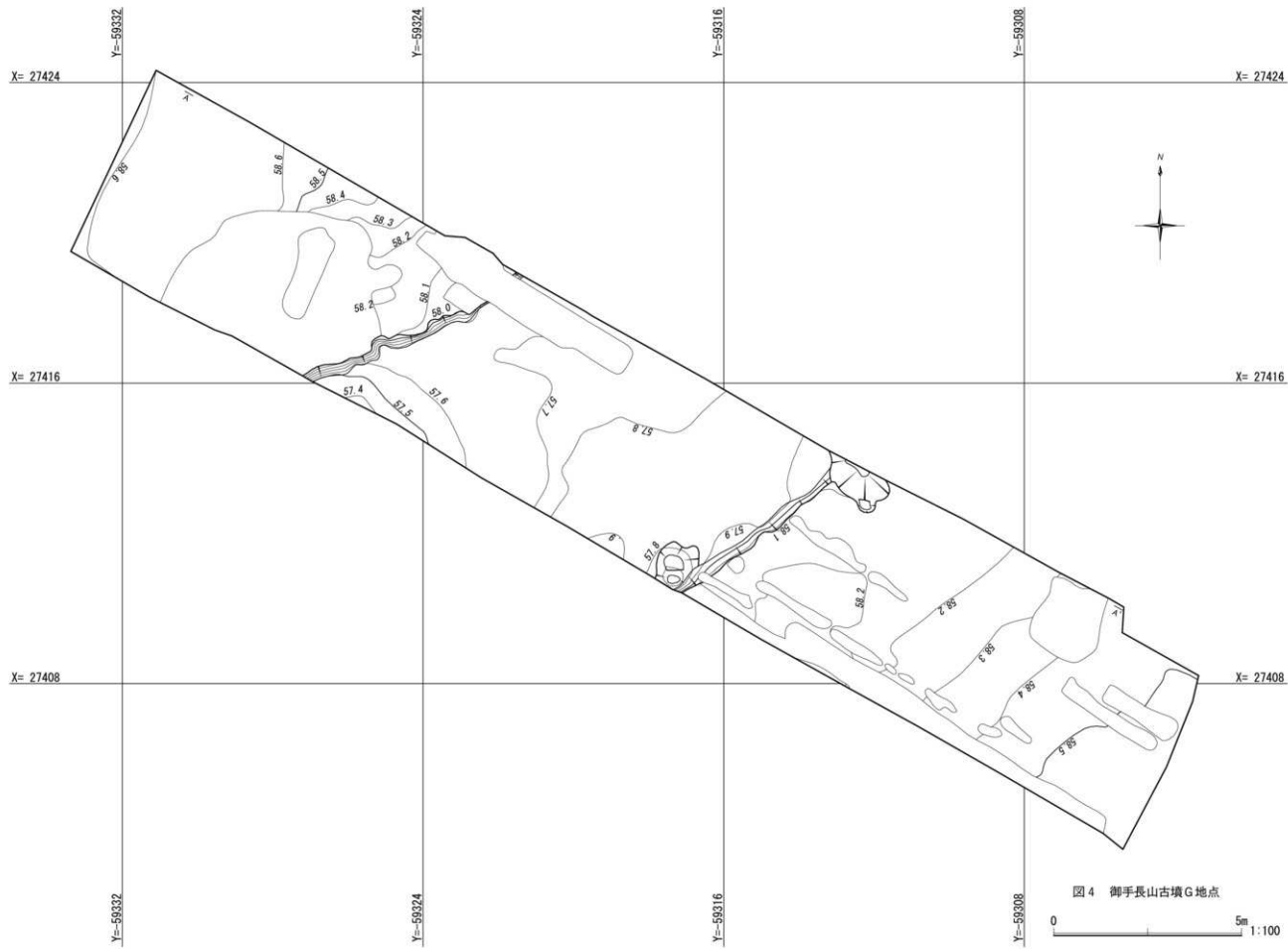
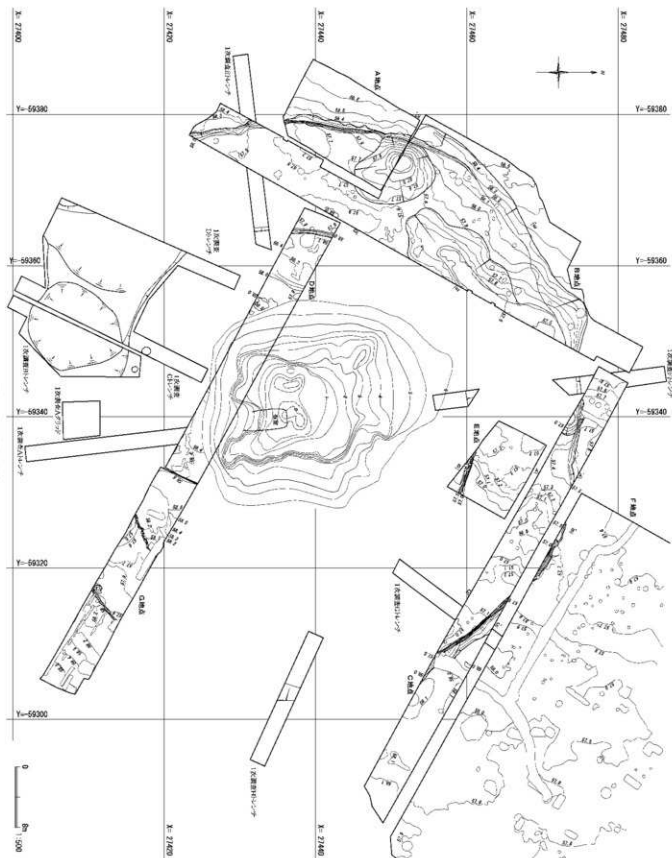
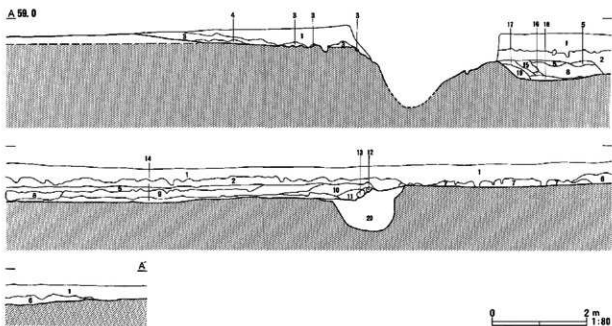


图4 御手長山古墳G地点

図5 獅子長山古墳



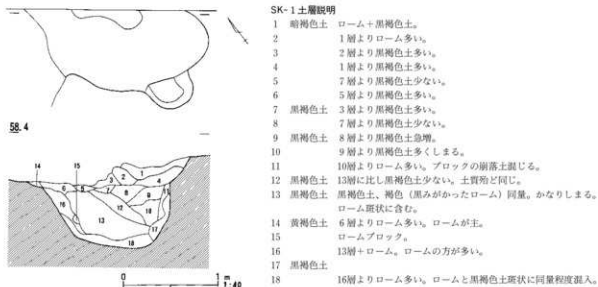


御手長山古墳 G 地点土層説明

- 1 褐色土 10~20mm大の円礫含み、埴輪をかなり含む藍土。(AS-A 含みザラザ)
- 2 褐色土 5~20mm大の礫かなり含む。1層よりゴミ少ないか。表土の一種。
- 3 褐色土 5層に近いがAS-A 多量に含む。
- 4 褐色土 3層に近いがAS-S が少ない。
- 5 褐色土 AS-A 入るか。褐色土+黒褐色土。ガサガサ。
- 6 ローム+暗褐色土 ロームはブロック状
- 7 黄褐色土 5~50mm大の大小ロームブロックを斑状に含むロームを主に、暗褐色混色土。
- 8 暗褐色土 黒褐色土と暗褐色土(砂っぽいAS-B、全体にかなりの量入る)の不規則なラミナ。モヤモヤ迷彩様。ローム斑状に入る。礫多く含む。

- 9 暗褐色土 AS-A 多量に含む。
- 10 暗褐色土 9層より黒褐色土少ない。礫も少ない。
- 11 暗褐色土 10層に比しローム多い。
- 12 黄褐色土 10層+ロームの大ブロック。
- 13 黄褐色土 10層+ロームの大ブロック。
- 14 暗褐色土 9層+くすんだ(白みがあった)ローム。礫(5~50mm大)も多い。
- 15 8層に比し黒褐色土少ない。ローム多い。
- 16 8層に比し黒褐色土少ない。15層より多い。
- 17 8層に比し黒褐色土少ない。15層より多い。
- 18 8層に比し白みがあった(くすんだ褐色または黄褐色)ローム。
- 19 17層に近いがロームが多い。
- 20 土坑覆土

図6 御手長山古墳 G 地点土層断面図



SK-1 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム+黒褐色土。
- 2 1層よりローム多い。
- 3 2層より黒褐色土多い。
- 4 1層より黒褐色土多い。
- 5 7層より黒褐色土少ない。
- 6 5層より黒褐色土多い。
- 7 黒褐色土 3層より黒褐色土多い。
- 8 7層より黒褐色土少ない。
- 9 黒褐色土 8層より黒褐色土急増。
- 10 9層より黒褐色土多くしまる。
- 11 10層よりローム多い。ブロックの崩落土混じる。
- 12 黒褐色土 13層に比し黒褐色土少ない。土質殆ど同じ。
- 13 黒褐色土 黒褐色土、褐色(黒みがあったローム)同量。かなりしまる。ローム斑状に含む。
- 14 黄褐色土 6層よりローム多い。ロームが主。
- 15 ロームブロック。
- 16 13層+ローム。ロームの方が多い。
- 17 黒褐色土
- 18 16層よりローム多い。ロームと黒褐色土斑状に同量程度混入。

図7 SK-1 平面図および土層断面図

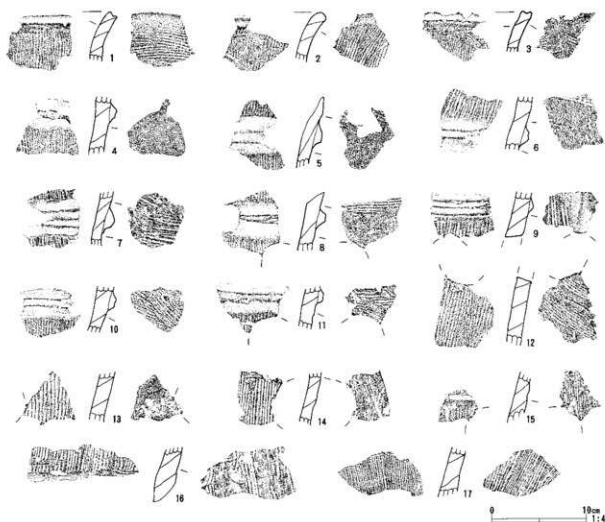


図8 御手長山古墳出土円筒埴輪実測図

## (2) 遺物

遺物は周堀覆土から少量の埴輪片を出土しているのみである。埴輪はすべて円筒で、形象埴輪片を含まない。土師器・須恵器などの供献土器も検出されていない。

### a. 埴輪

#### 円筒埴輪 [1~17] (図8、写真6)

資料は小片のみであるが、これまでの調査から、小島御手長山古墳の円筒埴輪は、3条突帯4段構成品が主体を占めることが判明している。4条突帯以上の大型品を含む可能性も考えられているが、本調査区出土の資料にはそれと確定しうる個体は含まれない。

外面調整はいずれも1次調整のみで、2次調整を施すものは見られな。今回の資料には含まれないが、底部調整に板押圧を用いる例のあることが確認されている。内面調整は縦位および斜位のハケおよびナデである。

1~3は口縁部付近の破片である。口唇部まで丁寧に成形されており、1・3は端部が凹面をなす。口唇部周辺には横位のナデを施しているが、1・3は外面側のナデを省略している。

4～11は突帯を含む破片である。突帯断面形は台形や崩れたM字形を呈するものが主体を占め、9のような断面形が三角形を呈するものが僅かに見られる。

8～12は透孔を含む破片である。透孔全体を確認できる個体は存在しないが、これまでの出土資料と同様に、いずれも円形を呈するものと推定される。

胎土は、16以外、比較的多く砂粒を含有している。16はごくわずかな砂粒を含むのみで、緻密な胎土を用いている。すべての個体に雲母もしくは雲母片岩の混入が確認される。焼成はいずれも良好で、還元焼成の個体も認めない。色調は2・10・15が暗赤褐色、他はいふい橙褐色を呈する。

### (3) 小 結

本調査区で検出の埴輪片は、すべて円筒埴輪であった。埴丘南側から西側にかけてを対象とした1次調査区やA・B地点では、人物・馬・各種器財などの多数の形象埴輪片を検出しており、今回は様相が大いに異なる。形象埴輪の配列位置が南側の石室開口部周辺から埴丘西側に偏っていたことを示すものだろう。

## 2 坊主山古墳

### [A地点]

調査期間 平成4年9月25日～平成4年9月26日

調査面積 55㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本市市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### (1) 遺 構

本市小島3丁目地内にあって、北東側に小島御手長山古墳、北西側に上前原16号墳が存在する。埴丘および埋葬施設は、昭和30年代の土取り工事により消滅しているが、工事に並行して副葬遺物の回収が行われ、現在は本市市教育委員会の保管となっている。また、昭和55・56年度に埴丘南東側の範囲確認調査が実施され周堀を確認している。今報告の調査は北西側の周堀外側の立ち上がりを部分的に検出したのみであるが、昭和55・56年度の範囲確認調査の結果とあわせ、原形は直径35m前後の円墳であったと推定される。周堀幅は地点により一定せず、埴丘東側で約10mを測るのに対し、埴丘南側では5m以下に狭まっている。今報告の調査区は埴丘北西側にあたるが、周堀外側の立ち上がりは、埴丘裾部の想定線と相似せず、この付近で外側に拡大していることが推定される。埋葬施設に横穴式石室を備える段階の古墳においてしばしば認められるように周堀外形線は顕著な不正形を呈していたものと思われる。確認面から周堀底までの深さは50cmを測り、周堀覆土にはロームブロックを含む暗褐色土ないし灰褐色土の堆積が観察される。As・B・Hr・FAの堆積はともに確認できない。

### (2) 遺 物

遺物は遺構確認面および周堀覆土上層から多量の円筒埴輪片のほか少量の土師器片を検出して居る。原位置をとどめる個体は認められない。

なお、昭和55・56年度の範囲確認調査の時点では、多量の埴輪片と石室構築材と思われる角閃石安山岩片が散布していたという。また、昭和30年代の土取り工事に前後して採集された形象埴輪片を今

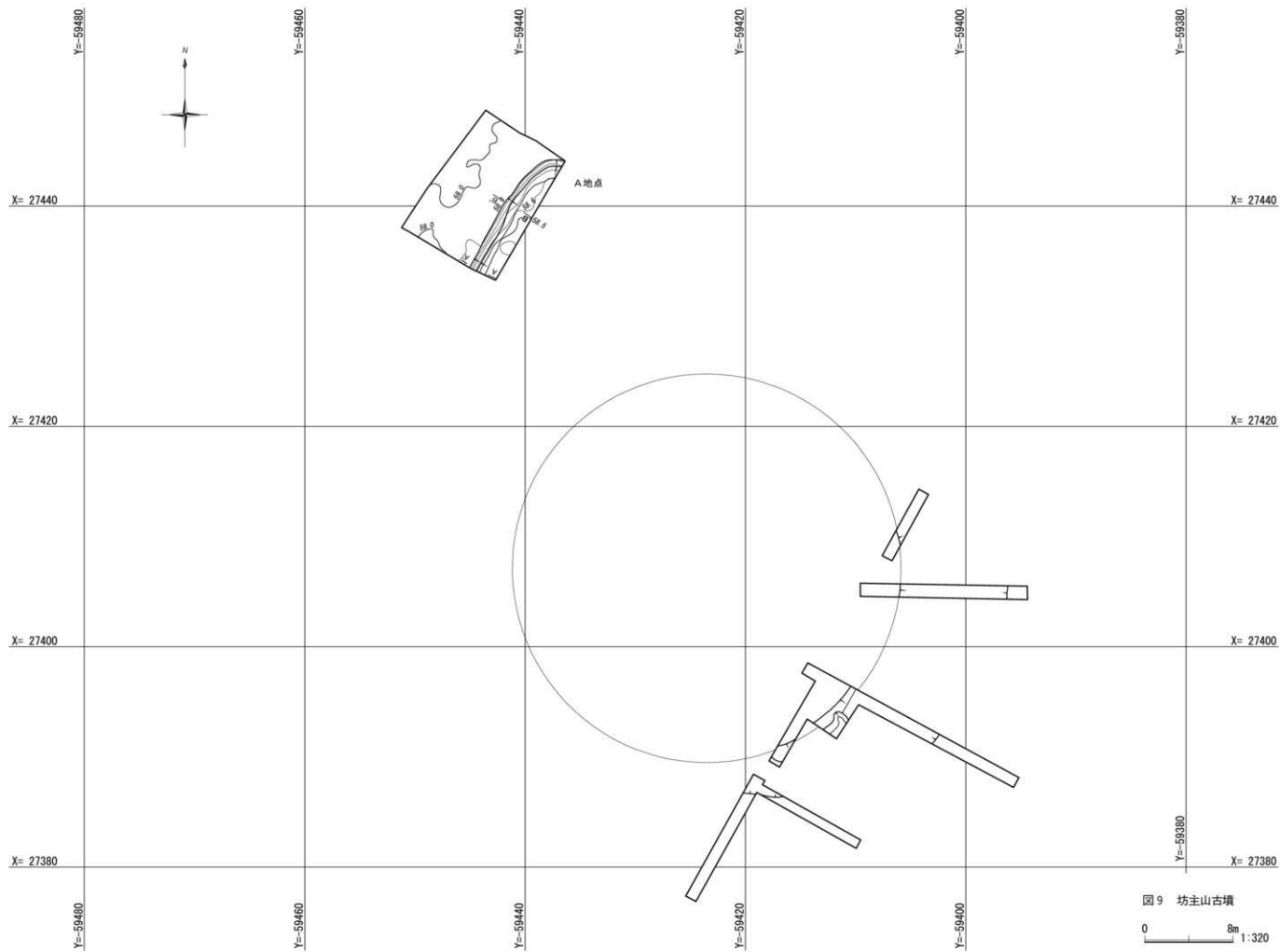


图9 坊主山古墳

0 8m 1:320



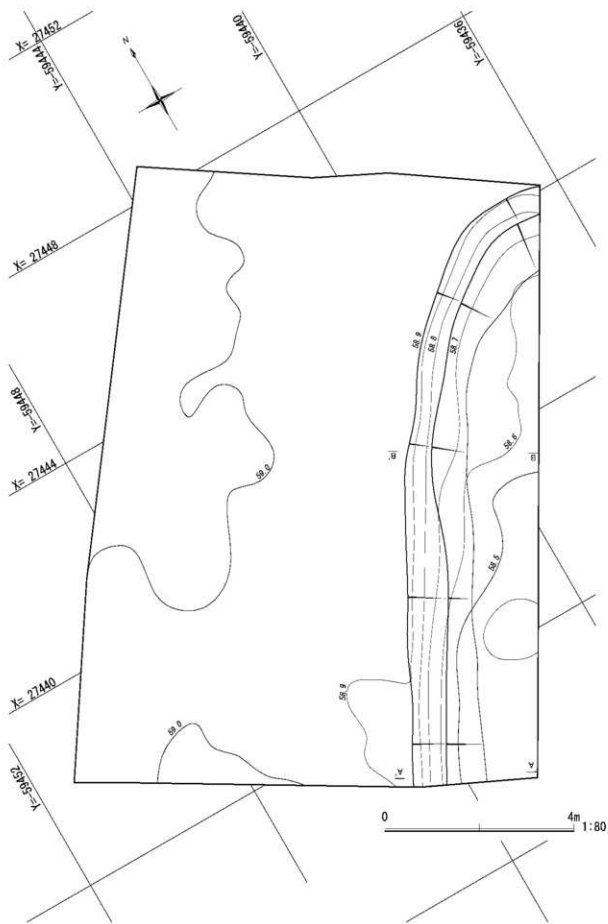


图10 坊主山古墳A地点

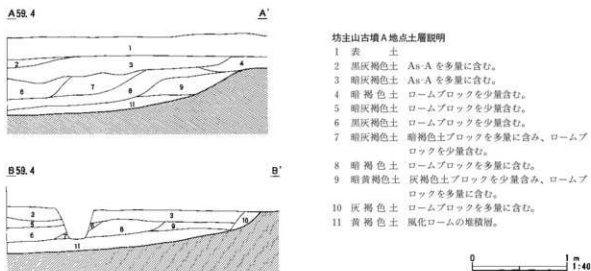


図11 坊主山古墳土層断面図

報告に併載した。

#### a. 埴 輪

##### 円筒埴輪 [1~20] (図12・13、写真6~8)

円筒埴輪は全形の判明する資料が存在しないが、1・3のように第3段に透孔を配する個体が存在することから3条突帯4段構成品が含まれることは確実である。3・4のように第1段の伸長化が顕著である一方最上段幅の狭い個体が目立つ。

外面調整はいずれも縦位のハケによる一次調整のみで、二次調整を欠いている。16・20には板押圧による底部調整を施している。内面調整は縦位のハケないしナデによる。口唇部は内外面・端面とも横位のナデを施すもののほか、5のように端面以外は無調整の個体も見られる。

突帯は断面形が崩れた台形を呈するものと三角形を呈するものが相半ばする。透孔は2個1対で、形態は円形のみを確認できる。1の第4段外面には直線状の、14の外面には弧状の刻線が観察される。

胎土はすべてにチャートを含み、片岩の観察される個体も多い。12には角閃石安山岩の混入を認める。焼成は12・19が還元気味となっている。色調は橙色または褐色系を呈する個体が多く、12・19は焼成の関係で黄灰色系を示す。

##### 朝顔形埴輪 [21・22] (図13、写真8)

朝顔形埴輪は2点を確認できるにとどまる。21は口縁部上段の破片で、口唇部付近で強く外湾している。22は胴部最上段から頸部にかけての破片である。胴部最上段に円形の透孔を配する。肩部は丸みをもって立ち上がり、頸部は明瞭に括れている。

外面調整は縦位のハケによる一次調整のみで、二次調整を欠いている。内面調整は胴部から頸部が縦位および斜位のナデ、口縁部が縦位および斜位のハケとなっている。刻線は観察できない。21・22ともに胎土には片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

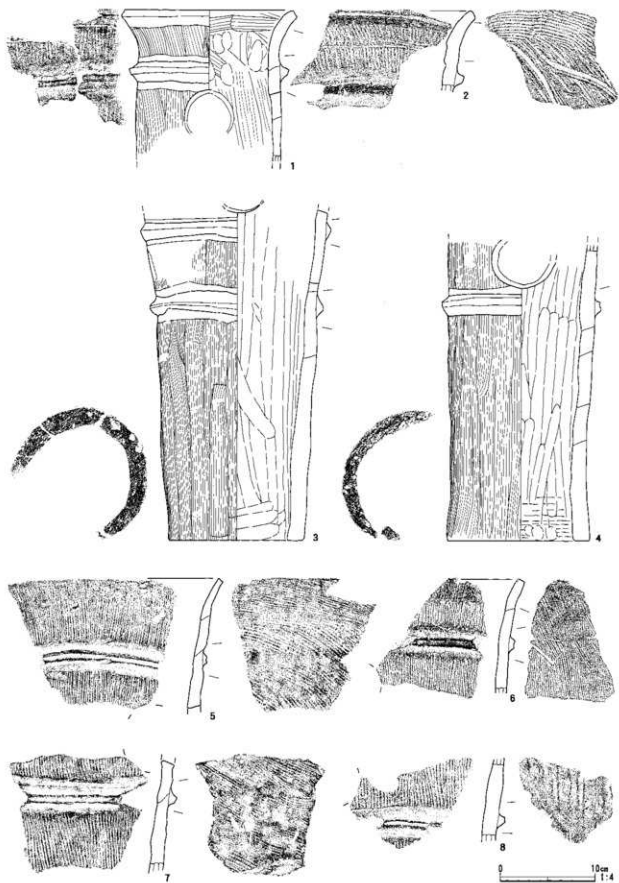


图12 坊主山古墳出土土円筒・朝顔形埴輪実測図(1)

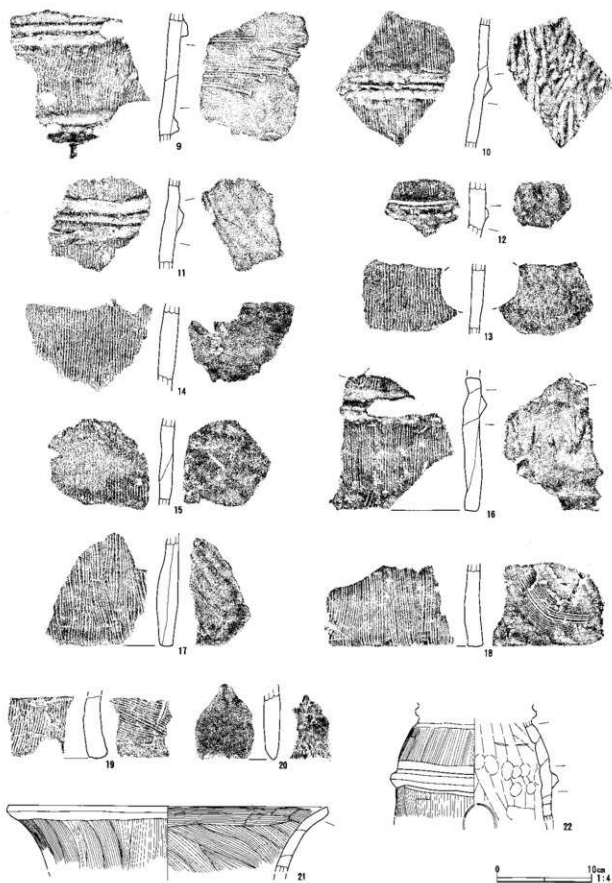


图13 坊主山古墳出土土円筒・朝顔形植輪実測図(2)

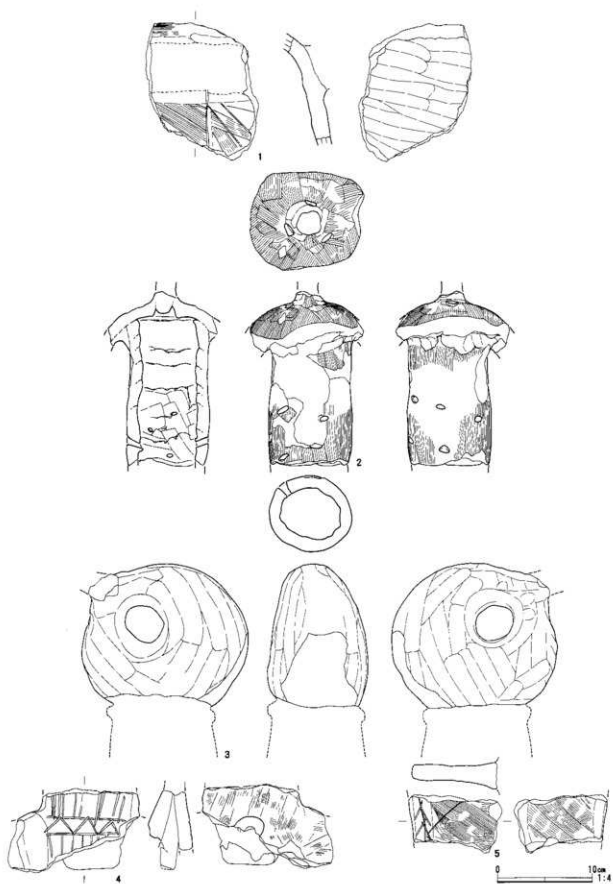


图14 坊主山古墳出土土形象埴輪実測図(1)

#### 形象埴輪 [1～53] (図14～19、写真9～13)

##### 家 [1] (図14、写真9)

家の屋根上部で棟に近い箇所の破片である。上端部は緩やかに湾曲している。外面には横方向に幅広いの剝離痕があり、縦位および斜位の刻線が認められる。調整は外面が斜位のハケ、内面が斜位のナデとなっている。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

##### 蓋 [2] (図14)

やや異形ではあるが、蓋と判断した。笠部は緩やかに湾曲し、中央には立ち飾りになるとと思われる棒状の部品が立ち上がっている。立ち飾りの基部近くには3カ所にヘラ状工具による長楕円形の小孔を配している。軸部は細長い円筒状となり、ここにもヘラ状工具によって斜め上方から長楕円形の小孔を複数穿っている。調整は笠部上面が放射状のハケ、軸部表面が縦位のハケ、軸部内面が縦位のハケとなっている。軸部内面には明瞭な粘土紐の積み上げ痕が観察される。胎土に片岩・チャートを含み、色調はにぶい褐色を呈する。

##### 柄 [3] (図14、写真9)

台部は完全に失われている。表現は全体に簡略化され、本体は円環状を呈し、縫い目、革緒の表現も省略している。調整は全面ナデでハケの使用は認められない。胎土に片岩・チャートを含み、色調は明赤褐色を呈する。

##### 靱 [4] (図14、写真9)

矢鏃部の下位から筒部の上位にかけての破片である。矢鏃は刻線で表現する。矢鏃部と筒部の境界に横2条の刻線があり、間に鋸歯状の刻線を加えている。筒部にも縦位の刻線を施し、筒部背面には円形の透孔を穿っている。調整は正面がナデ、背面にはハケののち粗くナデを加えている。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

##### 盾 [5] (図14、写真9)

端部を含む盾の右側の破片である。正面端部には縦位に杉綾状の刻線を施し、その内側に鋸歯状の刻線を配しているらしい。調整は正面・背面とも斜位のハケで、端部には丁寧なナデを加えている。背面には筒状部との境界近くにも縦位のナデが見られる。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

#### 人物 [6～29] (図15・16、写真9・10)

6・7は頭部から脱落した下げ美豆良である。いずれも中実成形で、下端部が鍵状に屈曲し、中には3本の粘土紐を斜位に貼付して、螺旋状にめぐらせた髪紐を表現している。剝離面には美豆良とともに脱落した耳環が付着している。外側から耳環の中央に向かって小孔が貫通する。6の髪紐の表面には赤色塗彩の痕跡が観察される。調整は全面に粗いナデが加えられている。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

8は右側頭部の破片である。顔面は完全に剝離しているが、右眼の一部が残っている。耳は粘土を環状に隆起させて表現し、その下に耳環を貼付している。耳の中央に小孔を穿ち、耳孔を表している。調整は外面が縦位のナデのちハケ、内面が斜位のナデとなっている。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

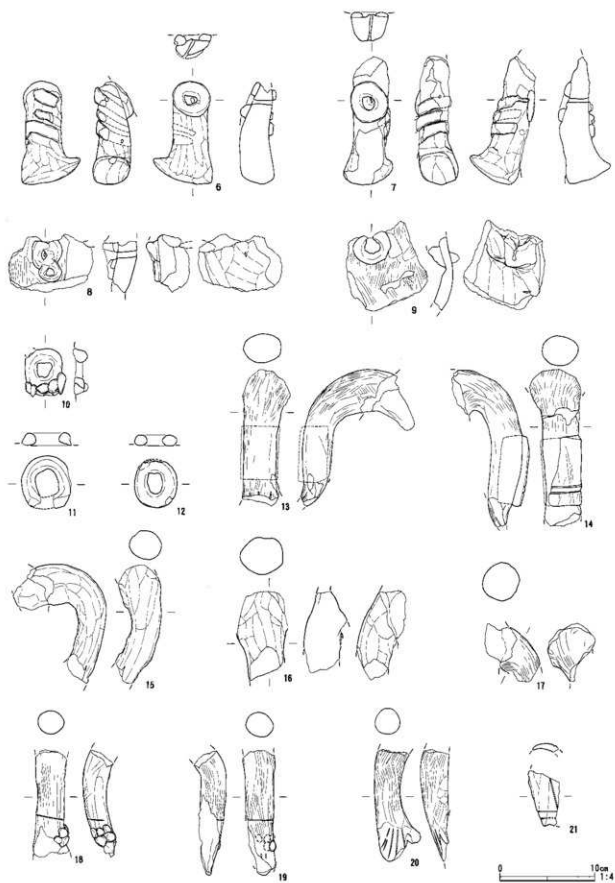


图15 坊主山古墳出土土形象埴輪実測図②

9も側頭部の破片である。耳環の表現がある。調整は外面が縦位のナデのち縦位および斜位のハケ、内面が斜位のナデとなっている。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

10～12は頭部から脱落した耳環である。10には5粒の耳玉が付着している。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

13～20は腕の破片である。すべて中実成形による。14には下半に薄い粘土板を巻き、横位に2条の刻線を加えて籠手を表現している。籠手の表面には13にも同様の位置に剝離痕があり、14のような籠手の表現が存在したらしい。18・19の手首には粘土粒を貼付して手玉を表現し、さらに19・20は手のひらの内側に刻線を入れ、指を表現している。20は左手で親指を成形している。調整は15・16が縦位の粗いナデ、他はナデののち粗いハケを施している。胎土に片岩・チャートを含み、色調は13が明黄褐色、18が明褐色、他は橙色を呈する。

21は腕から剝落した籠手である。横位に2条、斜位に1条刻線を加えている。表面には線状の赤色塗彩が残る。調整は縦位のナデで、胎土にチャートを含み、色調は橙色を呈する。

22～25は胴部の破片である。22は頸部から胸部にかけての部位で、頸部には円形の粘土粒を連続して貼付し、頸部を表現する。右下方に腕部の接合痕が残る。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のナデとなっている。胎土に片岩・チャートを含み、色調はにぶい橙色を呈する。23は女子人物の右胸から右脇にかけての部位である。円錐状の粘土塊を貼付して胸を表現している。腕部の接合痕が残り、その下方には小孔が存在する。調整は外面が縦位のハケ、内面が縦位および斜位のナデとなっている。胎土にチャートを含み、色調は橙色を呈する。24は右胸から背面にかけての部位である。胸部正面から脇部にかけて弧状の刻線を施している。刻線の間には赤色塗彩の痕跡を認める。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のハケである。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。25は胸部正面の破片である。ヘラ状工具による刺突を縦に連ね上衣の袷を表わし、粘土紐を貼付して袷の緒を2箇所に表示している。調整は外面が縦位のハケ、内面が縦位および斜位のナデとなっている。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

26は腰部の破片である。大刀・柄・上衣の裾の剝離痕が観察される。調整は表面が縦位の粗いハケ、内面が斜位のナデである。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

27は上衣裾部の破片である。裾端部は破断している。調整は表面が縦位のハケ、内面が斜位のナデである。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

28は人物から剝落した大刀である。緩やかに湾曲し、断面は柄頭が円形、刀身は台形を呈する。鐔の部分に粘土帯の剝離痕が観察され、中心に小孔が存在する。調整は粗いナデで、胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

29は人物から剝落した柄である。扁平に成形した環状の柄本体の上に2条の粘土紐を貼付して緒を表現している。表面には竹管状の工具で刺突を加え、全面に円文を付けている。2条の緒の中間に穿孔がある。表面に赤色塗彩が観察される。調整は丁寧なナデで、胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

#### 盾持人物 [30～33] (図16・17、写真10・11)

30～33は盾持人物である。30は盾持人物の頭頂部から脱落した髷で、分厚い長方形粘土板を弧状に屈曲させ、左右2箇所にて2条1対の刻線を加えている。下側は剝離面となっている。調整は長軸に沿っ



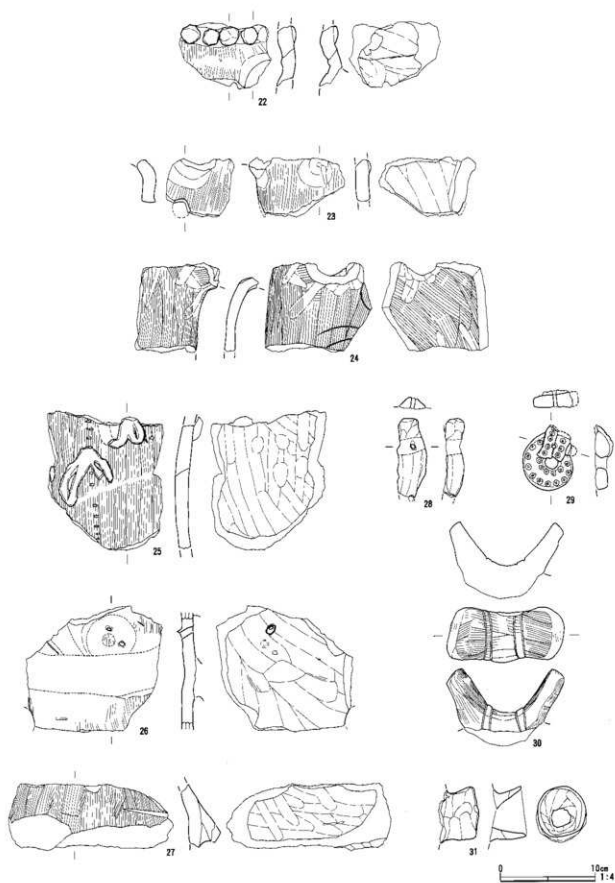


图16 坊主山古墳出土土形象埴輪実測図(3)

て全面にハケを施したのち、端面にナデを重ねている。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。31は盾持人物の頭部本体から脱落した耳である。幅広い円環状で、内外面ともに粗いナデを施している。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。32・33は頸部から盾部にかけての破片である。32は中央の円筒部の左右を一旦切開したのち、盾の鱗状部基部を挿入し、さらに挿入部の表裏に粘土を付加してすることで固定している。盾は左右上端部が三角形に突出する型式の盾を表現している。上端には頸部が僅かに残り、頸部を表現した粘土粒の剝離痕が観察される。盾の左右には2条1対の刻線で縦位の弧を描き、弧の間を同じく2条1対の刻線で2箇所に横位の直線を描いて結線している。一部に赤色塗彩の痕跡を認める。33の盾は32と異なり鱗状部の基部を直接円筒部に貼付して成形している。頸部には円形の粘土粒を連続して貼付し、頸部を表現する。32と類似して、盾の左右には2条1対の刻線で縦位の直線を描き、弧の間を同じく2条1対の刻線で2箇所に横位の直線を描いて結線している32と同様、一部に赤色塗彩の痕跡を認める。調整は盾表面の中央部が縦位のハケ、左右両端部が斜位のハケおよび縦位ナデ、盾裏面が斜位のハケおよびナデ、内面が縦位および斜位のナデである。胎土にはともに片岩・チャートを含み、色調は32が橙色、33が明黄褐色を呈する。馬 [34~39] (図18、写真11・12)

34~39は馬である。34は鬃の一部で、粘土帯を貼付した上に刻線を加えて手綱を表現している。調整は内外面ともナデで、片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

35は障泥の右側の一部である。障泥に壺鐘を造形し、壺鐘の上部には円環状の粘土帯を貼付して皮革を表現している。調整は障泥表面がナデ、胴部は内外面ともハケおよびナデを施している。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

36~38は脚部の破片で、37は三角形の切り込みを入れて蹄を表現し、38は成形に切開再接合法を用いている。調整は外面が縦位のハケおよびナデ、内面が縦位および斜位のナデである。胎土にはいずれも片岩・チャートを含み、色調は36が橙色、37・38がにぶい橙色を呈する。

39は部位不詳ながら、粘土紐を貼付し、その上面に竹管状工具による連続刺突が観察されることから馬の一部と判断した。3箇所に棒状工具の刺突による小孔が存在する。調整は外面がハケおよびナデ、内面がナデで、胎土に片岩・チャートを含み、色調はにぶい褐色を呈する。

**器種不明** [40~53] (図18・19、写真12・13)

40は端部に向かって窄まる筒状の部位で、端部方向へ粘土紐を積み上げていることから四足動物の頭部の可能性がある。調整は内外面ともナデで、内面には明瞭な粘土紐の接合痕を観察する。胎土に片岩・チャートを含み、色調は明赤褐色を呈する。

41は突出度の高い鐔状の部位が僅かに残り、細身の台部が付く。帽子の鏝部か人物の上衣裾部の可能性が考えられる。台部には形状不詳の透孔が1対存在する。調整は台部外面が縦位のハケ、内面が縦位および斜位のハケのちナデで、鐔状部には丁寧な横位のナデを施している。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

42は本体から剝離した断面三角形を呈する部位で、表面には鋸歯状の刻線が見られる。調整は縦位のハケで、端部には横位のナデを加えている。胎土にチャートを含み、色調は橙色を呈する。

43・44は突帯を挟んで透孔を千鳥状に配置している。43の右端には何らかの部品が付いていたらしく、剝離痕が観察され、突帯もナデによりつぶれている。調整はともに外面が縦位のハケ、内面が斜

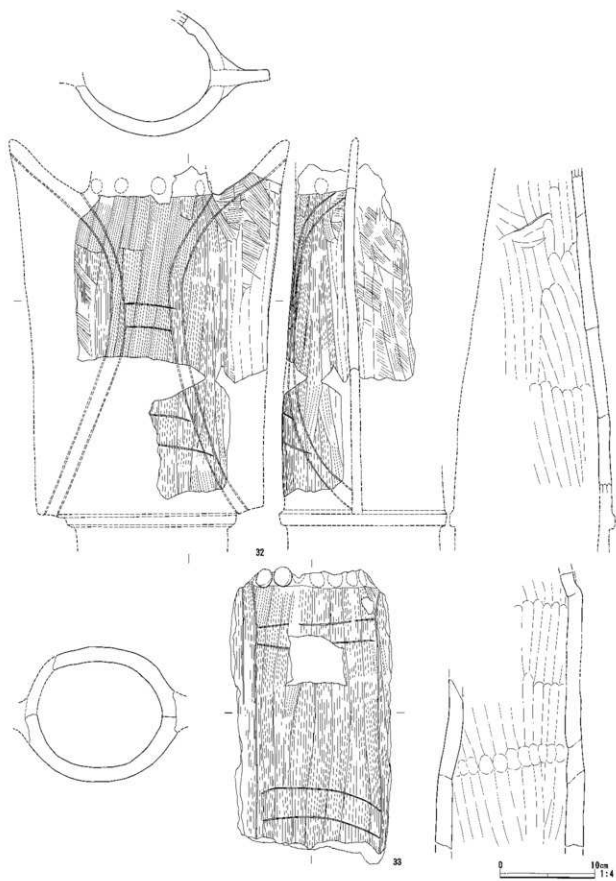


图17 坊主山古墳出土土形象埴輪実測図(4)

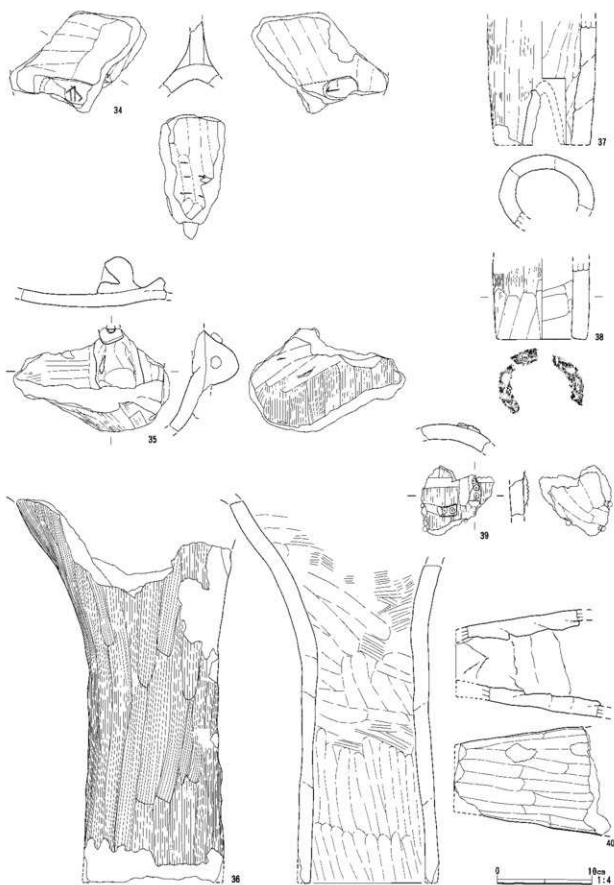


图18 坊主山古墳出土土形象埴輪実測図5

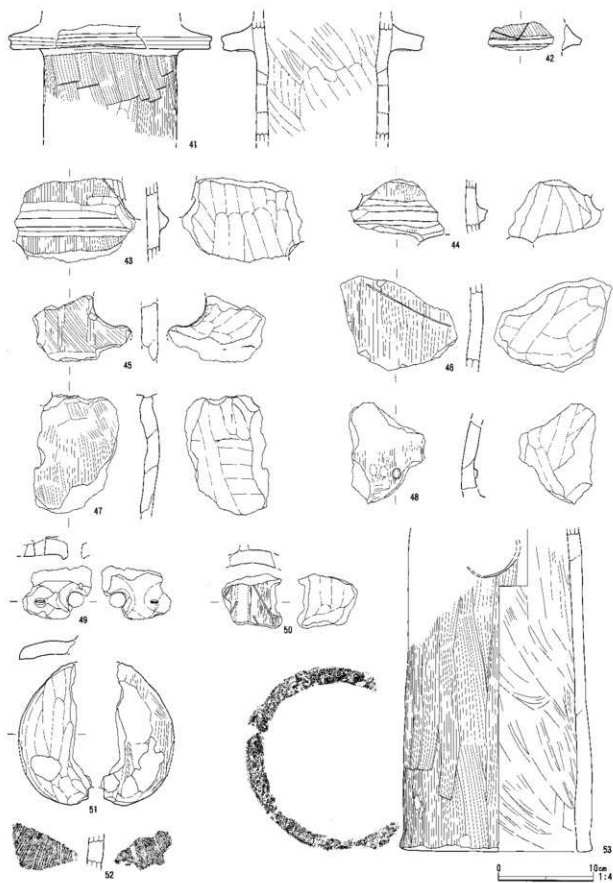


图19 坊主山古墳出土土形象埴輪実測図(6)

位のナデである。胎土にはともに片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。2点は同一個体の可能性も考えられる。

45は平板な造りで、円弧をなす外縁部をもつ。調整は全面にハケを施したのち、幅の狭い2単位のハケを斜交させ、一部にナデを加えている。内面は不定方向のナデである。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

46は緩やかに湾曲し、表面に2本の刻線が観察される。調整は外面がハケ、内面がナデである。

47・48は湾曲する破片で、47は上端が剥離面となり、一方に小孔が存在する。48は屈曲部に一連の粘土粒を貼付している。調整はともに外面がハケ、内面がナデである。胎土にはともに片岩・チャートを含み、色調は47が明褐色、48が橙色を呈する。

49は平板な造りで、ヘラ状工具を刺突して小孔を穿つとともに、これとは別に円形の孔を配している。調整は内外面ともナデで、とくに円孔部には上面から丁寧なナデを加えている。胎土に片岩・チャートを含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。

50は横方向へ緩やかに湾曲する破片で、縦位に粘土紐の剥離痕が観察され、この剥離痕に沿って杉綾状の刻線を配している。調整は外面がハケ、内面が斜位のナデである。胎土にチャート・黒色粒・白色粒を含み、色調は橙色を呈する。

51は半月状の破片で横方向へ緩やかに湾曲している。一方に小孔が存在する。調整は凸面がナデ、凹面が粗いハケとなっている。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

53は形象の台部で、基部に向かって緩やかに径を増し、上位に透孔を穿っている。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のナデである。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

## b. 土器

土師器 [1・2] (図20、写真13)

### 坏 [1・2]

1は扁平な器形で、底部は丸底をなし、体部は湾曲して立ち上がる。2は短く外湾する屈曲部をもつ。ともに外面底部から体部にかけてヘラケズリを施し、他の部位にはすべてナデ調整を行っている。

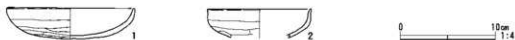


図20 坊主山古墳出土土器実測図

坊主山古墳出土土器観察表

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (13.5) 底径 — 器高 3.2	丸底。体部は湾曲して立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体 部ヨコナデ、底面ナデ。	黒色粒・白色粒 内外—橙色	2/3残存。
2	土師器 坏	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は短く外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 底部ヘラケズリ。内面—ナデ。	石英・長石 内外—橙色	1/6残存。



図21 下野堂御手長山古墳

### (3) 小 結

坊主山古墳は埋葬施設に角閃石安山岩を使用する横穴式石室をもち、墳丘に埴輪を伴う古墳時代後期末葉の円墳である。坊主山古墳の北方には、前の山古墳、蜷影山古墳、山の神古墳、御手長山古墳などが近接して所在するが、これらの古墳も角閃石安山岩使用の横穴式石室と埴輪をもつ比較的大型の円墳であることが確認されている。旭・小島古墳群の東縁部に当該期の有力な古墳の集中する区域が存在していたことになる。

また、坊主山古墳を含むこれらの古墳は、豊富な形象埴輪をもつことを共通の特徴としている。器財埴輪を多用していること、形象埴輪の造形が全体に大型化していることなど、古墳時代後期末葉段階の一般的な変化を他地域と共有しているが、人物・馬形埴輪の大型化は他地域以上に顕著な傾向が窺える。これらの大型化した形象埴輪の胎土には、しばしば角閃石安山岩粒の混入が認められるが、周辺の埴輪窯跡出土の資料のうちには同種の胎土が認められず、製作地の追究が今後の課題である。

## 3 下野堂御手長山古墳

### [A地点]

調査期間 平成2年10月1日～平成2年10月22日

調査面積 397.5㎡

調査原因 区画整理に伴う住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

備考 同一調査区内で杉ノ根1号墳の周堀を検出 [杉ノ根1号墳A地点]

### [B地点]

調査期間 平成3年5月29日～平成3年8月19日

調査面積 510㎡

調査原因 区画整理に伴う住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [C地点]

調査期間 平成4年5月13日～平成4年5月29日

調査面積 220㎡

調査原因 区画整理に伴う住宅建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

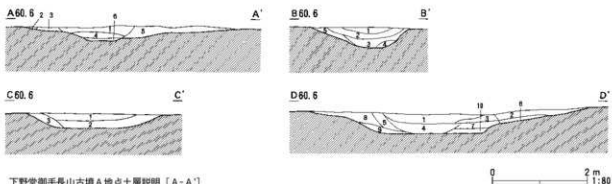
備考 同一調査区内で杉ノ根1号墳の周堀 [杉ノ根1号墳B地点] および杉ノ根4号墳の周堀 [杉ノ根4号墳A地点] を検出

### (1) 遺 構

#### a. 墳 丘

本庄市下野堂地内にあつて、中心をX=27,740、Y=-60,410付近に置く。周囲には北側に杉ノ根





**下野堂御手長山古墳A地点土層説明【A-A'】**

- 1 黒灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 2 灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 褐色土 ロームブロックを多量に含む。

**下野堂御手長山古墳B地点土層説明【B-B'】**

- 1 黒灰褐色土 しまり強。
- 2 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 3 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを少量含む。
- 5 褐色土 ロームブロックを多量に含む。

**下野堂御手長山古墳B地点土層説明【C-C'】**

- 1 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。

- 2 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 黄褐色土 ロームブロックを主体に塊状に堆積する。

**下野堂御手長山古墳A地点土層説明【D-D'】**

- 1 黒灰褐色土 しまり強。
- 2 黒灰褐色土 As-Bを少量含む。
- 3 黒褐色土 As-Bを少量含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。粘性・しまりとも強。
- 5 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 6 暗灰褐色土 ロームブロック、黒色土ブロックを少量含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 8 暗褐色土 白色パミスを含む、ローム粒子、ブロック混じり。
- 9 褐色土 ロームブロックを多量に含む。黒色土ブロックを少量含む。
- 10 褐色土 ロームブロックを多量に含む。

図22 下野堂御手長山古墳土層断面図

1号墳、西側に杉ノ根4号墳が所在する。直径21～22mを測る円墳で、平面設計は整円をなさず、墳丘南側は直線状を呈する。墳丘盛土、旧表土はほぼ完全に失われ、基盤のローム層を表土が直接被覆する状態である。

**b. 周堀**

周堀は外側の立ち上がりが大きく蛇行し、堀幅は一定していない。北西側と北東側では堀幅が極度に広がる箇所が見られ、東側では急激に幅を減じている。また、南側は直線的に開削されている。覆土には全体にロームブロックを含む褐色土ないし灰褐色土の堆積が観察される。北西側のD-D'では上層にAs-Bの混入が認められる。

断面形は東側がやや深く、船底形をなし、北西側から北東側にかけては堀底に平坦面が形成されている。最深部は北東側の墳丘寄りにあり、確認面からの深さは約60cmを測り、他はほぼ30から40cmの深さにとどまっている。堀底には各所に段差が認められる。

**c. 埋葬施設**

下野堂御手長山古墳の埋葬施設は横穴式石室である。羨道はすでに痕跡をとどめず、墓道・ふん底部の原状不明である。玄室も根石と側壁の一部を残し大半を失っている。

規格は単室構造の胴張式で、羨道を失っているため明らかではないが、羨道と玄室の境界に明瞭な袖部を形成しない形式と推定される。玄室側壁と奥壁には、5面加工を施した角閃石安山岩の川原石を使用し、小口積みとしている。玄室側壁と奥壁の境界部にも明瞭な角をもたず、円弧をなして根石が配置されている(図23)。

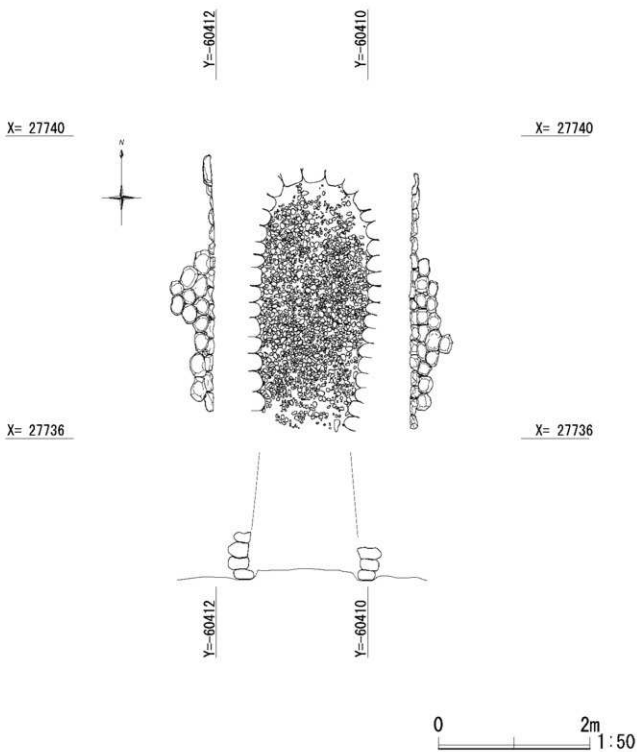


图23 下野堂御手長山古墳石室床面検出状況

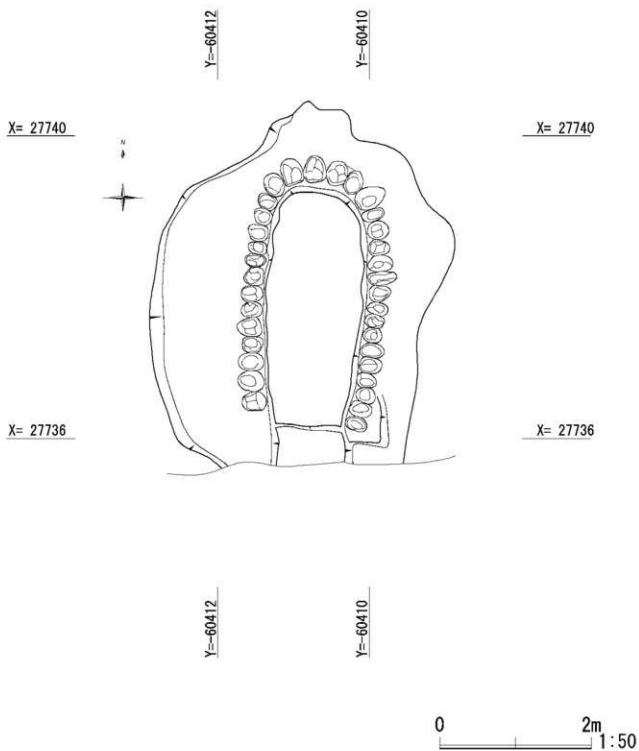


図24 下野堂御手長山古墳石室掘り方・根石検出状況

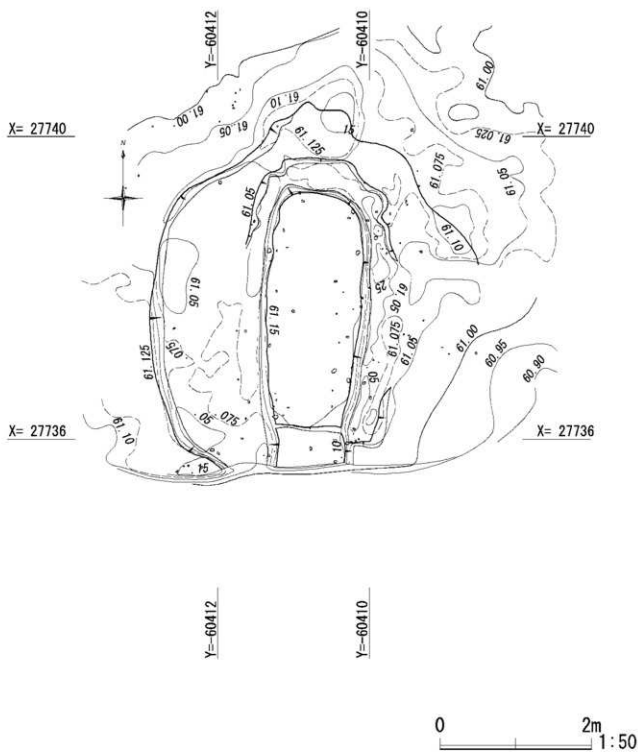


図25 下野堂御手長山古墳石室掘り方検出状況

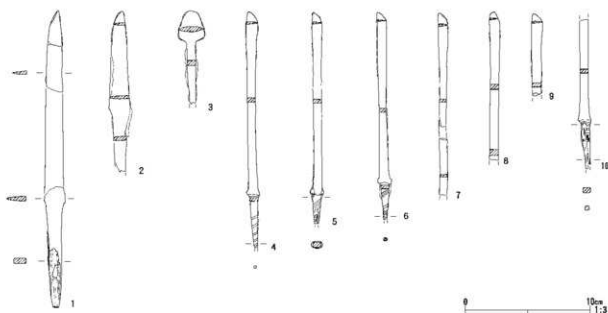


図26 下野堂御手長山古墳出土鉄製品実測図

下野堂御手長山古墳石室出土刀子・鉄鏃観察表

No	種類	特徴 (単位cm)	備考
1	刀子	全長不明。刃部幅1.6 刃部厚0.4 茎部長8.5 茎部厚0.5 重さ22.24g。	刃部先端と茎部。
2	刀子	残長12.7 刃部幅1.4 刃部厚0.2 茎部幅1.0 茎部厚0.4 重さ16.09g。	一部欠損。
3	鉄鏃	残長7.5 鏃身[長2.5 幅2.0 厚0.4] 頭[残長5.0 幅0.7 厚0.4] 重さ8.16g。	鏃部下位欠損。
4	鉄鏃	残長18.8 鏃身[長1.9 幅1.2 厚0.2] 頭[長12.7 幅0.6 厚0.3] 茎[残長4.2 幅0.6] 重さ19.59g。	鏃部下位欠損。
5	鉄鏃	残長16.9 鏃身[長1.9 幅0.8 厚0.2] 頭[長12.5 幅0.7 厚0.3] 茎[残長2.5 幅0.9] 重さ18.76g。	茎部下位欠損。
6	鉄鏃	残長16.6 鏃身[幅0.7 厚0.1] 頭[幅0.6 厚0.3] 茎[残長2.8 幅0.7] 重さ16.98g。	茎部下位欠損。
7	鉄鏃	残長9.0+4.5 鏃身[幅0.8 厚0.2] 頭[幅0.6 厚0.2] 重さ11.20g。	鏃一部と茎部欠損。
8	鉄鏃	残長11.9 鏃身[幅0.7 厚0.1] 頭[幅0.7 厚0.4] 重さ12.85g。	鏃部下位欠損。
9	鉄鏃	残長6.6 鏃身[幅0.9 厚0.2] 頭[幅0.8 厚0.3] 重さ6.23g。	鏃部下位欠損。
10	鉄鏃	残長11.9 頭[残長8.0 幅0.7 厚0.3] 茎[残長3.9 幅0.6] 重さ14.23g。	鏃部下位～茎部上位。

床面は各壁構築後に円礫を敷き込んでいる。奥壁および玄門付近では円礫が除去されている範囲がある。その他の部分にも円礫のまばらな箇所がみられることから、当初の床面はすでに失われていると判断される(図23)。

掘り方は玄室の床面に相当する箇所をやや高く掘り残し、その周囲を幅0.8～1.8m、深さ5～10cmわたって掘り下げていた(図25)。各壁の根石はこの掘り方の内部に内側にわずかな傾斜をつけて設置し、根石は掘り方底面に対し、わずかに沈み込んでいる。

残存部分の総長は3.2m、玄室の最大幅1.4mを測る。開口方位はS-5°-Wである。

## (2) 遺物

玄室内から玄室南側にかけての位置で刀子2点・鉄鎌8点を検出している。原位置をとどめる資料はなく、いずれも表土中の確認面付近から出土している。土師器・須恵器・埴輪は出土していない。とくに、埴輪は周堀に転落した破片も検出されていないことから当初から配置されていなかったと推定される。

**鉄製品** (図26、写真14)

**刀子** (図26、写真14)

1は刃渡りがやや長めとなることが推測される刀子で、茎部に木質を残す。2はやや厚手の造りとなっている。

**鉄鎌** (図26、写真14)

3は篋被部の下位以下を欠く三角形式の長頸鎌である。鎌身関部はやや鈍角をなし、鎌身部は両丸造りで厚みがある。

4～9は棘篋被片刃箭式の長頸鎌である。鎌身関部は消滅しているが、「ふくら」には丸みを残している。

10は鎌身部を失い、型式は不明である。関部は錆膨れのため台形関のように見えるが、棘関の可能性も考えられる。

## (3) 小結

下野堂御手長山は北隣の杉ノ根1号墳とともに杉ノ根地区における古墳時代終末期の中核的な位置を占める。古墳の築造時期は、直径20mの墳丘を有するにもかかわらず、埴輪は全く検出されていないことから、まず古墳時代終末期に下る時期が考えられる。また、副葬品の一部であった可能性の高い鉄鎌の中では、棘篋被片刃箭式長頸鎌が多数を占めている。この片刃箭式鎌は、すでに鎌身関部が消滅しているものの、「ふくら」が角をなさずに丸みを残し、これより後出の無関端刃片刃箭式鎌は含まれていない。このことから、築造時期は古墳時代終末期の初頭段階が想定される。

## 4 屋敷内4号墳

[A地点]

**調査期間** 平成13年1月15日～平成13年1月25日

**調査面積** 106㎡

**調査原因** 区画整理に伴う道路建設

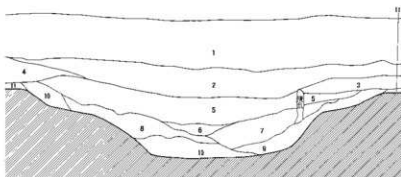
**調査担当** 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕・太田博之・松本 完

### (1) 遺構

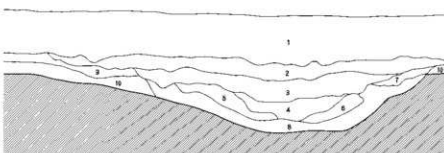
屋敷内4号墳は、本庄市大字小島字屋敷内地内にあり、墳丘の中心を、X=27,634、Y=-60,259付近におく。南側やや離れて屋敷内1～3号墳がある他には、古墳は見られず、この一帯は、旭・小島古墳群内でも古墳の少ない一帯にあたる。また、方形の墳丘をもつ墳墓としては、旭・小島古墳群内で最も南に位置する。

区6-60号線の道路建設に先立って確認調査により、道路用地を横切る2条の周堀を検出し、引き続

A61.6



B61.6



0 1 m 1:40

## 屋敷内4号墳A地点土層説明【A-A'】

- 1 表土
- 2 暗褐色土 1層下部より黒み大。5層を巻き込む白色粒やや多い。粘性、しまりなし。炭化物微量。黒み大。
- 3 暗褐色土 1層下部より黒み大。5層を巻き込む白色粒やや多い。粘性、しまりなし。炭化物微量。
- 4 暗褐色土 1層下部より黒み大。5層を巻き込む白色粒やや多い。粘性、しまりなし。炭化物微量。
- 5 黒褐色土 2層よりはるかに黒み強く、しまっている。ローム粒も若干多い。
- 6 黒褐色土 5層+ローム。
- 7 褐色土 4層+ローム粒。ロームのモヤモヤ。
- 8 褐色土 5層+斑状のローム。
- 9 黒褐色土 10層より黒褐色土多い。
- 10 褐色土 ロームを主とし5層土および団塊状ローム含む。汚く混じる。
- 11 褐色土 汚れたローム。

## 屋敷内4号墳A地点土層説明【B-B'】

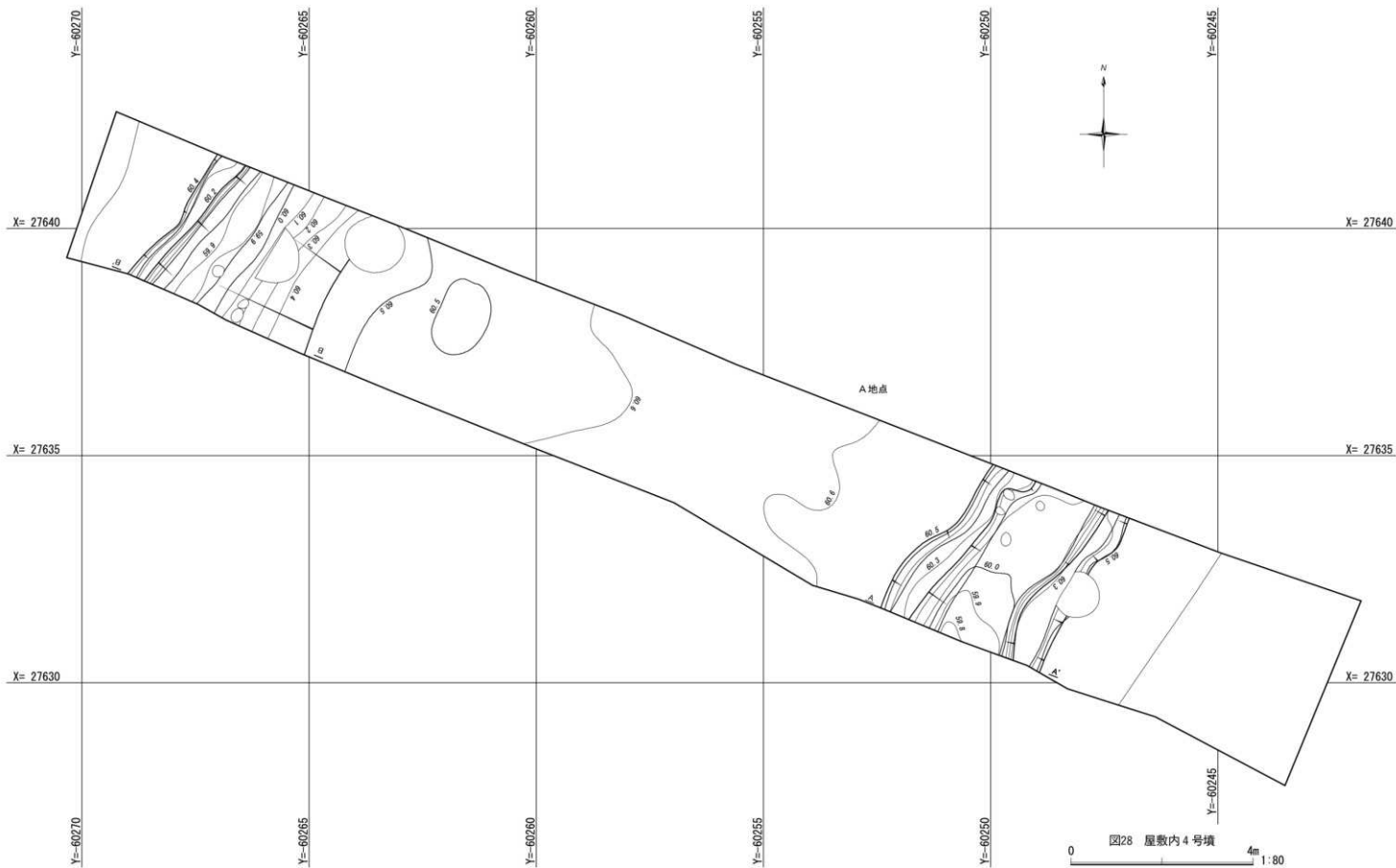
- 1 表土
- 2 暗褐色土 1層下部より黒み大。4層を巻き込む白色粒やや多い。粘性、しまりなし。炭化物微量。
- 3 黒褐色土 2層よりはるかに黒み強く、しまっている。ローム粒も若干多い。
- 4 黒褐色土 3層+ローム。5、6層より黒褐色土多い。
- 5 褐色土 4層+斑状のローム。
- 6 褐色土 4層+斑状のローム。
- 7 ロームと1、2層の混合土。
- 8 褐色土 ロームを主とし3層土およびローム含む。汚く混じる。
- 9 ロームと1、2層の混合土。
- 10 汚れた地山ローム。

図27 屋敷内4号墳土層断面図

き記録保存のための発掘調査を実施したものである。調査地点は、両側に宅地に挟まれた旧道であり、調査範囲は限定された面積にとどめざるをえなかった。

周堀の検出面は、軟質の黄褐色ローム層の上面である。調査範囲内には、土坑状の攪乱が点在し、周堀の一部が壊されている。なお、墳丘部分に関しては、墳丘および主体部を検出すべく精査したが、その種の痕跡は一切見られなかった。

検出した周堀は、ほぼ平行して旧道を斜めに横切っている。周堀の走向から見て、対角線がほぼ東西、南北を指し、方形に周堀の廻る墳形と見てよいであろう。2条の周堀のそれぞれを、北西周堀、





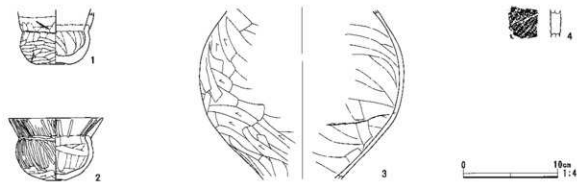


図29 屋敷内4号墳出土土器実測図

屋敷内4号墳出土土器観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土器 甕	口径 — 底径 3.4 器高 —	丸みのある体部から、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部は上底気味。	外面—口縁部ヨコナデ、頸部指頭痕とナデ、体部ヘラケズリ後ヘラケンマ、底部ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ユビナデ。	雲母・白色粒 内—明赤褐色 外—ふいふ褐色	3/5残存。
2	土器 甕	口径 10.0 底径 2.0 器高 6.6	丸みのある体部から、口縁部は外傾する。底部は上底気味。	外面—口縁部ヨコナデ後ヘラケンマ、体部～底部ヘラケズリ後に体部ヘラケンマ。内面—口縁部ヨコナデ後ヘラケンマ、体部～底部ナデ。	雲母・チャート・白色粒 内外—明赤褐色	5/6残存。
3	土器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	粘土紐積み上げ成形。胴部は膨らみをもつ。	外面—胴部ヘラケズリ。 内面—胴部ヘラナデ。	雲母・片岩 内—ふいふ褐色 外—ふいふ褐色	1/6残存。
4	縄文土器 深鉢	口径 — 底径 — 器高 —	—	外面—単節LR縄文施文。 内面—磨き。	チャート・白色粒 内外—ふいふ褐色	小片。

南東周堀と呼称する。周堀にほぼ直交する線上での計測値になるが、墳丘長は13.9m、全長は21.3mである。周堀の上端がかなり曲折するため、正確な復元は期し難いが、周辺例から見て、北東—南東方向がやや長い形態になりそうである。中央での周堀幅は、北西周堀で3.7m、南東周堀で3.4mある。

北西周堀は、断面形がV字状に近く、堀底面も不明瞭であるが、南東周堀の断面形は、箱築研で、堀底面は明瞭な平坦面をなす。中央での深さは、北西周堀が55～60cm、南東周堀が48～64cmである。覆土は、4～6層に分けられた。上層に厚い黒褐色土が堆積し、以下、下層に行くほどロームが多くなり、暗褐色土や褐色土が堆積する傾向が見られた。

### (2) 遺物

本遺構に伴う遺物は、北西周堀から出土した甕胴部片(図29、写真14:3)、南西周堀から出土した2点の甕(図29、写真14:1・2)の3個体である。いずれも南側の調査区界の脇、堀底面よりやや浮いた状態で出土している。

### (3) 小結

出土土器(図29、写真14:1～3)より、本墳は、古墳時代前期末葉の遺構と見られる。

## 5 三奈山古墳

### [A地点]

調査期間 昭和58年5月19日～昭和58年8月4日  
調査面積 1,475㎡  
調査原因 店舗用地造成  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕

### [B地点]

調査期間 平成4年1月13日～平成4年2月7日  
調査面積 310㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [C地点]

調査期間 平成8年3月11日～平成8年3月25日  
調査面積 75㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### [D地点]

調査期間 平成8年12月7日～平成8年12月28日  
調査面積 300㎡  
調査原因 区画整理に伴う市道建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### [E地点]

調査期間 平成9年11月10日～平成11年3月31日  
調査面積 3,640㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕

### (1) 遺構

三奈山古墳は、本庄市大字小島字三奈山42-1他にあり、墳丘の中心を $X=27,777$ 、 $Y=59,707$ 付近におく。旭・小島古墳群で墳形や時期を問わず最大規模の古墳である。周囲には三奈山1号墳～同9号墳や、森西1号墳と同2号墳が周堀のみ遺存する状態で検出されている。三奈山7号墳と同9号墳は帆立貝式古墳で、三奈山古墳とともに旭・小島古墳群の中でも盟主級古墳が比較的集中する個所である。

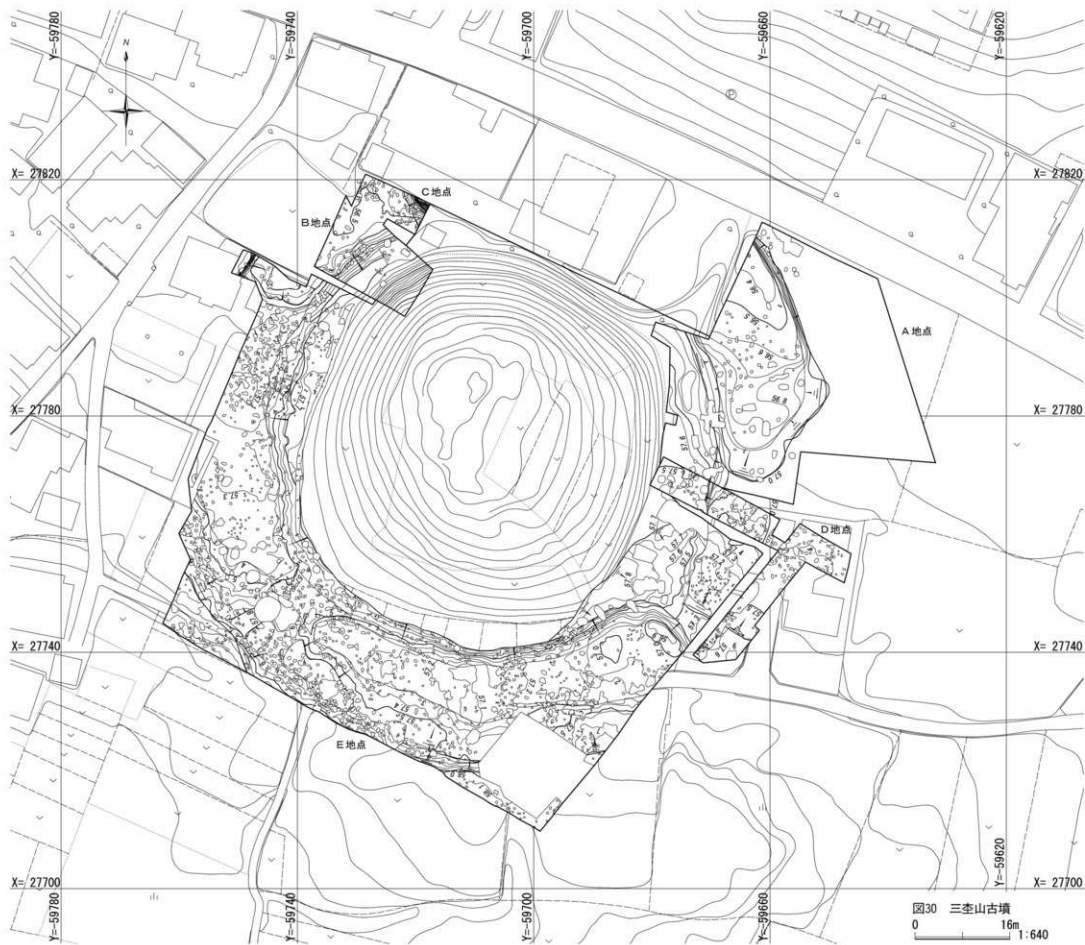


图30 三李山古墳  
0 16m  
1:640

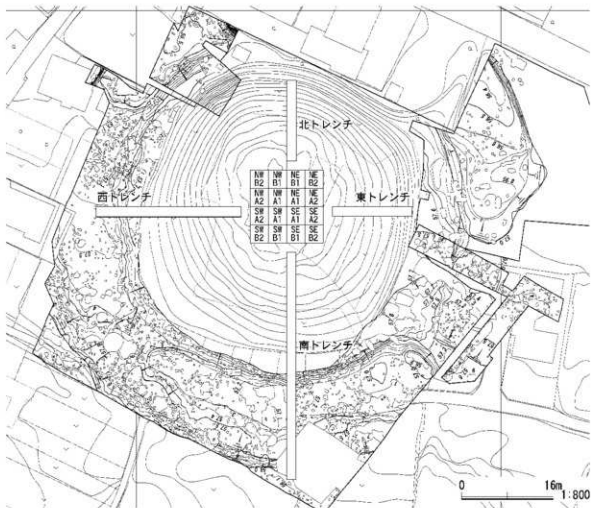


図31 三笠山古墳トレンチ・グリッド配置図

発掘調査前より本古墳は、全面が桑畑として開墾されていた。その後、篠竹と雑草が群生する時期があった。墳丘の現状は、直径に比して高さは著しく低く非常になだらかである。墳麓の周囲は後世の開墾等により北側と東側が急傾斜となり、全体のプランは矩形を呈している。ただし、等高線は円形に近い状態である。墳頂部は径約30mの比較的平坦な面を観察できる。ちなみに、発掘調査前の墳丘高は北側で3.2m、南側が2.8mを測る。

遺構の確認調査は、昭和56年度に範囲確認調査と測量調査が実施されており、昭和58年度には三笠山7号墳の発掘調査に伴い、その西側において周堀の東北部分が確認されている。これをA地点とする。昭和61年に開発に伴う事前の範囲確認試掘調査が墳丘上部を中心に行われ、墳丘盛土を構成する細密な層序が確認されている。区画整理事業にかかる三笠山古墳B地点と同C地点の調査は墳丘北西麓付近に当たり、墳丘の一部と周堀が検出された。

墳丘および東西と南は調整池建設にかかる範囲に当たり、墳丘と周堀の大半が発掘調査された。また、事前に地中探査レーダーによる資料収集も行われた。なお、各地点の調査において本古墳以外の遺構は皆無であった。周堀内に多数分布していたピットは覆土に浅間Aバミスを含むものや、明らかに表土が混在するものがあること。あるいは、墳丘下ではまったく検出されなかったことから、近世

以降のものと考えられる。

#### a. 墳丘

墳丘の調査は、先に記したX・Y座標を交点として、墳頂部に4m四方のグリッドを16ヶ所設定した。また、東西南北に墳麓から周堀方向にかけて十字にトレンチを設定した。これらは後に東西南北の断面観察ベルトとして活用した。

各グリッドを旧表土面まで掘り下げた結果、内部主体そのものを指示するような遺構は検出されなかったため、東西南北のトレンチを残して、四周の墳丘部を順次削平したが、これらの部分においても墳丘の盛土構造を示す層序以外に遺構は検出されなかった。

本古墳の盛土は、原則として旧表土面から構築されており、墳麓周囲は旧表土を削平している可能性がある。盛土に使用された基本的な土質は、旧表土と考えられる黒褐色土（水気が強く漆黒で細砂質）、黒灰褐色土（旧表土にロームが混在し、水分が少ない）、暗褐色土（ローム土にハードロームブロックが混在し、全体にくすんだ色調）、黄褐色ローム土、茶灰褐色粘質土（硬質）で構成される。個々の層位はこれらをもとに、混在するブロックの大小で若干相違する。

構築の概要は、墳丘中心部付近に旧表土上より小丘（青木2005）を盛土し、暫時内側から墳丘縁辺部方向に盛土を行ったもので、旧表土面からの残存高は2.6mを測る。構築原理の分析については後述する。

注目すべき点は、墳丘盛土の中位に灰褐色テフラ層が一様に被覆していたことで、化学分析の結果やテフラ給源と降下範囲を前提にすると、Hr-FA（群馬県榛名山二ツ岳火山灰）の可能性が濃厚である。なお、外部施設たる葺石はまったく認められず、大規模な調査面積にもかかわらず、石材そのものが検出されなかった。したがって、葺石は存在しないものと推定される。また、段築面は観察されなかったが、後述するように各段階の墳丘面が構築される際に、段築を想起させる外観を見せている。また、墳麓に平坦な面（テラス）が存在するものと推定される。

発掘調査により検出された墳丘縁辺部（周堀内側上場）はほぼ円形の状態に復元可能で、円墳として把握される。直径は78.5mを測る。

#### b. 周堀

周堀は、墳丘北側から中山道間にかかる地点の調査が行われていない。したがって、この部分における当該遺構の有無は不明であるものの、全周するものと推定される。南西部と南側及び東北部は比較的均一な幅で掘削されており、平均して22.5m前後の幅を測る。周堀中央部において肩部が不明瞭であるものの2段に掘削されている状態を考慮すると、外縁部はほぼ真円を呈するものと推定される。外径は115.2mに復元される。

南東部において現状で幅2.5mほどの狭隘な陸橋を検出している。ただし、北側は広域に攪乱されていることや、復元された墳麓の円弧より外側に張り出している面が観察されること。あるいは、陸橋部南側の周堀コーナーが整美なカーブを描くことから、本来の対向する部分は昭和58年度の調査（A地点）で検出された周堀端部である可能性が濃厚である。この点から、陸橋部の幅は25m前後を測る範囲であったものと推定される。なお、陸橋部分の主軸は三笠山7号墳の前方部主軸方向とほぼ平行している。

周堀の深さは一定ではなく、南西部に陸橋状の少し高くなった面が観察される。南側の深さは1.8m

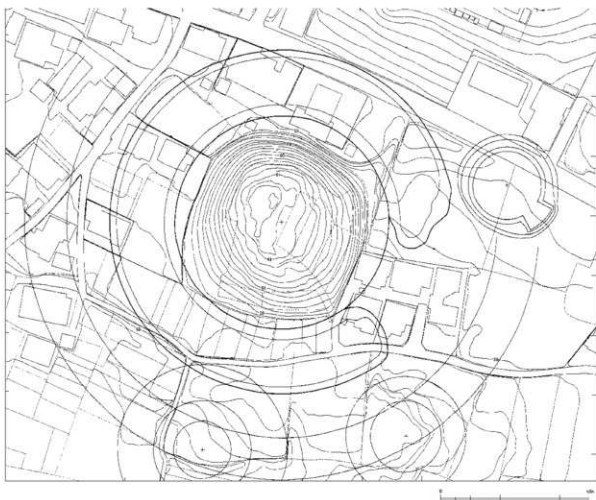


図32 三奈山古墳墳丘平面復元図

前後を測るが、北西部のC地点においては3.4mの深さに達しており、北方に進むにしたがって段状に深くなっている。なお、周堀下底部はいずれもハードローム面まで掘り下げられているものの、その直下の砂礫層には達していない。

周堀内の堆積状態は、南側において層厚は大きく枚数も少ない。対する北西部のC地点では層厚の細かいものが多く堆積している。

### c. 周堀外域

発掘調査前の現状測量図と現地観察で、本古墳と関連する可能性のある地形が観察された。すなわち、南東部から西側にかけて幅14.7m前後で周堀外縁と同心円状の円弧を描くラインが認められる。ただし、周辺の調査で地下遺構として確認されていないが、畝などの境界線と平行しない等高線であることから、本古墳の外部遺構であるものと推定される。この仮想円弧の直径は144.6mの範囲に及ぶ。さらに、その外側にも同様の円弧が観察され、外径を復元すると173.4mに達する。

これらは、墳丘北側では確認されず、その範囲内に三奈山1号墳、同2号墳、同7号墳がおさまることや、周辺の地形が南西から北東方向に緩傾斜している点を考慮すると、墳丘周囲のフラットな面を構築する上で整形するとともに、その土を墳丘構築材の一部に使用した可能性も考えられる。ちな

みに、森西2号墳の周堀外域はこの円弧部分を切断する状態で構築されている。なお、この円弧地形について、墓域を反映したものとするかは検討を要する。

#### d. 内部主体

墳頂部は径20mほどの範囲で比較的平坦な面が残されていたことにより、グリッドを設定し調査を実施した。しかし、各グリッドの断面において墳丘盛土の堆積を確認したものの、墓壇や棺槨などの構築を指示するような輪郭を検出するには至らなかった。

本古墳の内部主体は不明である。古墳に内蔵される墓壇、木棺直葬、粘土椽、石棺、竪穴式石椁、横穴式石室の類や、これらの部材である粘土塊、石材、朱の痕跡なども一切検出されなかった。ただし、墳丘層序と構築過程の分析に基づくかぎり、後述するように横穴式石室の構築を企図した可能性を暗示している。

#### (2) 遺物

遺物については、周辺より旧石器や打製石斧が採集されているものの、本古墳に関連した土器や埴輪などの遺物は皆無である。このことは、今後本古墳を評価する上で論点のひとつとなる。

#### (3) 墳丘の構築過程

##### 第1次墳丘面（I段階）

最初の盛土は墳丘のほぼ中心部で、旧表土上に高さ0.5m、径3.0m前後の小丘を形成している（I-1段階）。

その後、主に黒褐色土を用いて、小山の頂点から外側にむけて底辺の径が15.5m～17.0mの範囲にわたり、3～5回の単位で盛土している。中心部は層厚0.6mを測り盛り上がるものの、周囲は層厚約0.4mのフラットな上面を形成している。したがって、2段階成のような外観を呈する（I-2段階）。

つづいて、I-2段階面を完全に被覆する状態で墳丘中心部より外側にむけて盛土を行っている。墳丘中心部付近の高さは旧表土より1.1mで、中心部より5.0mほど離れた場所では旧表土より高さ0.7mとなり、さらに外側においては、旧表土より高さ0.3mと低く、その外観はなだらかな段築を呈するが、特に南北断面では墳丘中心部より北が3段階成となっているのに対し、南側はなだらかに傾斜しており非対称である。外周は底辺で径24.8m～26.6mの範囲に及ぶ（I-3段階）。

本段階の最終はI-2段階とI-3段階の外縁と同様に旧表土より0.3mの層厚で、周堀の手前まで盛土を行い、墳丘の基底を形成している（I-4段階）。

なお、西側及び南側においては周堀上場より5m～6m前で旧表土が途切れており、旧表土上位に構築されたI-4段階の面も当然のことながら周堀上場まで達しておらず、盛土部分と周堀上場間はローム面を削平した比較的平坦な面が存在した可能性を暗示している。このような状態はB地点においても観察される。

##### 第2次墳丘面（II段階）

本段階は墳丘中心部を主体として構築されるが、東西南北それぞれにやや複雑で、墳丘中心部より同心円状に形成されていない。まず、墳丘中心部の北方部でI-3段階面上に、ローム土を主体に層厚の大きな盛土が行われる。これは東西と南側では観察されない。旧表土よりの高さは1.4mで、上面はフラットである（II-1段階）。

次に、東西方向において墳丘中心部より非対称の位置に層厚0.3m～0.4m、底辺の幅約4.0mの小山

状盛土が造られる。これは、南北方向では観察されない（II-2段階）。

つづいて小山状盛土面の内側を充填するように、層厚0.5mの盛土が行われるが、南北方向でI-1段階の直上に位置する。旧表土面よりの高さは1.6m~1.8mを測る。なお、南方向には観察されなかった（II-3段階）。

II-2段階とII-3段階の外側を取り巻くような状態で、東西および北側に盛土がつづく。東西方向ではI-3段階で形成された2段目の傾斜面と整合しているが、北方ではII-1段階上で段を造っている。この段階も南方向では観察されない（II-4段階）。

II-3段階とII-4段階の範囲は東西および北の部分で「コ」の状に盛土されたものであるが、その内部を充填する状態で緻密な層序が観察される。すなわち、2~3段ごとに順次墳丘中心部から外側に向けて構築しており、各部における最上面と斜面一体で「へ」の字状になるような工法を駆使し、全体に平行四辺形状を呈している。下底部はI-3段階構築時に南へ傾斜する面を形成しているのに対し、本段階では上面を水平に調整したことから、墳丘中心部より外側に行くにしたがい層厚が大きくなっている。このような構造は他の箇所でも観察されない。墳丘中心部より南側にのみ認められる。その全長は約13mに及ぶ（II-5段階）。

最後に、これらの外周を包む状態で盛土がなされている。底辺における規模は径33.3m~29.0mを測り、墳丘中心部から正円に近い状態で構築されている（II-6段階）。

以上の観察から言及されることは、第2次墳丘面は形成過程にあって東西南北で不均等な構築手順を踏まえているにもかかわらず、最終的には円形プランを目指している。また、上面はほぼフラットで旧表土面よりの高さは1.6m~1.7mである。ただし、北側のみII-1段階とII-4段階間で段が出現している。

### 第3次墳丘面（III段階）

I-4段階の上面を被覆しII-6段階の外周から墳麓部を形成する盛土で、各層序は比較的荒く細密な構造を呈するところは少ない。およそ6段階程度の単位で順次外側に構築している。旧表土面より1.2m~1.3mの高さで、上面はやはりフラットである。この高さはII-6段階の構築面より下位にあたる。さらに、本構築面の外周付近も一段低く形成されており、この段階では3段階成のような外観となる（III段階）。

II段階及びIII段階の構築が完了直後、本墳丘は一面に同一のテフラに覆われる。その層厚は2cm~6cm前後で、特にIII段階の上面では層厚が大きい。現状ではHr-FAの可能性が濃厚で、同テフラの降下範囲と降灰層厚分布図（新井1979）をもとにするならば、旭・小島古墳群付近は0~5cm前後の堆積範囲あたり、本古墳で観察される層厚と矛盾していない。

### 第4次墳丘面（IV段階）

再び墳丘中央部に構築される盛土面で、第2次墳丘面の直上に形成される。最初の盛土部分は墳丘中心部より東よりで底辺が7.0m弱、層厚0.8mの山状盛土が形成される（IV-1段階）。

その後、山状盛土より第2次墳丘面の傾斜面に達する部分まで盛土を行っているが、北側のみはII-6段階手前で留まっており、段築面を形づくっている（IV-2段階）。

IV-2段階面は一様に盛土されているのではなく、南北断面で観察されるように墳丘中心部から南方にかけて皿状の窪み状遺構を残している。南北長は11.5mを測り、東西ではSW・B2グリッドから



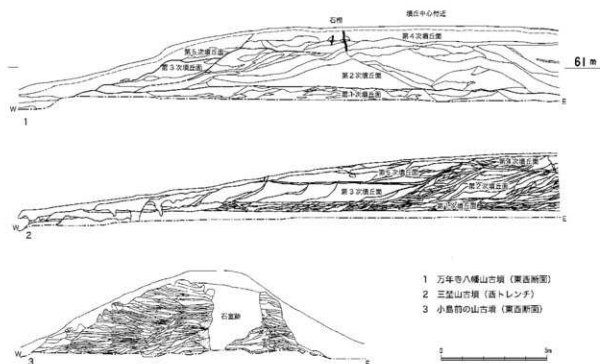


図33 旭・小島古墳群における各期の墳丘構築変化

SE・B 2 グリッドに内湾する窪みの肩部が検出されており、およそ14mの幅を数える (IV-3 段階)。

IV-3 段階にかかる窪み状遺構は、上面が現状の表土もしくはその直下であったため、攪乱等により平面的に確認することはできなかった。そのプランは方形もしくは隅丸方形と推定される。この窪み状遺構はII-5 段階の盛土上に築造されており、両者は同一の目的で他の構築部分とは別に意識して設計された可能性を暗示している。

#### 第5次墳丘面 (V 段階)

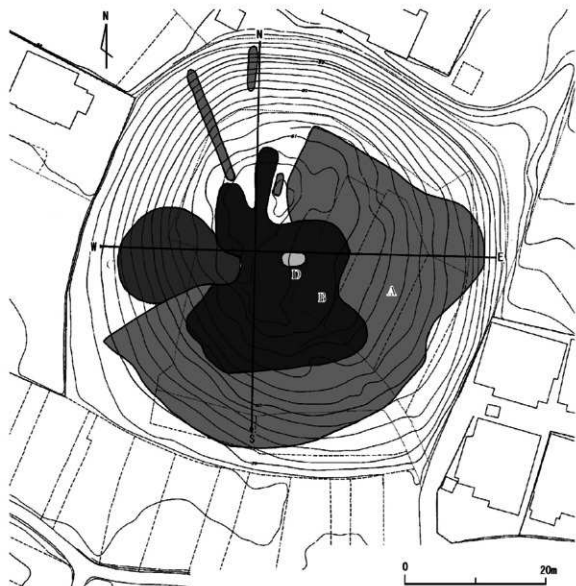
III段階直上を被覆する最も外側の盛土面で、これによりII段階やIV段階の斜面は完全に覆われる。北側で使用された盛土は硬質の茶灰褐色粘質土で、全体として層序は荒い。





以上が、本古墳にかかる墳丘盛土の形成単位と構築過程である。

#### (4) 墳丘構造と内部主体の問題点

本古墳で唯一の遺構資料である墳丘構築のプロセスに基づくならば、以下の留意点が今後の検討課題となる。盛土の構築は内部主体の位置や構造物の重量変化により古墳時代前・中期と後期では大きく相違する。すなわち、本地域においては古墳時代前・中期の木棺直葬や粘土椁、箱式石棺を内部主体とする場合、細密な盛土構造や墳丘高は重視せず、最終的に外形と墳頂部の平坦面の範囲を目的に墳丘盛土の構築を遂行している。

旭・小島古墳群中における最も古い古墳の1基に万年寺八幡山古墳があげられる。墳丘中心部に未盗掘の木棺直葬の存在が予測され、中心部よりやや離れた位置にいむゆる箱式石棺を内蔵されるもので、5世紀初頭と推定される。昭和52年にこの古墳の保存作業に伴い墳丘中心部より南方で東西断面の記録調査が行われている (本庄市1986)。



- |   |                   |   |                 |
|---|-------------------|---|-----------------|
|  A | 電気の透過性が悪く、高土の多い土質 |  B | 電気の透過性が良い砂質土質   |
|  C | Bと同じで読みと判定された部分   |  D | 谷河川もしくは埋埋と異なる土質 |
- (断面は地中レーダーの計測をもとに斜傾角以北としたもの。縮尺不詳)

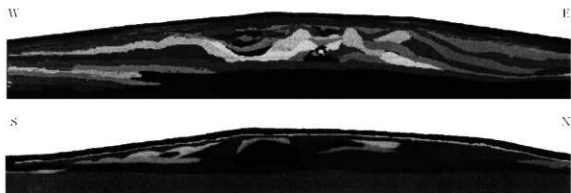


図34 地中探査レーダーによる墳丘調査資料

その図面に基づくならば、第1次墳丘面は旧表土上に0.5m前後の盛土を墳丘中心部と外縁部の2段階にわたり構築している。つづく第2次墳丘面は墳丘中心部付近に山状の盛土を2カ所造営し、これらを覆う状態で墳丘中央部と外縁部に盛土しており、フラットな上面を形成している。第1次墳丘面と第2次墳丘面の外縁部を覆う状態で第3次墳丘面が構築される。ただし、その規模は小さいため第2次墳丘面の一部である可能性もある。第4次墳丘面は第2次墳丘面上に盛土されたもので、この面の完了後に墓墳が掘削され、最終的にはこれを被覆する墳頂面が形成されたようである。

一方、本古墳群の前の山古墳は横穴式石室を内蔵する6世紀末から7世紀初頭の円墳であるが、その盛土構成は極めて細密である。すなわち、横穴式石室の構築と一体となり第1次墳丘面が構築され、これらを覆う状態で第2次墳丘面が形成されるが、外側より墳丘中心部に内傾する状態で積み上げられている。

三奈山古墳の構築原理は横穴式石室を内蔵する6世紀後半以降の類型よりも、5世紀代にかかる万年寺八幡山古墳におけるそれと共通する内容である。したがって、墳丘構築原理からは古相を指示している。

墳丘の構築過程で判明した各段階の墳丘面は、墳丘中心部より同心円状に構築された外周と外観を呈するが、一部には墳丘中心部より南方向に広がる盛土や窪み状遺構が存在することである。当該部分(Ⅱ-5段階・Ⅳ-3段階)の盛土は他の部分と比して細密で、あたかも上位に重量物を構築する前提で形成されたような感じを与えている。

この範囲については、試掘調査や地中探査レーダーの資料で補足すると、かなり限定される。すなわち、Ⅱ-5段階の広がりには墳丘中心部よりやや南から始まり、南および東西は設定されたグリッドの範囲で検出されている。地中探査レーダーでは電波の透過性がよい範囲として把握されており20m四方に及ぶ。ただし、第2次墳丘面そのものを反映している可能性もある。その上位に形成されたⅣ-3段階の窪み状遺構は、やはり墳丘中心部の南付近から南方向に位置する。これが、終末期古墳の横穴式石室の基盤面で観察される掘り込み地盤のような土壌状を呈している点は興味深い。ただし、その内部は版築状の工法でないものの、こうした墳丘中心部から南方向に主軸をとる構造は、横穴式石室の配置プランと共通する。このことは、先に考察した墳丘構築原理が古相を指示する内容であるとともに、本古墳の性格を暗示している。

本古墳は墳丘構築過程のさなかにHr-FAが堆積している点で、6世紀前半に構築された産物であることになり、須恵器編年のMT15型式併行期にあたる。この段階の北武蔵における古墳の内部主体は、竪穴式石櫛、木棺直葬、櫛櫛などを見るが、埼玉県児玉郡神川町北塚原7号墳が指示するように、小規模な円墳(径16m)から横穴式石室の採用が開始されている(太田2007)。

本古墳の立地にかかる歴史地理的な環境を重視するならば、旭・小島古墳群の北側にのびる本庄段丘崖下は、かつて烏川や神流川の氾濫源であった。ちなみに、現在本庄市の北限を流水する利根川は中世末以降に群馬県前橋市付近から氾濫して新たな流路となったもので、周辺において古代に利根川は存在しない。したがって、本古墳群は烏川水系の最下流部の中で把握する必要がある。烏川水系は榛名山西方の浅間山付近に水源を有し、碓氷川、鏡川、鮎川、神流川、井野川などと合流している。つまり、水系上より見た旭・小島古墳群は上毛野の南端に位置しているといっても過言ではない。

かかる観点からMT15型式併行期に構築された横穴式石室を上毛野地域の烏川水系せいに求める

ならば、群馬県安中市梁瀬二子塚古墳（碓氷川水系）が該当する。本古墳で観察されたIV-3段階の窪み状遺構の範囲は南北で11.5mを測る。この距離は梁瀬二子塚古墳の横穴式石室の全長に近似している。また、三奈山古墳の現状が直径に比して異状に低い墳丘高を考慮すると、第4次墳丘面の上位に横穴式石室を設置して円丘部を構築するだけの空間は十分確保されている。

以上の諸点から、本古墳は初期横穴式石室の造営を前提に構築された可能性を示唆するものである。

#### (5) 三奈山古墳の造営に関する問題点

本古墳は発掘調査により墳丘部を完全に削平し、周堀の大半を完掘した。にもかかわらず、古墳に関連した遺物は皆無に等しく、葦石や埴輪などの外部施設も認められず、また内部構造も検出されなかった。こうした点で、調査対象物が古墳であったのかという疑問も浮上する。しかし、構築原理や陸橋部をそなえた周堀プランの存在などから、古墳時代の円墳と認定した。

三奈山古墳で問題となるのは、異状な低墳丘と内部主体が存在しないことに加え、外部施設たる埴輪がまったく未検出な点である。すなわち、本古墳群においては、TK208型式併行期よりB種ヨコハケ調整円筒埴輪を採用した円墳が数地点で確認されており、本古墳の北に隣接する三奈山2号墳（径22m）でも出土している。同じく近隣の三奈山7号墳（長28m）・同8号墳はTK47型式併行期と推定され、円筒埴輪のほか人物・馬などの形象埴輪も樹立している。また、三奈山7号墳では「周堀の覆土中位からは、ゴマ粒大程確認されている（本庄市教育委員会1984、25頁）」ことが報告されているが、この火山灰様のものはHr-FAであった可能性が高い。

石神境古墳は径17mを測る円墳で、MT15型式もしくはTK10型式併行期と考えられるが、円筒埴輪に加え人物、馬、家の各種形象埴輪が樹立している。

ところが、三奈山古墳は墳丘中に被覆されたHr-FAの存在から、当然MT15型式併行期の構築物と帰結されるが、埴輪はまったく検出されなかった。さらに、葦石がまったく存在しないことも特記される。こうした点で本古墳は何らかの理由により、構築放棄された未完の古墳である可能性を暗示している。

ここで、問題となるのは、当該時期に直径78m以上を測る全国でも有数の巨大円墳が旭・小島古墳群に出現した歴史的な経緯とその位置づけにある。すなわち、ほぼ同時期の北武蔵において埼玉古墳群で日本最大規模をほこる丸墓山古墳（径105m）が築造されている事実との関係が目される。

丸墓山古墳は、墳丘下の旧表土内にHr-FAの堆積が確認されており、当該テフラ降下直後から築造が開始されたことが判明している（岡本2003）。さらに、埼玉県熊谷市甲山古墳（塚田・太田1990）は径90mの巨大円墳で、埴輪や須恵器が出土しており6世紀前半と推定されている。つまり、わずかな時間差こそあれ、同時期の北武蔵で巨大円墳が3基築造されたことなる。

3基の古墳造営を順序だてるならば、三奈山古墳を造営中にHr-FAが降灰し、その後も高さ2.6mまで盛土作業が行われるものの、最終的には内部主体や外部施設の構築まで至っていない。一方、Hr-FAが当時の地表面に堆積した直後に丸墓山古墳の造営が開始され、高さ18.9mの墳丘を形成し、埴輪を囲繞させて完成している。甲山古墳も近い時期に造営され、高さ11.25mの2段築成墳丘で埴輪を樹立させて石櫛（竪穴系もしくは箱式石棺か）を内蔵し完成しているのである。

三奈山古墳は未完の古墳であった可能性を暗示しており、盛土の構築状態によるかぎり横穴式石室を築造しようとした可能性が示唆される。この点で留意しなければならないことは、埼玉古墳群にお

ける盟主級古墳の内部主体の変化である。最初に造営された埼玉稲荷山古墳(TK23~TK47)の主体部は竪穴式石櫛である可能性が指示されており、その上位に礫層と粘土層が追築されている。二子山古墳(TK47)は後円部の盗掘穴に散乱する礫をもとに礫層と推定されているが(若松2007)、本古墳が群中で最大規模の前方後円墳であることや時期的な観点から、竪穴式石櫛などを含む複数埋葬も考慮する必要がある。丸墓山古墳(MT15)は墳丘の傾斜や段築の状態、墳頂部の平坦面の規模等を考慮すると竪穴式石櫛の可能性が高い。同古墳群で最初に横穴式石室を採用するのは埼玉將軍山古墳(MT85)の段階からで、埼玉古墳群における横穴式石室の採用は、上毛野における盟主級古墳より後出する。

こうした北武蔵の盟主級古墳にかかる内部主体の変化に留意するならば、三奈山古墳は何らかの理由で北武蔵初の初期大型横穴式石室を構築することができなくなり、未完の古墳となった可能性を暗示している。

## 6) 三奈山古墳のテフラ

### a. 試料と方法

試料は、三奈山古墳から採取されたテフラである。この試料中には、肉眼的に白色鉱物を特徴的に多く含んでいる。

試料は、100g程度を取り出し、1φ(篩い目0.5mm)、2φ(篩い目0.25mm)、3φ(篩い目0.125mm)、4φ(篩い目約0.063mm)の篩いを用いて湿式篩分けを行った。篩い分けした1φおよび2φ残渣は、実体顕微鏡を用いて軽石などに注目して観察した。また、4φ残渣は、重液(テトラプロモエタン;比重2.96)を用いて重鉱物と軽鉱物に分離し、それぞれ水浸プレパラートを作り偏光顕微鏡を用いて各鉱物を観察した。

重鉱物は、角閃石(普通角閃石:Hor)、斜方輝石(紫蘇輝石:Opx)、単斜輝石(普通輝石:Cpx)、不透明鉱物(Opq)を同定・計数した。さらに、軽鉱物は、斜長石(Pl)、ガラス、不透明鉱物(Opq)を同定・計数し、ガラスは、町田・新井(1992)の分類に従って、バブル型平板状(b1)、バブル型Y字状(b2)、軽石型繊維状(p1)、軽石型スポンジ状(p2)、急冷破砕型(co)に分類した。

火山ガラスは、横山ほか(1986)の方法に従って、温度変化型屈折率測定装置(RIMS86)を用いてガラスの屈折率(n)を測定した。さらに、斜方輝石は、横山・山下(1986)の方法に従って、同様に斜方輝石の屈折率(n2)を測定した。

### b. 結果

1φおよび2φ残渣を実体顕微鏡で観察すると、1.5~0.5mmの白色軽石が少量見られた(写真26)。また、斜長石や斜方輝石あるいは単斜輝石が多く見られた(写真26)。なお、これらの輝石類の表面にはガラスが付着したものも見られた。

4φ残渣の重鉱物は、斜方輝石および単斜輝石からなり、斜方輝石の占める割合が高く、角閃石はまれである(表1)。なお、磁鉄鉱や磁鉄鉱が付着する輝石類が多く含まれていた。さらに、軽鉱物は、斜長石が多く含まれ、軽石型繊維状ガラス(p2)などのガラスが約19%含まれていた。

4φ中ガラスの屈折率(n)は、1.4986-1.5055の範囲を示し、その平均値は1.5026であった。また、

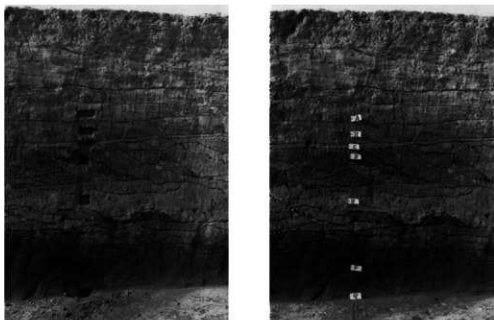
4φ中斜方輝石の屈折率(n2)は、1.7057-1.7094の範囲を示し、その平均値は1.7074であった。

1φおよび2φ残渣の実体顕微鏡観察では、少ないものの白色軽石が見られた。4φ残渣の重鉱物

表1 堆積物中のテフラの特徴 (テフラ文献値は、町田・新井, 1992による)

試料	重鉱物				軽鉱物				ガラスの屈折率 (n) レンジ (平均値)	Opxの屈折率 (n2) レンジ (平均値)	
	OpX	Cpx	Hor	Pl	b1	b2	p1	p2			co
Sa-1	92	39	—	108	1	7	4	10	3	1.4986-1.5055 (1.5026)	1.7057-1.7094 (1.7074)
As-B	珪晶鉱物 (OpX, Cpx)									1.524-1.532 (-)	1.708-1.710 (-)
Hr-FP	珪晶鉱物 (Hor, OpX)									1.501-1.504 (-)	1.708-1.712 (-)
Hr-FA	珪晶鉱物 (Hor, OpX)									1.500-1.502 (-)	1.709-1.712 (-)
As-C	珪晶鉱物 (OpX, Cpx)									1.514-1.520 (-)	1.706-1.711 (-)

組成は、斜方輝石が最も多く単斜輝石が含まれていた。また、同軽鉱物組成は、斜長石が多く含まれ、軽石型繊維状ガラスなどが軽鉱物中約19%程度含まれていた。一方、ガラスの屈折率 (n) は、1.4986-1.5055の範囲を示し、斜方輝石の屈折率 (n2) は、1.7057-1.7094の範囲を示す。こうした4φ中のガラスや斜方輝石の屈折率値は、榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP) に近い値を示すが、重鉱物中に角閃石が計数されないことから、このテフラとは特定できない。さらに、この榛名二ツ岳伊香保テフラ (Hr-FP) は、その降灰軸が北東方向であるため、この三笠山古墳地域には降灰していない。軽石が少ないため軽石ガラスの屈折率を直接測定していないが、1φ中に見られた数少ない軽石は榛名二ツ岳渋川テフラ (Hr-FA) である可能性もある。ただし、軽石が極端に少ないこと、細粒部のガラスも多くないことから、一時的なテフラでないことも考えられる。なお、浅間起源のテフラガラスの屈折率とは明らかに異なることから、浅間テフラの可能性は低い。なお、肉眼的に見られた白色鉱物は、その多くが斜長石である。



三笠山古墳墳丘断面土壌分析サンプル採取状態

## 6 旭・小島古墳群遺構外出土遺物

小島西土地区画整理事業では、平成元年以来の試掘・発掘調査・工事立会に伴い、表土・耕作土、掘乱坑等から古墳関連の資料を中心に少なからぬ点数の遺物を出土・採集している。これらのうち本来帰属していた遺構が確定できない資料を遺構外出土遺物として一括した。

### (1) 土器

#### 土師器 [1~25] (図35、写真14)

土師器は杯・高杯・埴が出土している。杯類は古墳時代終末期を中心とする資料で占められ、一部に古代にまで下るものも含まれる。しかし、横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳では、古墳造営の停止後も古代に至るまで断続的な祭祀行為が見られる場合があり、また本書に報告の区画整理事業地内には集落遺跡が存在していないことから、これらの資料も本来は古墳に伴う遺物であった可能性が高いと考えられる。

24は古墳時代後期の大型高杯の脚部で、器壁が薄く、内面に粘土帯の積上痕を明瞭に残す。25は埴の胴部で、底部が窪み底となっている。外面はハケ調整ののち下半にやや粗いへら磨きを施している。須恵器 [1~23] (図36・37、写真15・16)

1~3は提瓶である。2には環状の耳がつく。4はフラスコ形長頸壺状の胴部破片で、内外面の一部に灰緑色系の釉が見られ、灰釉陶器の可能性も考えられる。5~7は瓶類の口縁部、8~10は瓶類の胴部で、うち5は平瓶の口縁部と判断される。

11は壺類の胴部と思われる。12は短頸壺で、口縁部は緩やかに外湾しながら緩やかに立ち上がる。

13~23は壺類の破片である。13・14は口縁部の破片で外面には凹線と櫛描波状文がめぐる。15~23は胴部の破片で、成形はいずれもタタキ成形による。

旭・小島古墳群遺構外出土土器観察表

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 杯	口径 10.8 底径 — 器高 4.2	口縁部は体部との境に稜を持ち、外反する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部~底部磨減。	チャート・角閃石 内外一褐色	完形。
2	土師器 杯	口径 (10.8) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ。	石英・角閃石 内外一褐色	1/5残存。
3	土師器 杯	口径 (11.0) 底径 — 器高 (3.4)	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は直立する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	雲母・白色粒 内外一褐色	1/7残存。
4	土師器 杯	口径 11.0 底径 — 器高 3.2	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く内屈する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ後に体部指頭痕。内面一口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ。	雲母・白色粒 内外一褐色	ほぼ完形。
5	土師器 杯	口径 (10.9) 底径 — 器高 3.7	体部~口縁部は内湾気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。内面一口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内外一褐色	1/3残存。
6	土師器 杯	口径 (11.2) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。 内面一口縁部~底部ナデ。	石英・角閃石 内外一褐色	1/6残存。
7	土師器 杯	口径 12.0 底径 — 器高 3.4	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は内湾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部~底部ヘラケズリ。内面一口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内一褐色 外一黄灰色	2/3残存。

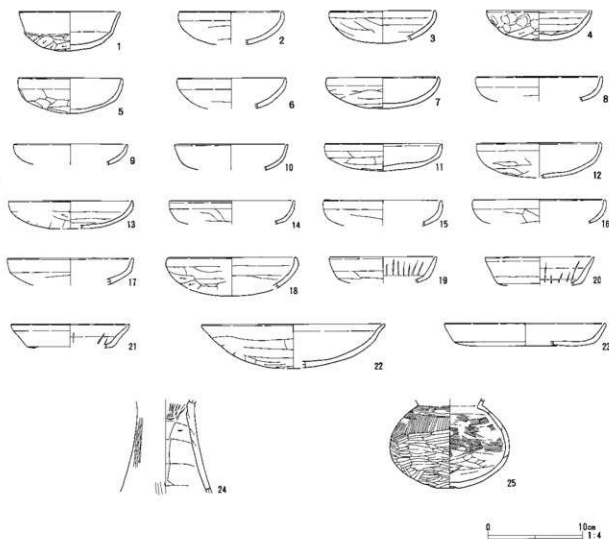


図35 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(1)

No.	器種	法量 (cm)	形部・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
8	土器 碗	口径 (13.1) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾気味に立ち上がる。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後弱いナデ。 内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	石英・角閃石 内外一橙色	口縁～体部片。
9	土器 碗	口径 (11.8) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾気味に立ち上がる。	外面一口縁部ヨコナデ、体部は摩耗のため調整不明瞭。 内面一口縁部～体部ナデ。	石英・角閃石 内外一橙色	口縁～体部片。
10	土器 碗	口径 (12.0) 底径 — 器高 —	口縁部は内湾気味に立ち上がる。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリだが摩滅。 内面一口縁部ヨコナデ、体部摩滅。	白色バミス・赤褐色粒 内外一橙色	1/4残存。
11	土器 碗	口径 (12.9) 底径 — 器高 2.9	口縁部は体部との境にわずかな稜を持ち、内湾気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ、内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・角閃石 内一にぶい橙色 外一橙色	1/3残存。
12	土器 碗	口径 (13.0) 底径 — 器高 (3.7)	体部は丸みを持ち、口縁部はやや内湾する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ後、体部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・角閃石 内一にぶい橙色 外一橙色	1/4残存。
13	土器 碗	口径 (13.0) 底径 — 器高 (3.0)	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は直立する。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ、内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	雲母・白色粒 内外一明赤褐色	1/3残存。



No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
14	土器器 環	口径 (13.2) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾気味に立ち上がる。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	石美・角閃石 内—ぶい橙色 外—褐色	口縁～体部片。
15	土器器 環	口径 (10.3) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部はやや内湾する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	石美・黒色粒 内—ぶい橙色 外—褐色	口縁～体部片。
16	土器器 環	口径 (13.8) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持ち、口縁部は内湾する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面一口縁部～体部ナデ。	石美・角閃石 内外—褐色	口縁～体部片。
17	土器器 環	口径 (13.2) 底径 — 器高 —	口縁部は体部との境にわずかな稜を持ち、内湾気味に立ち上がる。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	石美・角閃石 内外—褐色	口縁～体部片。
18	土器器 環	口径 (13.5) 底径 — 器高 (4.0)	体部から口縁部は内湾して立ち上がる。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面一口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	雲母・チャート・ 白色粒 内外—褐色	1/7残存。
19	土器器 環	口径 (11.2) 底径 — 器高 —	体部は外傾して立ち上がり、口縁部はやや内湾する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁部～体部ヨコナデ・縦位暗文。	石美・角閃石 内—ぶい橙色 外—褐色	口縁～体部片。
20	土器器 環	口径 (11.4) 底径 (8.7) 器高 —	体部は直線的に開き、口縁部はわずかに内湾する。底部は平底。	外面一口縁部ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ナデ・縦位暗文。	石美・角閃石 内外—褐色	口縁～体部片。
21	土器器 環	口径 (12.4) 底径 (8.9) 器高 —	体部は外傾して立ち上がり、口縁部は内湾して開く。底部は平底。	外面一口縁部ナデ、体部ヘラケズリ後ナデ。底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ナデ・縦位暗文。	石美・黒色粒 内外—ぶい褐色	口縁～体部片。
22	土器器 皿	口径 19.5 底径 — 器高 (4.7)	浅い体部から口縁部は湾曲気味に外反する。底部は緩やかな丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	角閃石・白色粒 内外—ぶい褐色	2/3残存。
23	土器器 盤	口径 (17.0) 底径 (14.9) 器高 2.4	体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する。底部は平底。	外面一口縁部～体部ナデ、底部ヘラケズリ。 内面一口縁部～底部ナデ。	石美・角閃石 内外—褐色	1/6残存。
24	土器器 高環	口径 — 底径 — 器高 —	下方に向かって広がる脚部。	外面一厚減するがわずかにミガキの痕跡残る。内面一脚部ヘラナデ、上に紋目。	微砂粒・黒色粒 内外—褐色	脚部片。
25	土器器 甗	口径 — 底径 2.5 器高 —	粘土組織み上げ成形。胴部は下位で大きく膨らむ。	外面一胴部ヘラケンマ、底部ナデ。 内面一胴部上半ハケム、胴部下半～底部ヘラナデ。	石美・赤褐色粒	口縁部欠損・胴部1/2欠損。

#### 旭・小島古墳群遺構外出土須恵器観察表

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 提瓶	口径 — 底径 — 器高 —	胴部粘土組織み上げ・タタキ成形。片面閉塞。	外面一胴部カキメ。 内面一胴部当て具位後回転ナデ。胴部正面と背面ナデ。	石美・白色バミス 内外—灰色	胴部1/3残存。
2	須恵器 提瓶	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は粘土組織み上げとタタキ成形。片面閉塞。肩2ヶ所に粘土紐による肥手貼り付け。	外面一胴部カキメ。内面一胴部当て具位後に回転ナデ、胴部正面閉塞後指ナデ・背面指ナデ。	石美・白色バミス 内—灰色 外—暗灰色	胴部～底部1/2残存。外面肩と底部内面に自然亀。
3	須恵器 (提瓶)	口径 — 底径 — 器高 —	提瓶の体部前面の破片と思われる。側面から前面に向かって器厚を増す。	外面一ロクロ整形。 内面一ロクロ整形。	石美・長石 内外—灰色	体部片。
4	灰輪内陶 瓶	口径 — 底径 — 器高 —	ロクロ成形。粘土板による片面閉塞。胴部上半外面と底部内面に灰オリーブ色の軸。	外面一底部側面回転ヘラケズリ。閉塞側面にロクロ痕を切るタタキ。	白色粒・黒色粒 内外—灰白色	1/2残存。
5	須恵器 平瓶	口径 7.4 底径 — 器高 —	ロクロ成・整形。	外面一口縁部中に凹線1条。 内面一胴部に閉塞痕。	白色バミス 内外—灰色	口縁部2/3残存。
6	須恵器 瓶	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部片。	外面一ロクロ調整。 内面一ロクロ調整後ナデ。	白色粒 内—灰色 外—黄灰色	小片。
7	須恵器 瓶	口径 — 底径 — 器高 —	胴部上面を穿孔後に口頸部接合。	外面一ロクロ調整。 内面一ロクロ調整後胴部ナデ。	石美・白色粒 内外—灰色	1/6残存。

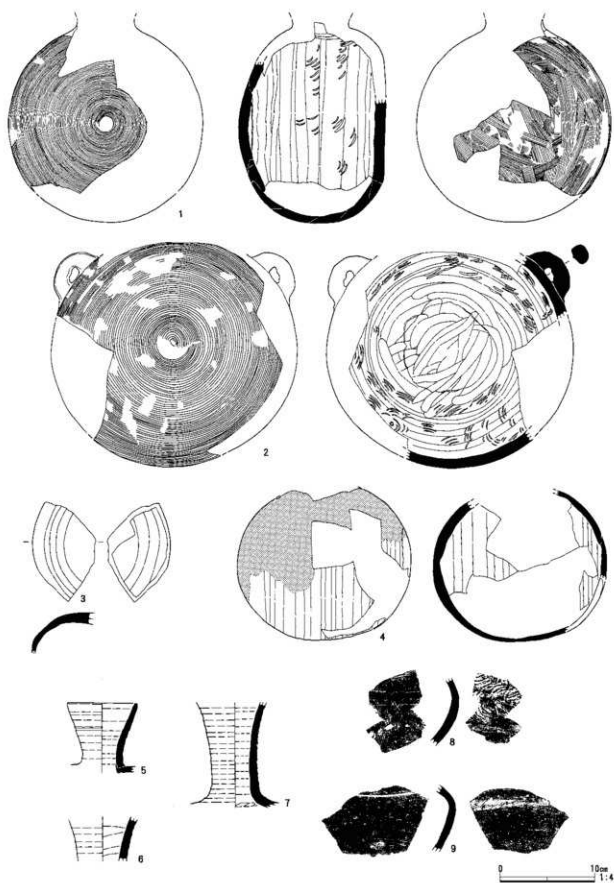


图36 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(2)

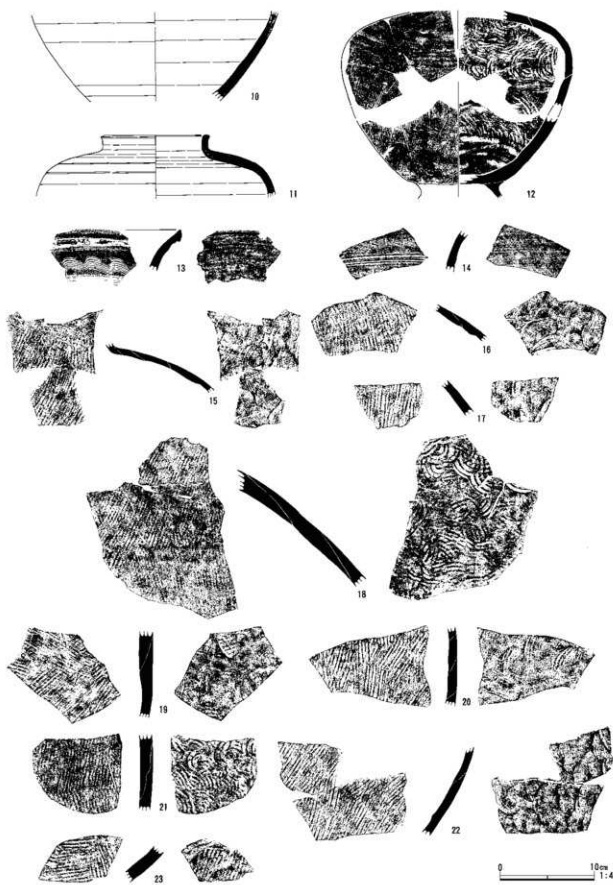


图37 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(3)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
8	須志器 瓶	口径 — 底径 — 器高 —	肩付近の破片。タタキ成形。	外面一胴部カキメ。 内面一胴部同心円文当て具痕と横方向のナデ。	石英・白色粒 内外一灰色	小片。10と同一個体か。
9	須志器 瓶	口径 — 底径 — 器高 —	胴部下半はタタキ成形。肩部に凹線1条。	外面一口調調整だが、一部にわずかなタタキ。 内面一口調調整。	白色粒 内外一灰色	小片。
10	須志器 瓶	口径 — 底径 — 器高 —	タタキ成形。肩部は張り強く、弱い凹線がめぐる。付高台。	外面一胴部カキメ。内面一胴部同心円文当て具痕と横方向のナデ、頸部に指頭痕。底部ナデ。	石英・白色粒 内外一灰色	2/3残存。
11	須志器 (造)	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は丸みを持って立ち上がる。	外面一胴部回転ナデ、下端を回転へラクスリ。 内面一胴部回転ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一灰色	胴部下位片。 12と同一個体の可能性あり。
12	須志器 短頸壺	口径 (10.6) 底径 — 器高 —	肩部は丸みを持つ。口縁部は短く直立し、口唇部は外方にわずかに突出する。	外面一口縁部～胴部回転ナデ。 内面一口縁部～胴部回転ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一灰色	口縁～胴部上位片。
13	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	ロクロ成・整形。	外面一口縁部3条の凹線の上に櫛歯状文残る。口唇部にも櫛歯状文残る。	磁赤、褐色粒 内外一にぶい黄色	口縁部小片。
14	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	ロクロ成形。	外面一口縁部櫛歯状文と凹線。	白色粒 内外一にぶい黄褐色	口縁部小片。
15	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	粘土組織み上げ・タタキ成形。	外面一胴部平行タタキ。 内面一胴部同心円文当て具痕、頸部ナデ。	石英・白色粒 内一灰色 外一灰色	胴部小片。 外面に自然輪。
16	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	粘土組織み上げ・タタキ成形。	外面一胴部平行タタキ。 内面一胴部同心円文当て具痕	石英・白色粒 内一灰褐色 外一灰色	胴部小片。外面に自然輪。15と同一個体か。
17	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	粘土組織み上げ・タタキ成形。	外面一胴部平行タタキ。 内面一胴部同心円文当て具。	白色粒 内一黄灰色 外一黒褐色	胴部小片。
18	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	粘土組織み上げ・タタキ成形。	外面一胴部平行タタキ後ナデ。 内面一胴部同心円文当て具痕後ナデ。	白色粒 内一霜黄色 外一黄灰色	胴部破片。
19	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	粘土組織み上げ・タタキ成形。	外面一胴部平行タタキ後ナデ。 内面一胴部同心円文当て具痕後ナデ。	白色粒 内一黄灰色 外一黒褐色	胴部小片。
20	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	粘土組織み上げ・タタキ成形。	外面一胴部平行タタキ。 内面一胴部同心円文当て具痕後ナデ。	白色粒 内一黄灰色 外一黒褐色	胴部小片。
21	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	粘土組織み上げ・タタキ成形。	外面一胴部平行タタキ後ナデ。 内面一胴部同心円文当て具痕後ナデ。	白色粒 内一灰黄褐色 外一にぶい黄褐色	胴部小片。
22	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	粘土組織み上げ・タタキ成形。	外面一胴部平行タタキ。 内面一胴部同心円文当て具痕後ナデ。	石英・白色粒 内一黄灰色 外一黒褐色	胴部小片。
23	須志器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	粘土組織み上げ・タタキ成形。	外面一底部平行タタキ後ナデ。 内面一底部は外面と同様のタタキ後に一部ナデ(底部叩き出し)。	白色粒 内外一黄灰色	底部付近小片。

## (2) 埴輪

### 円筒埴輪 [1～50] (図38～41、写真16～19)

古墳に伴って出土しているものではないものの、胎土・器形・法量・帰属年代等いずれの個体も従来、旭・小島古墳群で確認されている円筒埴輪の範疇にある資料である。

1は二条突帯三段構成で、突帯断面は三角形を呈する。第二段に半円形の透孔をもつが、外面二次調整を欠いている。集成8期を中心とする時期が考えられる。竪穴系埋葬施設をもつ古式群集墳段階の小型古墳に伴うものであろう。

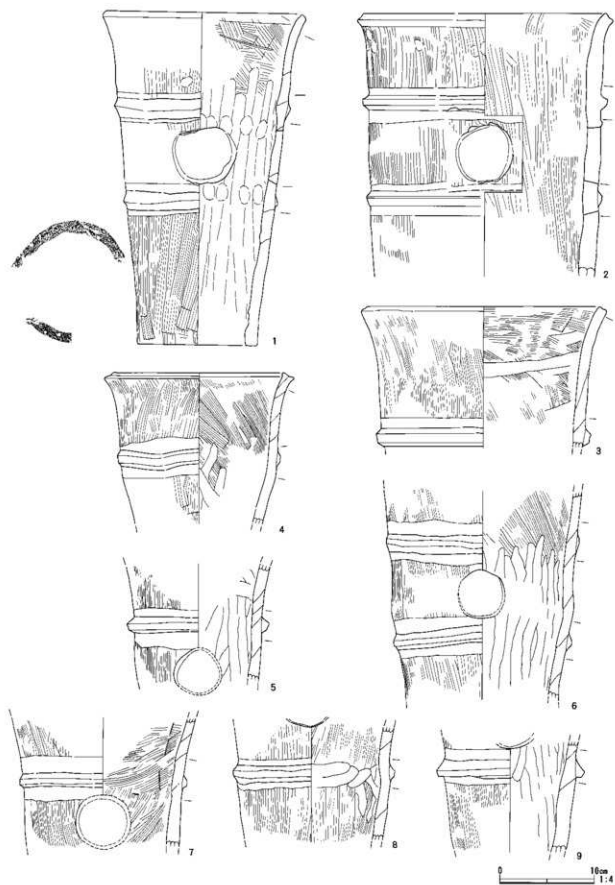


图38 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(4)

2～9は中段から最上段にかけての部位である。外面二次調整は施されず、断面が台形ないし崩れたM字形を呈する突帯がめぐる。確認できる透孔はすべて円形である。なお、2・3・6は3条突帯以上の大型品である可能性が高い。とくに2は25cmを超える大口径の個体で、やや大型の円墳に伴うものであったことが考えられる。

10～12は第一段のみの部位である。12は幅の広い基部成形を行ったのち、上位を立ち上げている。

13～19は最上段口縁部の破片である。口唇部に強度ナデを加え、口唇端面に窪みを形成する個体が目立つ。14は強く外湾し、口唇部を丸く仕上げている。

13・20～29および37は突帯を含む破片である。とくに突出度の高い突帯は見られず、断面は台形ないし崩れたM字形を呈する。13は最上段の幅が狭いという特徴が覗かれる。

20・21・25・34・36～42および44は透孔を含む破片である。全形の判明する個体はないが、直線的に切り抜かれた箇所は認められず、いずれも円形ないし半円形の透か口と推測される。

45の外面にはヘラ状工具による直線状の刻線が、横方向に2条刻まれている。

44～50は基底部を含む第二段の破片である。外面底部調整を施す個体は含まれない。45の底面には棒状の圧痕がある。46の内面には作業台の木目圧痕が見られる。

#### 朝顔形埴輪 [51～55] (図41、写真19)

いずれも口縁部の破片である。口縁部中位を擬口縁状に成形する個体は見られない。51の内面には2条の直線状刻線が観察される。

#### 形象埴輪

形象埴輪には家・人物・盾持人物のほか器財埴輪として盾もしくは靱と推定される破片が見られる。

#### 家 [1～4] (図42、写真19)

1は屋根の棟から脱落した堅魚木である。成形は中空式で、粘土板を半管状に湾曲させて棟に取り付けている。調整は外面がハケ、内面が不定方向のナデである。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

3・4はともに基部周辺の破片である。3は基底部からやや上方に横位の突帯がめぐり、この突帯から直上方向へ延びる縦位の突帯の剝離痕が見られる。壁外面に格子状の突帯を配置する型式の家形埴輪であったと推測される。突帯の下方には緩やかな波状を呈する刻線が存在する。4は基底部に沿って幅広の粘土帯がめぐる。3・4とも調整は表面がハケのちナデ、裏面がナデで、胎土に片岩・チャートを含み、色調はにぶい橙色を呈する。

#### 人物 [5・6] (図42、写真19)

5は女子人物の頭部から脱落した分銅形髷の端部と推定した。平板な造りで、裏面の一部に剝離痕が見られる。調整は表面がハケおよびナデ、裏面がナデで、端面には丁寧なナデが施されている。胎土に片岩・チャートを含み、色調はにぶい橙色を呈する。

6は上衣裾部付近の破片である。緩やかに外湾しながら広がる胴の下端に粘土帯を貼付して裾部を表現していたと推測されるが、胴下端の粘土帯はすべて剝落している。調整は外面が縦位のハケ、内面が不定方向のナデである。胎土に粗い片岩・チャートを含み、色調はにぶい橙色を呈する。

#### 盾持人物 [7] (図42、写真19)

盾持人物の右側頭部周辺の破片である。粘土を貼付して耳を筒状に造形し、内部にヘラ状工具によ

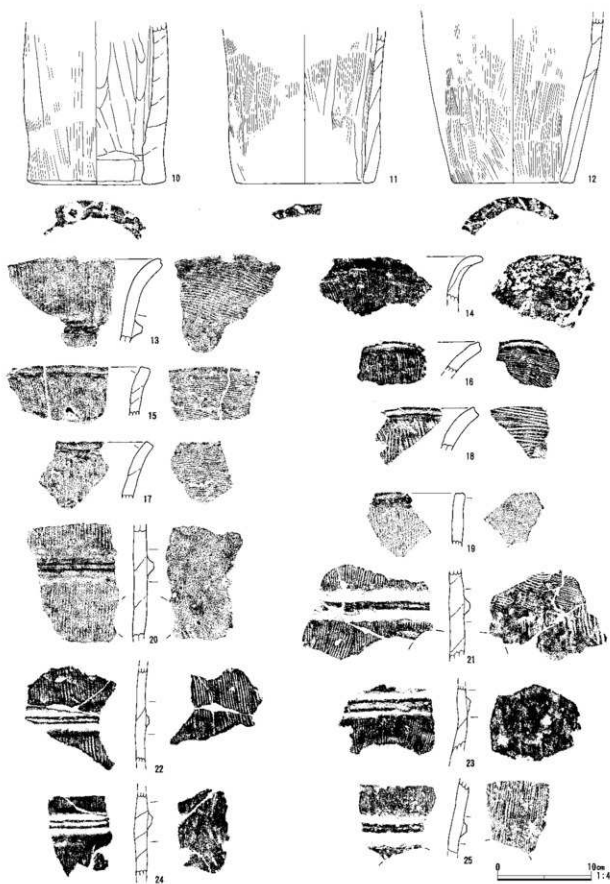


图39 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図5)

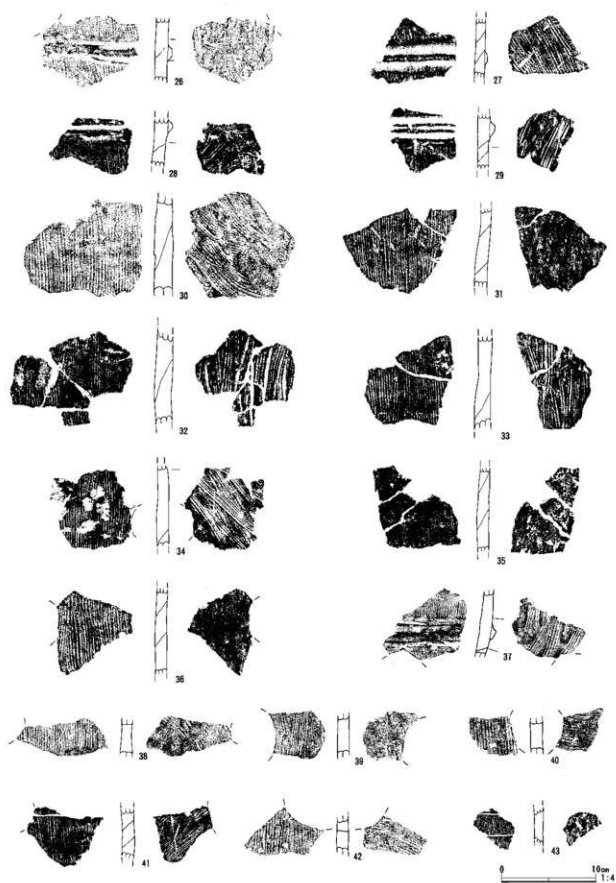


图40 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(6)



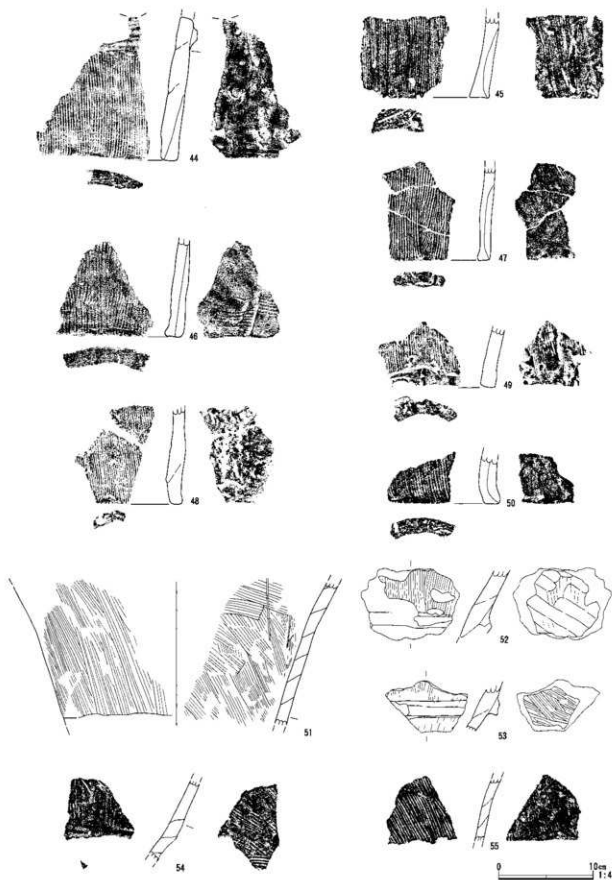


图41 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図7)



图42 旭・小島古墳群遺構外出土遺物実測図(8)

旭・小島古墳群遺構外出土青磁観察表

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	青磁碗	口径 底径 器高	— — —		見込み部に五弁花文。	窯織 内—明オリーブ 外—明緑灰色	底部片。

る穿孔を加え、耳孔を表現している。耳の前方には粘土紐を貼付して眉を表わしている。眉の下方には眼孔の一部が残る。また、耳の下方には顔面輪郭部の剝離痕が延びている。範囲は判然としないが、眉の付近に赤色塗彩の痕跡が観察される。調整は表面がハケののち眉周辺にナデを加え、筒状の耳部と内面にはナデを施している。胎土に片岩・チャートを含み、色調はにぶい橙色を呈する。

**器種不明** [ 8～10] (図42、写真19)

8は端部が直線をなす板状の破片である。盾または靱の一部と推測される。表面が縦位のハケ、裏面がナデで、端面には丁寧なナデが施されている。胎土に粗い片岩・チャートを含み、色調はにぶい赤褐色を呈する。

9は円筒状の破片で、中位に棒状工具の刺突による径3mmほどの小孔が存在する。調整は外面が縦位のハケ、内面が不定方向のナデである。胎土に粗い片岩・チャートを含み、色調はにぶい赤褐色を呈する。

10はやや厚手の造りで、上下方向へ緩やかに湾曲している。調整は外面が斜位のハケのち不定方向のナデで、内面は丁寧なナデが施されている。

### (3) 陶磁器

**青磁** [ 1] (図42、写真19)

青磁碗の底部の破片である。内面に五弁の花文がある。焼成・発色とも良好で、内面は灰オリーブ色を呈する。

## 7 塩原屋敷遺跡

### [内出前ⅡA地点]

調査期間 平成元年4月27日～平成元年9月11日  
調査面積 3,300㎡  
調査原因 区画整理に伴う道路建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇

### [A地点]

調査期間 平成2年11月4日～平成3年3月14日  
調査面積 950㎡  
調査原因 区画整理に伴う道路建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [B地点]

調査期間 平成2年10月23日～平成2年11月9日  
調査面積 120㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [内出前ⅡB地点]

調査期間 平成2年12月10日～平成2年12月17日  
調査面積 90㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [C地点]

調査期間 平成3年4月4日～平成3年4月19日  
調査面積 129㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### [D地点]

調査期間 平成3年4月4日～平成3年5月20日  
調査面積 282㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

**[堂場 I A地点]**

調査期間 平成3年5月23日～平成3年5月31日  
調査面積 300㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

**[E地点]**

調査期間 平成3年9月2日～平成3年9月12日  
調査面積 230㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

**[F地点]**

調査期間 平成4年5月28日～平成4年7月14日  
調査面積 285㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

**[G地点]**

調査期間 平成4年7月6日～平成4年7月13日  
調査面積 285㎡  
調査原因 区画整理に伴う道路建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

**[堂場 I B地点]**

調査期間 平成5年8月1日～平成5年9月2日  
調査面積 150㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

**[堂場 I C地点]**

調査期間 平成7年10月31日～平成7年12月7日  
調査面積 187㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[H地点]

調査期間 平成8年4月7日～平成8年6月26日  
調査面積 589㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[内出前ⅡK・L地点]

調査期間 平成9年10月22日～平成10年2月13日  
調査面積 1580㎡  
調査原因 区画整理に伴う住宅建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

[区6-32号線地点]

調査期間 平成11年6月8日～平成11年6月30日  
調査面積 588㎡  
調査原因 区画整理に伴う道路建設  
調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕

(1) 遺構

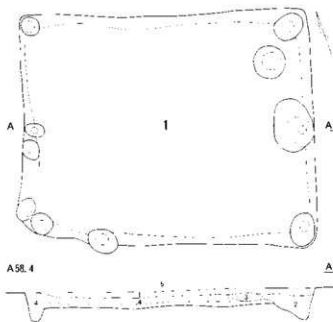
塩原屋敷遺跡は旭・小島古墳群の東群と西群の中間地点にあり古墳群を東西に分ける浅い埋没谷上に立地している。塩原屋敷本体は方形にめぐる溝(SD-1)に区画された範囲であるが、周辺部においても方形竪穴状遺構、溝等の遺構が比較的広い範囲で検出されている。伝承によれば、武田信玄の家臣であった塩原勘解由らが、武田家の滅亡後、当地に移住し居を構えたといわれるが、出土遺物には中世の資料も多く、屋敷の創始は伝承よりもさらに遡る可能性が高い。

a. 方形竪穴状遺構

方形竪穴状遺構は7基を検出した。分布は塩原屋敷の本体部分の区画と思われるSD-1から離れ、グリッドラインをO以西に偏る傾向が見られる。覆土はロームブロックを多量に含み、しまりの強い堆積を示すことから、人為的な埋め戻しが想定される。所属時期は、遺物を出土していないため明確ではないが、周辺遺跡の事例からして、ほとんどが中世に属するものと考えられる。

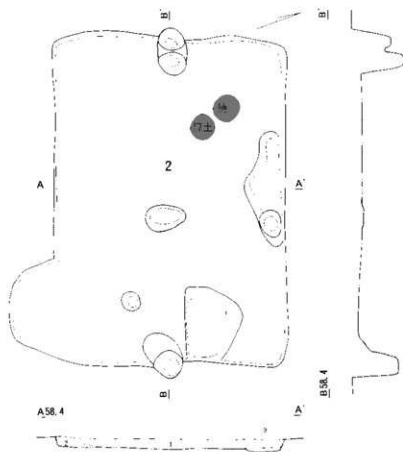
SF-1 (図43)

O-8グリッドに位置する。長方形を呈し、長径3.20m、短径2.50m、確認面からの深さ17cm前後を測る。覆土は3層に分割され、上層に白色岩滓、ロームブロックを多量に含む黒灰褐色土、中層にロームブロックを多量に含む斑状に堆積する暗褐色土、下層にロームブロックを主体とし、黒色土ブロックを含む暗黄褐色土の堆積を認める。中・下層は多量のロームブロックを含み、しまりが強いことから意図的に埋め戻しを行っている可能性が高い。床面には四隅に柱穴をもつほか、西壁、南壁にも小柱穴を配する。北東隅近くの床面にも柱穴状の小坑が見られる。遺物は出土していない。



**SF-1土層説明**

- 1 黒灰褐色土 白色岩屑を少量含み、ロームブロックを多量に含む。
- 2 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。
- 3 灰褐色土 ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。
- 4 暗褐色土 大型のロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とし、斑状に堆積する。黒色土ブロックを少量含む。しまり強。

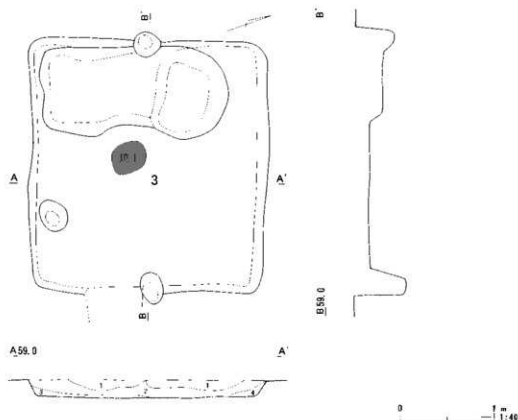


**SF-2土層説明**

- 1 黒灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 2 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。

0 ————— 1 m  
1:40

図43 塩原屋敷遺跡 SF 平面図および土層断面図(1)



SF-3 土層説明

- 1 黒褐色土  
白色岩滓を少量含み、ロームブロックを多量に含む。
- 2 暗褐色土  
ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。

- 3 暗灰色土  
ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。焼土ブロック少量含む。しまり強。
- 4 暗黄褐色土  
ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。

図44 塩原屋敷遺跡 SF 平面図および土層断面図(2)

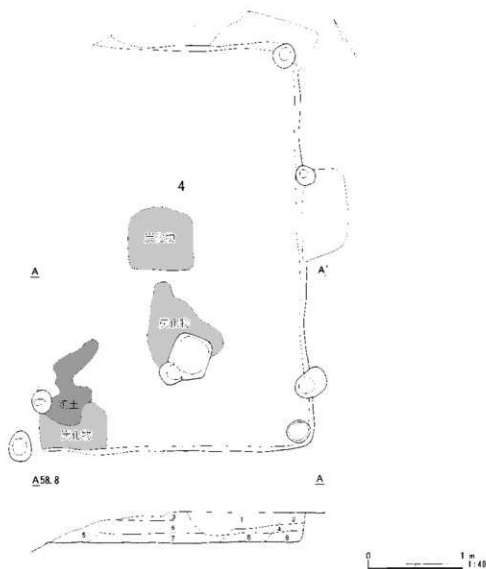
SF-2 (図43)

S-6・7グリッドに位置する。長方形を呈し、長径3.54m、短径2.50m、確認面からの深さ12cm前後を測る。覆土は南壁付近の一部にロームブロックを多量に含み斑状をなす暗灰褐色土を認める以外は単層で、全体にロームブロックを多量に含む暗灰褐色土が堆積している。短辺の中央に棟持柱の柱穴を配し、北壁沿いの中央の1箇所にも柱穴を設けている。床面には東壁と北壁に接して不定形の浅い落ち込みがあるほか、中央および東寄りの2箇所に不整形の小坑が見られる。また、中央北西寄りには2箇所に円形の焼土面が存在する。遺物は出土していない。

SF-3 (図44)

U-12グリッドに位置する。東西にわずかに長い長方形を呈し、長径2.70m、短径2.50m、確認面からの深さ20cm前後を測る。覆土は4層に分割され、上層に白色岩滓、ロームブロックを多量に含む黒褐色土、中層にロームブロックを多量に含む斑状に堆積する暗褐色土、下層にロームブロックを主体とし、焼土ブロックを含む暗灰色暗または黄褐色土の堆積を認める。中・下層は多量のロームブロックを含み、しまりが強いことから意図的に埋め戻しを行っている可能性が高い。床面には短辺の中央に棟持柱の柱穴を配し、南壁沿いの1箇所にも柱穴を設けている。西壁寄りには不整形の落ち込みが





#### SF-4 土層説明

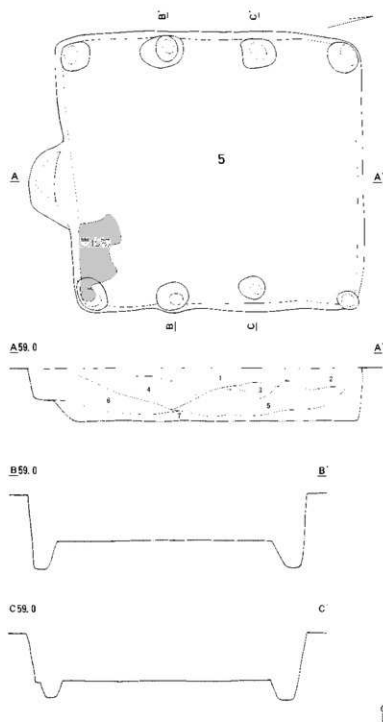
- |         |                                |         |   |
|---------|--------------------------------|---------|---|
| 1 黄褐色土  | ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。    | 6 暗褐色土  | 大型のロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。          |
| 2 暗黄褐色土 | 大型のロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。 | 7 暗褐色土  | ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。             |
| 3 暗褐色土  | 白色岩滓、ロームブロックを少量含む。             | 8 黄褐色土  | ロームブロックを主体とし、斑状に堆積する。しまり強。              |
| 4 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。    | 9 暗黄褐色土 | ロームブロックを主体とし、斑状に堆積する。黒色土ブロックを少量含む。しまり強。 |
| 5 黄褐色土  | ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。         |         |   |

図45 塩原屋敷遺跡 SF 平面図および土層断面図(3)

見られる。また、中央には不整形形の焼土面が存在する。遺物は出土していない。

#### SF-4 (図45)

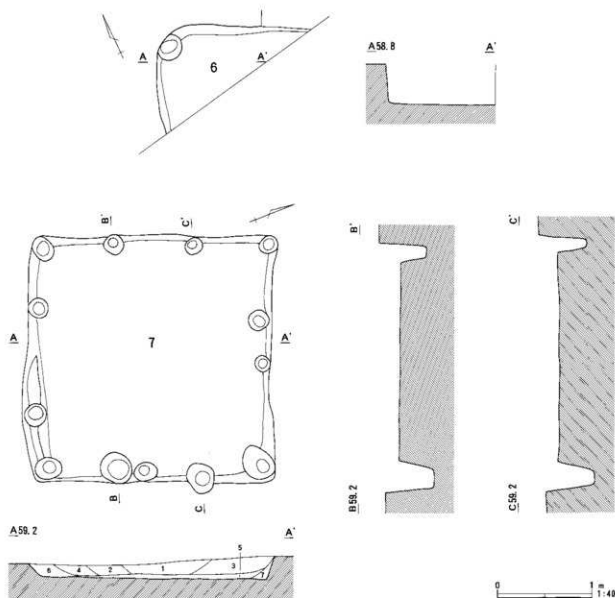
U-13・V-13グリッドに位置する。西壁を失っているが、原形は南北に長い長方形を呈するものと推測される。南北長4.27m、確認面からの深さ20cm前後を測る。覆土は全体にロームブロックを多量に含んで斑状に堆積し、しまりが強く、意図的に埋め戻しを行っている可能性が高い。床面には残



**SF-5 土層説明**

- |   |  |
|---|--|
| <p>1 暗褐色土<br/>As-A を多量に含み、ロームブロックを少量含む。<br/>しまり強。</p> <p>2 黒灰褐色土<br/>ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。<br/>しまり強。</p> <p>3 暗灰褐色土<br/>ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。<br/>しまり強。</p> | <p>4 灰褐色土<br/>大型のロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。<br/>しまり強。</p> <p>5 暗褐色土<br/>ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。<br/>しまり強。</p> <p>6 暗黄褐色土<br/>ロームブロックを主体とし、斑状に堆積する。<br/>しまり強。</p> <p>7 暗褐色土<br/>ロームブロックを多量に含む。</p> |
|---|--|

図46 塩原屋敷遺跡 SF 平面図および土層断面図(4)



SF-7土層説明

- 1 黒褐色土 白色岩屑を多量に含み、ロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。
- 4 暗褐色土 白色岩屑を少量含み、ロームブロックを多量に含

- 5 暗黄褐色土 大型のロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。しまり強。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とし、斑状に堆積する黒色土ブロックを少量含む。しまり強。

図47 塩原屋敷遺跡 SF 平面図および土層断面図(5)

存する二つ隅のほか東壁沿いの2箇所に柱穴を配している。床面中央南よりには柱穴状の小坑と隅丸方形の浅い落ち込みが重複し、また3箇所に分かれて炭化物の広がりが検出されている。遺物は出土していない。

#### SF-5 (図46)

V-13グリッドに位置する。南北にわずかに長い長方形を呈し、長径3.22m、短径2.95m、確認面からの深さ56cmを測る。覆土は2層に大別され、上層の2～6層はロームブロックを多量に含んで斑状に堆積してしまりが強く、意図的に埋め戻しを行っている可能性が高いのに対し、下層の7層はロームブロックを多量に含むものの相対的にしまりの緩い暗褐色土となっている。南壁中央には中段に外側に向かって段が付き、この部分に出入り口が存在したことが推定される。床面には四隅に柱穴をもつほか、東西の壁沿いにも2箇所づつの柱穴を配する。南東隅には炭化物の広がりが見出されている。片岩の破片をわずかに検出している。遺物は出土していない。

#### SF-6 (図47)

V-14グリッドに位置する。北側の一隅を検出している。隅丸方形で、確認面からの深さ40cmを測る。柱穴を1箇所検出している。遺物は出土していない。

#### SF-7 (図47)

W-13・14グリッドに位置する。ほぼ正方形を呈し、一辺2.60m、確認面からの深さ30cmを測る。覆土は全体にロームブロックを多量に含んで斑状に堆積し、しまりが強く、意図的に埋め戻しを行っている可能性が高い。床面には四隅に柱穴を持つほか、各壁沿いにも2または3箇所の柱穴を配する。片岩の破片をわずかに検出している。遺物は出土していない。

#### b. 溝

溝は総計22条を検出している。ほとんど遺物を伴わず、年代・性格などの明かな溝は少ないが、SD-1・SD-14など方形区画の一部をなすと推測される形状を示す事例も見られる。とくにSD-1は塩原屋敷中心部分を画する溝と考えられる。また覆土中にAs-Aを含む例が目立ち、所属時期が近世に下ると判断されるものが多い。

#### SD-1 (図48)

塩原屋敷本体の外郭をなす溝で、L-5グリッドおよびN-12グリッドで直角に屈曲し、主軸方位をN-16-Eにとる。断面形は底面が狭く、緩やかな船底状を呈し、ほぼ一定の深さに掘削されている。覆土は地点により微妙に異なるが、上層には全体にAs-Aを多量に含む灰褐色系の土層が見られ、中層以下はロームブロックを含んだ同じく灰褐色系の土層が堆積している。南西隅に近づくにしたがい、上層に礫の混入が目立つ以外、遺物は出土していない。所属時期は、中層以下にAs-Aの混入が認められないことから、近世前期以前に遡る可能性が高い。

#### SD-2 (図49)

F-4グリッドからF-5グリッドにかけて北西-南東方向へ直線的に走行する。断面形は浅い台形を呈し、南北に直線的に延びる。断面は逆台形を呈し、覆土にはAs-Aを含む灰褐色土およびロームブロックを含む暗黄褐色土の堆積を認める。遺物はなく、所属時期はAs-Aを含む土層の堆積から近世に下るものと判断される。

#### SD-3 (図49)

G-4グリッドからF-5グリッドにかけてSD-2と並ぶように北西-南東方向へ蛇行しながら走行する。SD-2と同様に、断面形は浅い逆台形を呈し、覆土にはAs-Aを含む灰褐色土およびロームブロックを含む暗黄褐色土の堆積を認める。遺物はなく、所属時期はAs-Aを含む土層の堆積から

近世に下るものと判断される。

#### SD-4 (図49)

G-5グリッドからJ-4グリッドにかけて位置し、北西-南東方向へほぼ直線的に走行する。断面形は浅い逆台形を呈し、覆土にはAs-A、ロームブロックを多量に含む黒灰褐色土の堆積を認める。遺物はなく、所属時期はAs-Aを含む土層の堆積から近世に下るものと判断される。

#### SD-5 (図49)

H-2、I-2グリッドにかけて位置し、北西-南東方向へ延びる。確認面から溝底までが浅い。遺物はなく、所属時期は不明である。

#### SD-6 (図49)

J-4グリッドからK-3グリッドにかけて位置し、北西-南東方向へ緩やかに蛇行しながら走行する。確認面から溝底までが浅い。小礫をわずかに含むものの遺物はなく、所属時期は不明である。

#### SD-7 (図49)

J-5グリッドからL-4グリッドにかけて位置し、一部でSD-4と並ぶように北西-南東方向へ緩やかに蛇行しながら走行する。断面形は逆台形を呈し、覆土にはロームブロックを多量に含む黒褐色土、As-A、ロームを主体とする暗黄褐色土、As-Aを含む暗灰褐色土などの堆積を認める。遺物はなく、所属時期は一部にAs-Aを含む土層が堆積することから近世に下るものと判断される。

#### SD-8 (図48)

J-5グリッドからK-5グリッドにかけて緩やかに湾曲しながら延び、K-5グリッドでほぼ直角に屈曲したのち、SD-4と平行して北東-南西方向へL-7グリッドまで直線的に延伸する。断面は箱葉研状を呈し、上層にはAs-Aや焼土ブロック、炭化物ブロックを含む暗灰褐色土または暗褐色土が見られ、中層以下はロームブロックを含んだ同じく灰褐色または褐色系の土層が堆積している。遺物は出土していないが、所属時期は中層以下にAs-Aの混入が認められないことから、近世前期以前に遡る可能性が高い。

#### SD-9 (図48)

J-5グリッドからK-5グリッドにかけて、SD-1とSD-8の間をSD-1に平行して北西-南東方向へ直線的に走行する。断面形は逆台形を呈し、覆土にはロームブロックを含む黒灰褐色土または暗褐色土の堆積を認める。遺物はなく、所属時期は不明である。

#### SD-10 (図49)

C-16グリッドからM-13グリッドにかけて位置する。北西-南東方向へ走行する溝であるが、C-16グリッドからE-16グリッドにかけて一旦直線的に走行したのち、未調査範囲であるF-16グリッド、G-15グリッド付近で北方向にやや屈曲し、その後たまたびH-15グリッドからM-13グリッドにかけて直線的に走行している。また、L-13・14グリッドには土橋状の施設が存在する。断面は箱葉研状を呈し、上層にはAs-Aを含む暗灰褐色土が見られ、中層以下はロームブロックを含んだ同じく灰褐色または褐色系の土層が堆積している。遺物は出土していないが、所属時期は中層以下にAs-Aの混入が認められないことから、近世前期以前に遡る可能性が高い。

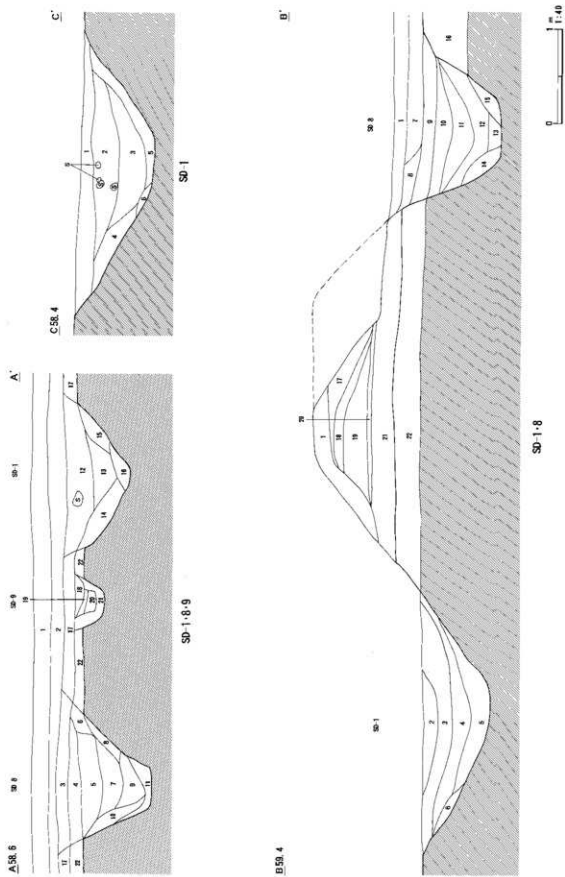


圖48 埤原區遺跡SD土層剖面圖(1)

**SD-1・8・9土層説明 [A-A']**

- 1 灰褐色土
- 2 灰褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 3 暗灰褐色土 As-Aを少量含む。
- 4 暗灰褐色土 As-Aを多量に含む。焼土ブロック、炭化物ブロックを少量含む。粘性弱。
- 5 暗褐色土 As-Aを主体とする。粘性弱。
- 6 暗灰褐色土 As-A、焼土ブロック、炭化物ブロックを少量含む。
- 7 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 9 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 10 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 11 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 12 暗灰褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 13 暗灰褐色土 As-Aを純地積層。粘性なし。
- 14 暗灰褐色土 白色砂子を少量含む。
- 15 暗灰褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 16 黒灰褐色土 As-Aを主体とする。粘性なし。
- 17 黒灰褐色土 As-Aを少量含む。
- 18 黒灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。粘性弱。
- 19 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 20 黒灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 21 黄灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 22 暗黄褐色土 風化ロームの堆積層。

**SD-1・8土層説明 [B-B']**

- 1 表土
- 2 暗灰褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 3 暗灰褐色土 As-Aを含まず。粘性弱。
- 4 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 5 灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 灰褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 8 暗灰褐色土 As-Aを少量含む。
- 9 黒灰褐色土 As-Aを多量に含む。ロームブロックを少量含む。粘性弱。
- 10 黒灰褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 11 黒灰褐色土 As-Aを主体とする。粘性なし。
- 12 黒灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 13 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 14 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 15 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。肩部からの崩落土。
- 16 暗灰褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 17 暗灰褐色土 白色岩片を少量含む。
- 18 暗黄褐色土 風化ロームを主体とする。
- 19 暗灰褐色土 白色岩片、ロームブロックを少量含む。
- 20 暗黄褐色土 風化ロームを主体とし、暗灰褐色土ブロックを少量含む。
- 21 暗灰褐色土 白色岩片を多量に含む。ロームブロックを少量含む。
- 22 黒灰褐色土 旧表土。しまり強。

**SD-1土層説明 [C-C']**

- 1 灰褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 2 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 3 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

**SD-2・3土層説明 [A-A']**

- 1 灰褐色土 As-Aを少量含む。ロームブロックを多量に含む。
- 2 灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

**SD-4・7土層説明 [A-A']**

- 1 暗灰褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 2 灰褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 3 灰褐色土 As-Aを多量に含む。ロームブロックを少量含む。
- 4 暗灰褐色土 As-Aを多量に含む。ロームブロックを少量含む。
- 5 暗灰褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 6 黒灰褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 7 暗灰褐色土 As-A、ロームブロックを多量に含む。
- 8 黒灰褐色土 As-Aを多量に含む。ロームブロックを少量含む。
- 9 黒灰褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 10 黒灰褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 11 黒灰褐色土 As-A、ロームブロックを多量に含む。
- 12 黒褐色土 As-Aを多量に含む。ロームブロックを少量含む。
- 13 黒褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 14 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 15 暗黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土ブロックを少量含む。
- 16 暗灰褐色土 As-Aを少量含む。
- 17 暗黄褐色土 風化ロームの堆積層。
- 18 暗褐色土 白色岩片を少量含む。ロームブロックを多量に含む。

**SD-10土層説明 [A-A']**

- 1 暗灰褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまり強。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 6 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とし、黒色土ブロックを多量に含む。

**SD-11土層説明 [A-A']**

- 1 暗灰褐色土 白色岩片、ロームブロックを少量含む。
- 2 暗灰褐色土 ロームブロックを主体とし、黒色土ブロックを多量に含む。

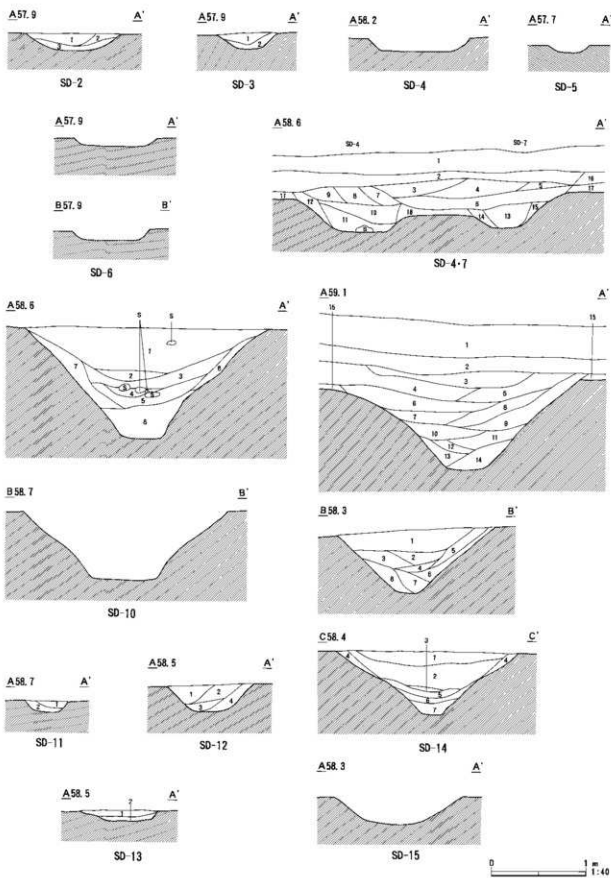


图49 塩原屋敷遺跡 SD 土層断面(2)



**SD-12土層説明 [A-A']**

- 1 暗灰褐色土 As-A を多量に含み、ロームブロックを少量含む。しまり弱。
- 2 黒灰褐色土 As-A を多量に含み、ロームブロックを少量含む。しまり弱。
- 3 暗灰褐色土 As-A、ロームブロックを多量に含む。
- 4 暗褐色土 As-A を少量含み、ロームブロックを多量に含む。

**SD-13土層説明 [A-A']**

- 1 暗灰褐色土 白色岩屑を少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。

**SD-14土層説明 [A-A']**

- 1 暗灰褐色土 As-A を多量に含む。粘性弱。
- 2 暗灰褐色土 As-A を少量含み、ロームブロックを多量に含む。
- 3 暗灰褐色土 白色岩屑を多量に含み、ロームブロックを少量含む。
- 4 暗灰褐色土 白色岩屑、ロームブロックを多量に含む。
- 5 暗灰褐色土 白色岩屑を多量に含む。
- 6 暗褐色土 白色岩屑、ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 白色岩屑を少量含み、ロームブロックを多量に含む。
- 8 暗褐色土 白色岩屑を多量に含む。
- 9 暗褐色土 白色岩屑を多量に含み、ロームブロックを少量含む。
- 10 暗褐色土 白色岩屑、ロームブロックを多量に含む。粘性やや強。
- 11 暗褐色土 白色岩屑を少量含み、ロームブロックを多量に含む。粘性やや強。
- 12 黒灰褐色土 白色岩屑を少量含み、ロームブロックを多量に含む。粘性やや強。
- 13 黒暗褐色土 白色岩屑を少量含み、ロームブロックを多量に含む。粘性やや強。
- 14 黒褐色土 白色岩屑、ロームブロックを多量に含む。
- 15 暗灰褐色土 白色岩屑、ロームブロックを多量に含む。粘性やや強。

**SD-14土層説明 [B-B']**

- 1 暗灰褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 2 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 暗灰褐色土 ローム粒子、小型ロームブロックを離障り状に含む。
- 6 黒灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

**SD-14土層説明 [C-C']**

- 1 暗灰褐色土 As-A を少量含む。
- 2 暗灰褐色土 As-A を少量含み、ロームブロックを多量に含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまり極めて強。
- 4 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 暗灰褐色土 白色岩屑、ロームブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。

**SD-16土層説明 [B-B']**

- 1 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含み、焼土ブロックを少量含む。
- 2 灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 暗黄褐色土 ロームブロックを主体とし、黒色土ブロックを少量含む。

**SD-14・17土層説明 [A-A']**

- 1 表土
- 2 暗灰褐色土 As-A を多量に含み、ロームブロックを少量含む。しまり弱。
- 3 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 黒灰褐色土 白色岩屑、ロームブロックを少量含む。
- 5 暗灰褐色土 白色岩屑、ロームブロックを少量含む。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまり極めて強。
- 7 暗褐色土 白色岩屑、ロームブロックを少量含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 9 灰褐色土 白色岩屑、ロームブロックを少量含む。
- 10 灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 11 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 12 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 13 暗褐色土 大型ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。
- 14 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 15 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまり弱。粘性やや強。

**SD-14・17土層説明 [B-B']**

- 1 黒灰褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 2 暗灰褐色土 As-A を少量含み、ロームブロックを多量に含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。しまり極めて強。
- 4 暗灰褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。粘性やや強。

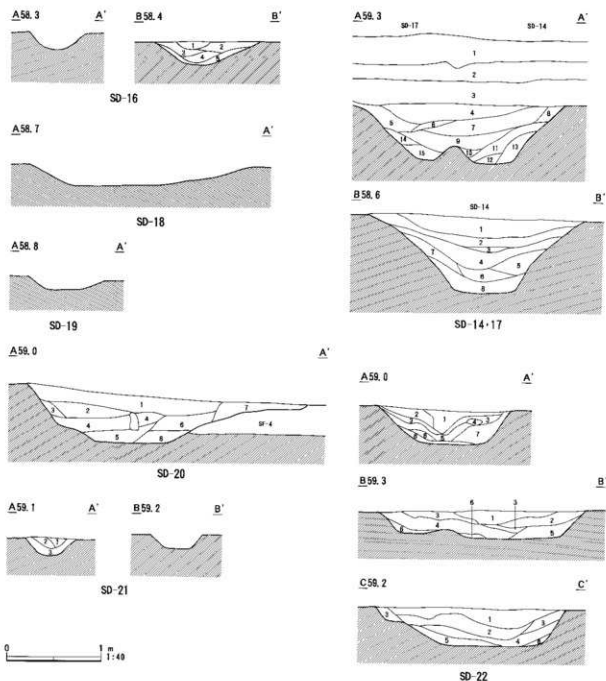


図50 塩原屋敷遺跡 SD 土層断面図(3)

**SD-22 土層説明【A-A】**

- 1 暗褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 2 暗灰色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 3 暗灰褐色土 As-Aブロックを多量に含み、斑状に堆積する。し  
まり強。粘性なし。
- 4 暗褐色土 As-Aを多量に含む。しまりやや弱。
- 5 黒褐色土 As-Aを少量含む。
- 6 黒褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 7 暗褐色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。

- 3 黒褐色土 As-Aを少量含む。
- 4 暗褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 5 暗灰褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。

**SD-22 土層説明【C-C】**

- 1 暗灰褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 2 黒褐色土 As-Aを少量含む。
- 3 黒褐色土 しまりやや弱。
- 4 暗褐色土 As-Aブロックを多量に含み、斑状に堆積する。し  
まり強。粘性なし。
- 5 暗褐色土 As-Aを多量に含む。粘性弱。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。

**SD-22 土層説明【B-B】**

- 1 暗灰色土 As-A、ロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 As-Aブロックを多量に含み、斑状に堆積する。し  
まり強。粘性なし。

**SD-11 (図49)**

F-16グリッドからG-16グリッドにかけて、緩やかに湾曲しながら西北西—東南東方向へ延びる。断面形は逆台形を呈し、覆土にはロームブロック、黒色土ブロックを含む暗灰褐色土の堆積を認める。遺物はなく、所属時期は不明である。

**SD-12 (図49)**

D-18グリッドからE-17・18グリッドにかけて、緩やかに湾曲しながら西北西—東南東方向へ延びる。断面形は逆台形を呈し、覆土にはいずれもAs-A、ロームブロックの混入する暗灰褐色土または暗褐色土が見られ、とくに上位に堆積する土層には多量のAs-Aを含む。遺物はなく、所属時期はAs-Aを含む土層が堆積することから近世に下るものと判断される。

**SD-13 (図49)**

P-7グリッドからP-11グリッドにかけて、不規則に屈曲しながら南北方向へ延びる。断面形は浅い逆台形を呈し、覆土には暗灰褐色土、ロームブロックを含む暗褐色土の堆積を認める。遺物はなく、所属時期は不明である。

**SD-14 (図49)**

方形区画をなす推定される溝で、R-7グリッドにおいてSD-16と接続し、Q-7グリッドでほぼ直角に屈曲して南西へ方向を変え、直線的に延びる。また、T-10グリッドからV-9グリッドにかけては北西—南東方向へ直線的に走行している。南東側の屈曲部は調査範囲から外れているが規模・断面形状・覆土が共通することから一連の溝と判断される。SD-1とはほぼ同じく、主軸方位をN-15°—Eにとる。断面は緩やかな箱葉研状を呈し、覆土は上層にAs-Aを含む灰褐色系の土層が比較的厚く堆積し、下半にはロームブロックを含む褐色系の土層が発達している。SD-16とは切り合い関係がなく両者は一連の溝として機能していた可能性が考えられる。また、SD-16とSF-2との関係からして、SF-2とも間接的な関係も想定される。遺物はなく、所属時期は不明である

**SD-15 (図49)**

R-7グリッドに位置し、北東—南西に直線的に延びる不整形の溝で、北東端はSD-14と重複する。断面は緩やかな逆台形を呈し、覆土は暗灰褐色土の堆積を認める。遺物はなく、所属時期は不明である。

#### SD-16 (図50)

R-6・7、S-6・7グリッドに位置し、SF-2を取り囲んで「コ」の字状にめぐる。断面は逆台形を呈し、ロームブロック、焼土ブロック、黒色土ブロックなど灰褐色、黄褐色、および暗褐色系の覆土が堆積している。遺物はなく、所属時期は不明であるが、SF-2との関係が推測される。

#### SD-17 (図50)

T-10グリッドからV-9グリッドにかけて位置し、途中で鉤の手状に屈曲しながら、一部でSD-14と重複している。断面は逆台形を呈し、覆土には黒灰褐色土の堆積を認める。遺物は、かわらけの細片若干を検出した。所属時期は、かわらけの出土を認めることから15世紀後半代と推測される。

#### SD-18 (図50)

S-14からT-15グリッドにかけて位置し、北東-南西方向に直線的に伸びる不整形の溝である。断面は緩やかな逆台形を呈し、覆土は暗灰褐色土の堆積を認める。遺物はなく、所属時期は不明である。

#### SD-19 (図50)

U-13・14、V-13・14グリッドに位置し、ほぼ南北方向に伸びる不整形の溝である。北端はSD-20、SF-4と重複している。断面は逆台形を呈し、覆土にはロームブロックを含む暗褐色土の堆積を認める。遺物はなく、所属時期は不明である。

#### SD-20 (図50)

U-12グリッドからV-14グリッドにかけて位置し、北東-南西方向に伸びる不整形の溝である。断面は逆台形を呈し、重複するSF-4の覆土を切って開削されている。覆土には全体に灰褐色または暗褐色系の土層が堆積する。最上層にはAs-Aを多量に含む明灰褐色土が見られ中層以下には焼土ブロック、炭化物ブロックの混入が目立つ。遺物はなく、所属時期は不明である。

#### SD-21 (図50)

U-11グリッドからW-14グリッドにかけて位置し、北東-南西方向に伸び、南西側の端でSD-22に接続している。断面は逆台形を呈し、覆土にはロームブロックを含む暗灰褐色土と黒色土ブロックを含む暗黄褐色土の堆積を認める。遺物はなく、所属時期は不明である。

#### SD-22 (図50)

W-14グリッドからX-11グリッドにかけて、屈曲しながらほぼ南北方向へ伸びる。断面形は逆台形を呈し、覆土の堆積状況から反復的な掘り返しが推測される。全体にAs-Aの混入が目立ち、とくに上層には多量のAs-Aを含んでいる。遺物はなく、所属時期はAs-Aを含む土層が堆積することから近世に下るものと判断される。

### c. 土壘状遺構

L-5グリッドからL-7グリッドにかけ、平行して走行するSD-1とSD-8に挟まれて、土壘状の遺構が存在する。攪乱が著しく、寸断された状態であったが、かつては土壘状を呈していたことが推測された。しかし、断面観察から風化ロームを主体とする土層が見られ、また全体に版築構造をとらず、ロームブロックと黒褐色土の混合を混合した硬化層も観察されないことから屋敷に伴う土壘とする確証はない(図48)。

## (2) 遺物

遺物の大半は屋敷の主要部分にあたるA・B・F・H地点のSD-1の内側から出土している。この地点は屋敷が構えられて以来、現在まで宅地としての利用が続いており、SD-1の内側はほぼ全面的に覆乱されている状態であった。遺物はほとんどがこの覆乱土中から出土している。

### a. 中世陶磁器 [図51～52、写真20・21]

1・2は青磁である。2の外表面には竊蓮弁文が観察される。3は甕の口縁部から肩部にかけての破片である。外面に平行タタキの痕跡が残り、灰褐色自然釉が掛かる。4・5は鍋で、4には内耳が付く。外面に煤の付着が目立つ。6～9は焙烙で、7の唇部内面には凹線がめぐる。10から17は搦鉢で、いずれも直線的に開く体部を特徴とする。18の短頸甕は19は火鉢の脚台部の破片である。20～25は甕の底部周辺の破片である。25は大甕ともいえる大径の破片で、直線的に開く器形を特徴とする。26も大型甕の体部の破片で、外面に平行タタキの痕跡が残る。27～29はいずれも小片であるが、27は常滑の甕、28は瀬戸の皿、29は古瀬戸の瓶の頸部の破片と考えられる。30～39はかわらけである。30の内面にはタール状の煤が付着する。低平な器形が多い中で、36は底径が小さく深めの体部をもつ。

塩原屋敷遺跡出土遺物観察表

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	青磁 甕	口径 — 底径 — 器高 —		外面—竊蓮弁文。	内外—灰オリーブ色	体部片。
2	青磁 甕	口径 — 底径 — 器高 —	丸みを持ち立ち上がる体部。	高台内無釉。	内外—灰オリーブ色	体部～底部片。
3	中世土器 甕	口径 (37.7) 底径 — 器高 —		口縁部—ヨコナデ。体部外面—平行 叩き後ナデ。印丸。 内面—横位ヘラナデ。	石英・黒色粒 内—褐灰色	口縁部片。外面 に自然釉。
4	中世土器 内耳鍋	口径 (35.6) 底径 — 器高 —	湾曲気味に開く口縁部。	外面—口縁部ヨコナデ、体部上半指 頭圧痕。下半横位ヘラナデ。 内面—ヨコナデ。	石英・チャート 内外—暗灰色	外面煤付着。口 縁部片。
5	中世土器 鍋	口径 (18.5) 底径 — 器高 —	内湾して立ち上がる口縁。	内外—ナデ。	黒色鉱物・白色粒 内外—灰色	口縁部片。
6	中世土器 焙烙	口径 (35.8) 底径 (32.2) 器高 5.7	口縁部は内湾気味に立ち上がり、やや肥厚する。	ロクロ整形。 外面—口縁部ヨコナデ、内面—横位 ヘラナデ。	石英・黒色鉱物 内—褐灰色 外—黄灰色	口縁部～体部 1/4残存。
7	中世土器 搦鉢	口径 (37.0) 底径 — 器高 —	内湾気味に立ち上がる口縁部。	ロクロ整形。 内面—横位ヘラナデ。	黒色鉱物・白色粒 内外—褐灰色	口縁部片。
8	中世土器 焙烙	口径 — 底径 — 器高 —	湾曲して開く口縁部。	内外面の内耳周辺部に指頭圧痕。	石英・チャート 内—ぶい黄色 外—灰色	口縁部片。
9	中世土器 焙烙	口径 — 底径 — 器高 —	湾曲して開く口縁部。	内外面の内耳周辺部に指頭圧痕。	チャート・黒色鉱物・雲母 内外—灰色	口縁部片。内耳 欠損。
10	中世土器 搦鉢	口径 (28.8) 底径 — 器高 —	体部は直線的に開き、口縁部は短く直立する。	ロクロ整形。 内面—彫目。	石英・チャート 内—褐灰色 外—ぶい赤褐色	口縁部～体部 1/4残存。
11	中世土器 搦鉢	口径 — 底径 — 器高 —	直線的に開く体部で、口縁部内面に突帯を付す。	外面—口縁部ヨコナデ。体部下位横 位ヘラナズリ。 内面—彫目。	石英・白色粒 内—暗灰色 外—褐灰色	口縁部～体部 1/6残存。
12	中世土器 搦鉢	口径 — 底径 (12.4) 器高 —	直線的に開く体部。	外面—体部下位横位ヘラナズリ後に 指ナデ。内面—横位ヘラナデ、彫目。 底部右回転糸切り。	石英・白色粒 内—褐灰色 外—灰黄褐色	体部下位～底部 1/2残存。

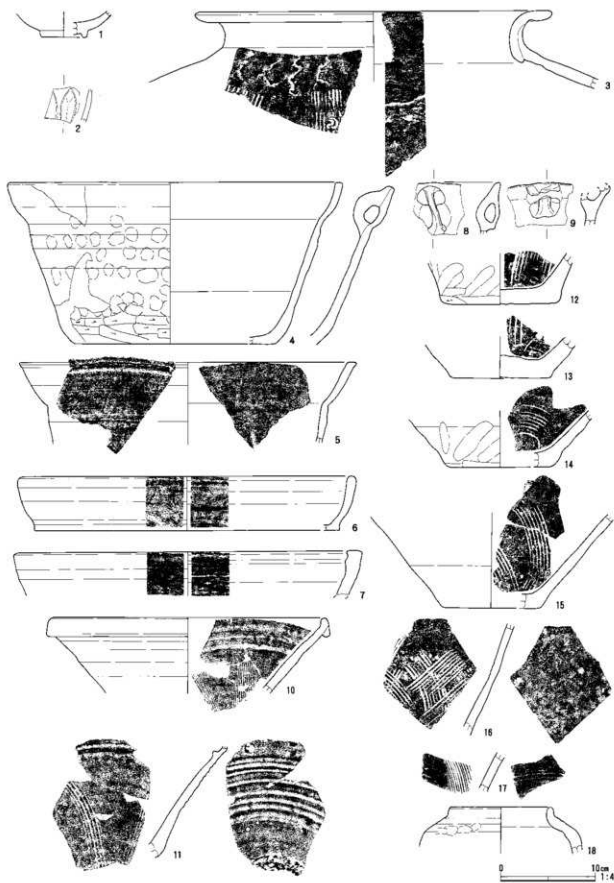


图51 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(1)

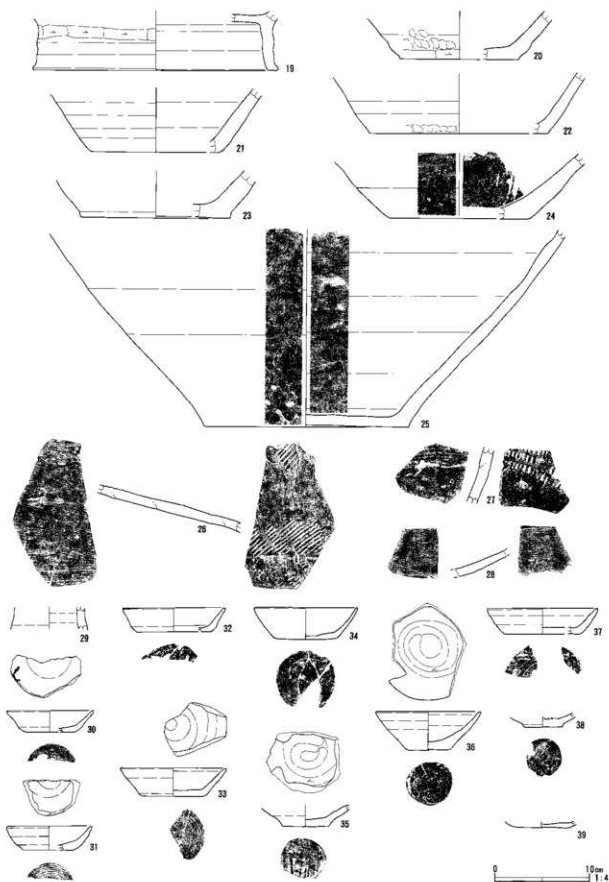


图52 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(2)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
13	中世土器 罎鉢	口径 — 底径 (10.4) 器高 —	直線的に開く体部。	内面一瓣目。	石英・白色粒 内外—ふい黄橙 色	底部1/4残存。
14	中世土器 罎鉢	口径 — 底径 (11.3) 器高 —	直線的に開く体部。	外面一指ナデ。 内面一横位ヘラナデ後瓣目。	チャート・雲母 内—明褐色 外—黄灰色	体部下位～底部 1/4残存。
15	中世土器 罎鉢	口径 — 底径 (10.6) 器高 —	直線的に開く体部。	外面一ナデ。 内面一横位ヘラナデ後瓣目。	チャート・雲母 内—暗灰色 外—灰色	体部～底部片。
16	中世土器 罎鉢	口径 — 底径 — 器高 —	直線的に開く体部。	外面一指ナデ。 内面一横位ヘラナデ後瓣目。	チャート・雲母 内外—黄灰色	体部片。
17	中世土器 罎鉢	口径 — 底径 — 器高 —	—	外面一ナデ。 内面一横位ヘラナデ後瓣目。	石英・黒色粒 内外—褐色	体部片。
18	中世土器 短頸壺	口径 — 底径 — 器高 —	体部は丸みをもち、口縁部は短く直立する。	外面—口縁部ココナデ。体部指頭圧痕。 内面一横位ヘラナデ。	チャート・雲母 内外—ふい黄橙 色	口縁部～体部上 位1/3残存。
19	中世土器 火鉢	口径 — 底径 (25.9) 器高 —	肩部は短く外側に張り出す。	外面一横位ヘラクスリ。 内面一横位ヘラナデ。	黒色鉱物・白色粒 内外—黄灰色	脚台部1/2残存。 内外—黄灰色
20	中世土器 壺	口径 — 底径 (12.6) 器高 —	直線的に開く体部。	外面一指頭圧痕、下位横位ヘラクスリ。 内面一横位ヘラナデ。底部回転未切り。	黒色鉱物・白色粒 内外—灰色	底部1/4残存。内 面は平滑。
21	中世土器 壺	口径 — 底径 (13.6) 器高 —	直線的に開く体部。	ロクロ整形。 内面一横位ヘラナデ。	石英・チャート・ 黒色鉱物 内外—暗黄灰色	体部下位～底部 片。
22	中世土器 壺	口径 — 底径 (18.9) 器高 —	直線的に開く体部。	外面一体部下位指頭圧痕。 内面一横位ヘラナデ。	チャート・黒色 鉱物内外—灰黄色	体部下位～底部 片。摩滅甚しい。
23	中世土器 壺	口径 — 底径 (15.7) 器高 —	直線的に開く体部。底部は上げ底気味。	ロクロ整形。 内面一横位ヘラナデ。底部回転未切り。	チャート・黒色 鉱物・白色粒内外 —ふい褐色	体部下位～底部 1/4残存。
24	中世土器 (罎鉢)	口径 — 底径 (14.6) 器高 —	直線的に開く体部。	外面一ナデ。 内面一横位ヘラナデ後瓣目。	チャート・雲母・ 黒色粒 内外—褐色	体部下位～底部 片
25	中世土器 壺	口径 — 底径 (21.5) 器高 —	直線的に開く体部。	外面一ナデ。 内面一横位ヘラナデ。 底部一ナデ。	チャート・白色粒 内—褐色 外—赤褐色	体部下位～底部 1/4残存。
26	中世土器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	—	外面一平行印き後ヘラナデ。 内面一横位ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内外—灰黄色	体部片。
27	中世土器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	—	外面一格子目印き。 内面一横位ヘラナデ。	チャート・黒色粒 内—ふい黄色 外—褐色	常滑。体部片。
28	中世土器 皿	口径 — 底径 — 器高 —	—	ロクロ整形。 外面一灰輪流し掛け。 内面一横位ヘラナデ。	灰黄色(胎土)内 外—灰黄色	瀬戸。体部片。
29	陶器 (瓶)	口径 — 底径 — 器高 —	—	ロクロ整形。 外面一灰輪。 内面一灰輪散在。	灰白色(胎土) 内—浅黄色 外—オリーブ黄色	吉瀬戸か。頸部 片。
30	中世土器 かわらけ	口径 (9.3) 底径 (5.2) 器高 2.2	口縁部は内湾気味に立ち上がり、中で緩やかに外反する。	体部ロクロ整形。底部左回転未切り。	チャート・片岩・ 黒色鉱物内外一 體	口縁部～底部 1/3残存。内面煤 付着。
31	中世土器 かわらけ	口径 (9.0) 底径 (5.3) 器高 2.5	口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部回転未切り。	チャート・黒色粒 内外一體色	口縁部～底部 1/3残存。
32	中世土器 かわらけ	口径 (10.9) 底径 (7.9) 器高 2.6	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部板状圧痕。	チャート・黒色粒 内外一體色	口縁部～底部 1/3残存。



No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
33	中世土器 かわらけ	口径 (11.3) 底径 (6.6) 器高 3.0	口縁部は直線的に立ち上がる。 見込み周縁部わずかに窪む。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	チャート・黒色粒 内外一いびい橙色	口縁部～底部 1/3残存。
34	中世土器 かわらけ	口径 (11.0) 底径 6.6 器高 3.3	口縁部は直線的に立ち上がり、 中位でわずかに内湾する。見込 み中央・周縁部窪む。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	チャート・黒色鉱 物 内外一褐色	口縁部～底部 1/3残存。
35	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (5.2) 器高 —	体部は緩やかに外反して立ち上 がる。	体部ロクロ整形。見込み螺鈿状ロク ロ目。底部板状圧痕。	チャート・黒色鉱 物 内外一いびい黄褐色	体部～底部2/3 残存。
36	中世土器 かわらけ	口径 (11.2) 底径 4.4 器高 4.0	口縁部は緩やかに内湾しながら 立ち上がる。	体部ロクロ整形。見込み螺鈿状ロク ロ目。底部回転糸切り。	チャート・黒色粒 内外一いびい黄褐色	口縁部～底部 2/3残存。
37	中世土器 かわらけ	口径 (11.7) 底径 (7.8) 器高 2.7	口縁部は内湾気味に立ち上 がり、中位で緩やかに外反する。 見込み周縁部わずかに窪む。	体部ロクロ整形。	チャート・黒色粒 内外一いびい黄褐色	口縁部～底部 1/3残存。
38	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 4.2 器高 —	見込み周縁部窪む。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	石炭・黒色鉱物 内外一いびい黄褐色	体部～底部1/3 残存。
39	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 5.2 器高 —	見込み中央・周縁部窪む。摩滅 著しい。	底部回転糸切り。	チャート・雲母 内外一いびい黄褐色	底部片。
40	近世土器 焙 烙	口径 33.3 底径 — 器高 5.9	口縁部は短く内湾して立ち上 がる。底部は丸底。	外面一ヨコナデ。 内面一横位ヘラナデ。把手2箇所貼 付。	チャート・黒色鉱 物 内外一明赤褐色	ほぼ完形。
41	近世土器 焙 烙	口径 (37.4) 底径 (32.6) 器高 5.3	湾曲気味に開く口縁部。体部下 位に補修孔。	外面一体部上半ヨコナデ、下半ヘラ クスリ。 内面一横位ヘラナデ。	黒色鉱物・黒色粒 内外一灰色	口縁部～底部 内外一灰色
42	近世土器 焙 烙	口径 (35.6) 底径 (31.2) 器高 5.1	直線的に開く口縁部。	外面一体部上半ヨコナデ後指頭圧 痕、下半ヘラクスリ。 内面一横位ヘラナデ。内耳3箇所。	黒色鉱物・褐色 内一暗灰黄色 外一黒色	口縁部～底部片 片。
43	近世土器 焙 烙	口径 (35.5) 底径 (31.8) 器高 5.5	湾曲気味に開く口縁部。	外面一体部上半ヨコナデ、指頭圧痕、 下半横位ヘラクスリ。 内面一横位ヘラナデ。	黒色鉱物・白色粒 内外一灰黄色	口縁部～底部片 片。
44	近世土器 焙 烙	口径 (40.4) 底径 (36.0) 器高 5.5	直線的に開く口縁部。	外面一体部上半ヨコナデ、下半ヘラ クスリ後指頭圧痕。 内面一横位ヘラナデ。	チャート・白色粒 内外一灰色	口縁部～底部片 片。
45	近世土器 焙 烙	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部は短く内湾して立ち上 がる。	外面一ヨコナデ。 内面一横位ヘラナデ。把手貼付。	黒色鉱物・褐色粒 内外一いびい赤褐色	口縁部片。
46	近世土器 罎 鉢	口径 — 底径 15.7 器高 —	直線的に開く体部。	外面一体部下位横位ヘラクスリ。 内面一罎目。鉄軸掛け流し。 見込み～内面平滑。	石炭・チャート 内外一いびい褐色	体部下位～底部 3/4残存。
47	近世土器 罎 鉢	口径 — 底径 (16.4) 器高 —	直線的に開く体部。	外面一体部下位横位ヘラクスリ。 内面一罎目。	石炭・チャート 内一いびい橙色 外一いびい黄褐色	体部下位～底部 片。

## b. 近世陶磁器 [図53～55、写真21～23]

40～45は焙烙である。40には2箇所把手が付く。41～45は内耳をもつ形式で、41には体部下位に補修孔が観察される。46～51は罎鉢である。52・53は焼成前穿孔の植木鉢で、52には底部外面に三足が付き、53には口縁部に鉄軸が施されている。54は瀬戸美濃の徳利、55は同じく瀬戸美濃の茶碗である。56～63の碗のうち、57・63は染め付け碗で、57には蛸唐草文、63には草花文が施されている。64は鉄軸掛け流しの山茶碗である。65はほぼ完形の火入れで、鉄軸と灰軸を掛け分けている。66・67は鉄軸の灯明皿である。68～73は皿類で、71・73は染め付け、72は灰軸の菊花皿である。73の底部外面には「満福」の角印が押されている。

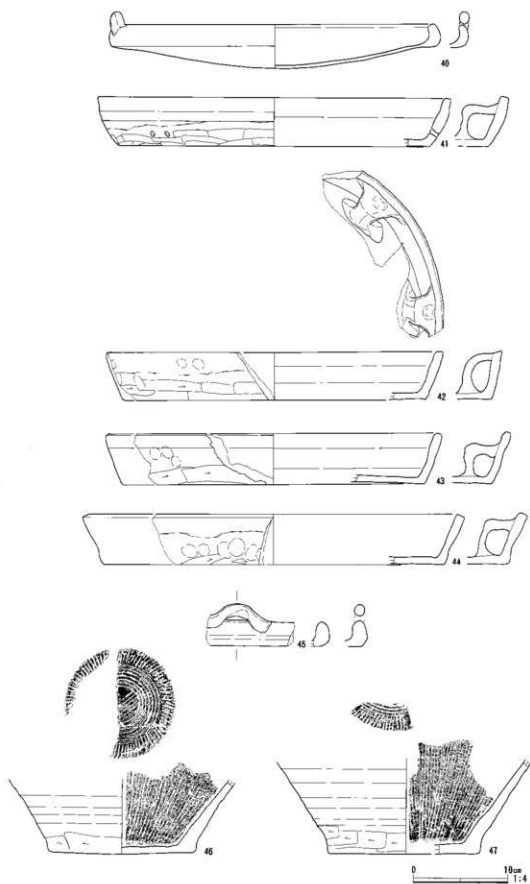


图53 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(3)

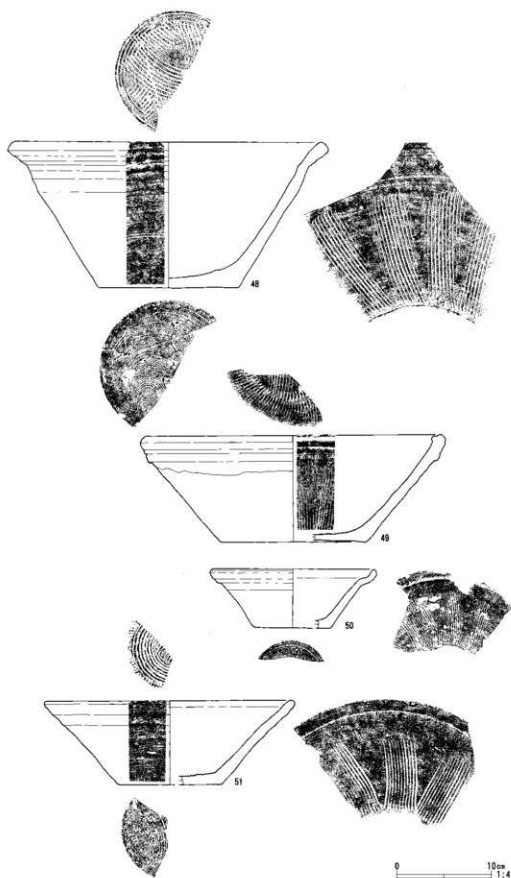


图54 塩原屋敷遺跡出土物実測図(4)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
48	近世土器 鉢	口径 (32.6) 底径 (14.8) 器高 15.3	口縁部は直線的に開き、上位でやや外反する。	外面—ココナデ、体部下位に目線2。 内面—一目目。見込み目線2。鉄軸。	チャート・黒色粒 内外—よい赤褐色	口縁部—体部下位1/3残存。
49	近世土器 椀 鉢	口径 (31.0) 底径 (15.6) 器高 (11.2)	口縁部は直線的に開き、上位でやや内湾する。	外面—ナナデ。 内面—一目目。見込み～内面平部。	石英・チャート 内外—橙褐色	口縁部～底部1/4残存。
50	近世土器 椀 鉢	口径 (17.0) 底径 (8.0) 器高 6.2	口縁部中位でやや外反し、上位で外に屈曲する。	外面—ココナデ。 内面—一目目。底部回転糸切り。鉄軸。	チャート・白色粒 内外—赤褐色	口縁部～底部1/3残存。
51	近世土器 椀 鉢	口径 (26.6) 底径 (10.9) 器高 8.9	直線的に開く口縁部。	外面—横位ヘラナデ。 内面—一目目。体部中位～見込みにかけて平部。底部回転糸切り。鉄軸。	石英・チャート 内外—黒褐色	瀬戸美濃。口縁部～底部1/3残存。
52	近世土器 植木鉢	口径 24.2 底径 14.5 器高 14.7	口縁部はやや内湾して立ち上がり、上位で外側に屈曲する。	外面—ナナデ。 内面—横位ヘラナデ。底部焼成前穿孔、三足貼付。	黒色鉱物・黒色粒 内外—黒褐色	4/5残存。
53	近世土器 植木鉢	口径 16.6 底径 11.4 器高 7.1	口縁部は直線的に開き、上位で外側に屈曲する。底部は上げ底。	外面—ナナデ。 内面—横位ヘラナデ。底部焼成前穿孔、口縁部鉄軸施軸。	黒色粒 内—明赤褐色 外—橙褐色	2/3残存。
54	陶器 徳利	口径 4.4 底径 — 器高 —	ロクロ整形。胎軸・灰軸施軸。胎軸施軸後灰軸掛け直し。		灰白色 (胎土)	瀬戸美濃。
55	陶器 茶碗	口径 6.0 底径 5.0 器高 3.4	型打成形。透明軸。登付き無軸。		灰白色 (胎土)	瀬戸美濃。
56	陶器 壺	口径 7.5 底径 3.4 器高 4.4	半球形、腰部平形。ロクロ整形。削り高台。口縁部～見込み灰軸。体部～高台・高台内部鉄軸。登付無軸。		淡黄色 (胎土)	相馬か。
57	磁器 碗	口径 6.8 底径 3.4 器高 5.5	半球形、腰張り。ロクロ整形。削り高台。染付け。外面—削草文。登付無軸。砂付着。		灰白色 (胎土)	瀬戸美濃。
58	磁器 碗	口径 (9.6) 底径 3.4 器高 3.5	ロクロ整形。染付け。外面—コンニャク印判。体部下位は—重圍線。高台部二重圍線。登付無軸。		灰白色 (胎土)	瀬戸美濃。
59	陶器 壺	口径 (9.8) 底径 (4.0) 器高 5.4	腰張り。ロクロ整形。削り高台。体部に比線3条。軸葉掛け分け (鉄軸・灰軸)。高台内施軸 (鉄軸)。登付無軸。砂付着。		灰白色 (胎土)	肥前。
60	陶器 壺	口径 (9.6) 底径 4.5 器高 5.3	腰張り。ロクロ整形。削り高台。体部に比線3条。軸葉掛け分け (鉄軸・灰軸)。高台内施軸 (鉄軸)。登付無軸。砂付着。		灰白色 (胎土)	肥前。
61	陶器 壺	口径 (10.4) 底径 4.0 器高 5.3	腰張り。ロクロ整形。削り高台。体部に比線3条。軸葉掛け分け (胎軸・灰軸)。高台内施軸 (胎軸)。登付無軸。砂付着。		灰白色 (胎土)	瀬戸美濃。3/5残存。
62	陶器 壺	口径 (9.6) 底径 4.6 器高 6.2	腰張り。ロクロ整形。削り高台。体部に比線3条。軸葉掛け分け (鉄軸・灰軸)。高台内施軸 (鉄軸)。登付無軸。砂付着。		灰白色 (胎土)	瀬戸美濃。口縁部1/2欠損。
63	陶器 壺	口径 (11.2) 底径 5.0 器高 7.0	半球形、腰張り。ロクロ整形。削り高台。染付け。外面—草文。口縁部二重圍線、体部下位は—重圍線、高台部二重圍線。登付無軸。砂付着。		灰色 (胎土)	肥前。1/2残存。
64	陶器 山茶壺	口径 (12.0) 底径 — 器高 —	ロクロ整形。軸葉掛け直し (鉄軸)。		淡黄色 (胎土)	瀬戸美濃。口縁部～体部1/3残存。
65	近世土器 火入れ	口径 4.5 底径 4.5 器高 6.8	筒形。ロクロ整形。軸葉掛け分け (鉄軸・灰軸)。外面—貫目文、糸目紋。内面—無軸。底部無軸。左回転糸切り。口唇部に敲打痕。		淡黄色 (胎土)	瀬戸美濃。ほぼ完形。
66	陶器 灯明受皿	口径 9.0 底径 4.2 器高 1.9	油滴切立状。ロクロ整形。鉄軸をハケで施軸。底部右回転糸切り。受け部貼付。		灰白色 (胎土)	瀬戸美濃。完形。
67	陶器 灯明受皿	口径 9.7 底径 2.1 器高 4.6	油滴切立状。ロクロ整形。鉄軸をハケで施軸。底部右回転糸切り。受け部貼付。		灰白色 (胎土)	瀬戸美濃。口縁部一部欠損。

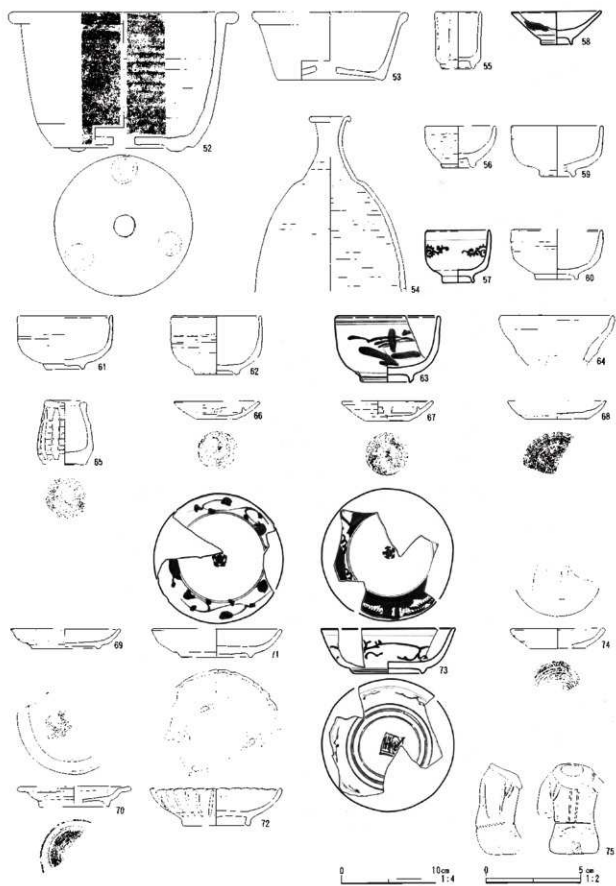


图55 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(5)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
68	陶器 皿	口径 (10.4) 底径 (6.6) 器高 1.9	ロクロ整形。前輪。体部下位から底部無輪。底部回転余切り。		菊戸黄色 (胎土)	瀬戸美濃、1/3残存。
69	陶器 皿	口径 11.6 底径 7.2 器高 2.2	ロクロ整形。共石輪。底部目痕3。		灰白色 (胎土)	志野。口縁部一部欠損。
70	陶器 皿	口径 (12.0) 底径 (7.3) 器高 2.1	ロクロ整形。口縁部周囲に灰輪拖輪。見込み鉄絵。外面一口縁部～高台内無輪。		灰白色 (胎土)	瀬戸美濃、1/3残存。
71	磁器 皿	口径 13.8 底径 7.3 器高 3.0	ロクロ成形。削り高台。染付け。内面唐草文、見込みコンニャク判五弁花文、蛇の目輪取り及び。登付砂付着。		灰白色 (胎土)	肥前。4/5残存。
72	陶器 皿	口径 14.0 底径 7.0 器高 3.9	菊花形。ロクロ型内成形。内外一菊花文、灰輪。体部下位。高台部。高台内無輪。見込み目痕3。		灰白色 (胎土)	瀬戸美濃、2/3残存。
73	磁器 皿	口径 14.2 底径 7.4 器高 4.8	ロクロ成形。染付。外面「如蓮唐草文」、体部下位一重圓縁。内面一志絵 (竹・宝文)。見込みコンニャク判五弁花。高台部一重圓縁。底部一重圓縁、裏鉢一重角枠「渦巻」。登付砂付着。		灰白色 (胎土)	肥前。
74	近世土器 かわらけ	口径 (10.0) 底径 (6.0) 器高 2.1	口縁部は中位で内湾しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形。内面一螺旋状ロクロ目。底部回転余切り。	黒色粒・褐色粒 内外一にぶい橙色	1/4残存。
	種類	種別	法量 (cm・g) / その他		材質	備考
75	土製品	人形	高さ(4.8) 幅(3.4) / 型作り。底部穿孔。		灰白色 (胎土)	
76	石製品	板碑	長さ15.0 幅10.7 厚さ3.3 重さ1038.0 / 表面に主尊種子に阿弥陀如来 (キリク) が刻まれる。		緑泥片岩	
77	石製品	板碑	長さ29.5 幅16.4 厚さ4.5 重さ3050 / 銘等はみられない。		緑泥片岩	
78	石製品	宝篋印塔	高さ14.4 幅15.1 重さ3830 / 相輪部。		安山岩	
79	石製品	石臼 (上臼)	高さ12.3 重さ1878.5 / 上縁一部残存。礪面磨耗。		安山岩	
80	石製品	石臼 (上臼)	高さ9.8 重さ2299.8 / 上縁一部残存。礪面は片減りする。		安山岩	
81	石製品	石臼 (上臼)	高さ7.0 重さ1569.1 / 礪面は片減りする。		安山岩	
82	石製品	石臼 (上臼)	高さ7.8 重さ1458.0 / 礪面は磨耗。頭溝わずかに残存。供給口の一部残存。		安山岩	
83	石製品	石臼 (上臼)	高さ6.5 重さ1386.7 / ふくみは浅い。礪面は磨耗するが、礪目わずかに残存。		安山岩	
84	石製品	石鉢	高さ10.5 重さ2211.3 / 底部上げ底。外面に工具痕。		安山岩	
85	石製品	石鉢	高さ8.9 重さ2171.1 / 上面に平滑な面があり磨痕が認められる。		安山岩	実形。
86	石製品	砥石	長さ11.0 幅3.5 重さ185.9 / 4面使用。		流紋岩	
87	石製品	砥石	長さ7.4 幅2.8 重さ58.3 / 6面使用。		流紋岩	
88	石製品	石板	長さ5.8 幅6.5 厚さ0.2 重さ16.2 / 表一縦・横の沈線によるマス目、縦・横の磨痕。裏一縦・横の磨痕。		粘板岩	

### c. 土製品 [図55、写真23]

75は人形である。型造りにより、底部には穿孔が認められる。胎土は灰色を呈し、軟質の焼成である。

### d. 石製品 [図56・57、写真23・24]

76・77は板碑である。ともに緑泥片岩製で、76の表面には主尊種子に阿弥陀如来を刻んでいる。78は安山岩製宝篋印塔の相輪の一部である。79～83は石臼の破片である。いずれも安山岩製で、礪の摩耗が顕著である。82には供給口の一部が残存している。82・83は石鉢で、82は底部が上げ底となっている。84・85は砥石である。ともに流紋岩製で、84は4面、85は6面を使用している。86は薄い板状の石製品である。粘板岩製で裏表ともに磨きを加えたのち、表面に升目状の刻線を施している。

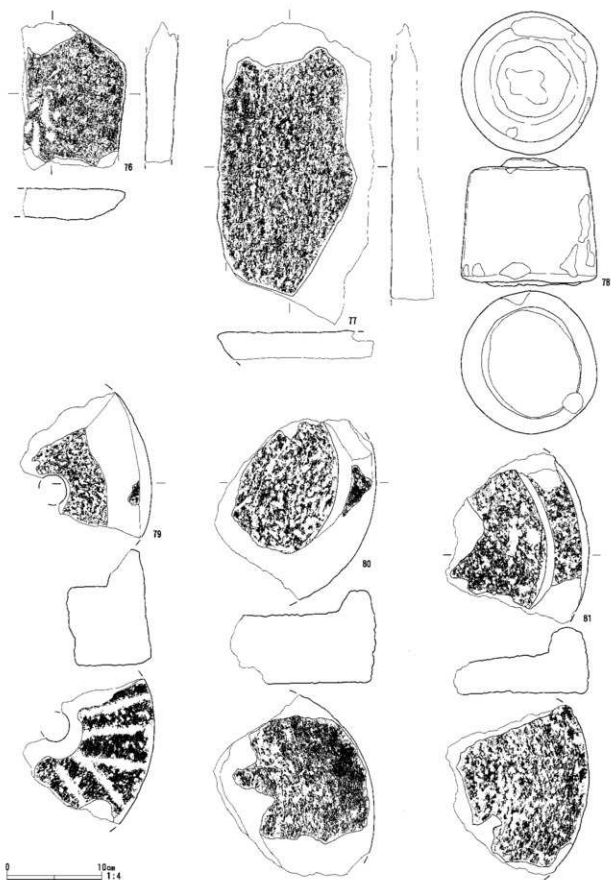


图56 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(6)

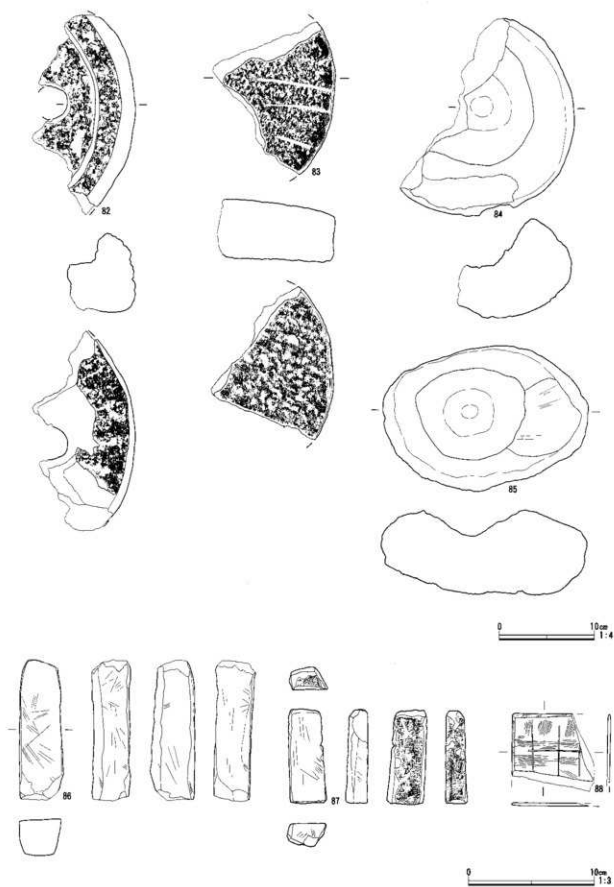


图57 塩原屋敷遺跡出土遺物実測図(7)



### (3) 遺構外出土遺物

塩原屋敷遺跡からは、中・近世の遺物とともに、縄文・弥生土器・石器・土師器・須恵器・埴輪が出土している。縄文・弥生土器・石器は、きわめて希薄ながらも旭・小島古墳群内に広く散布していることが確認されている。調査で遺構が確認されることはなく、かつて現地表の上位に存在した文化層に伴う遺物と推定される。土師器・須恵器については、塩原屋敷遺跡および旭・小島古墳群の範囲内に、重複する同時期の集落遺跡が見られないことから、埴輪とともに本来は古墳に伴う遺物であった可能性が高い。同様に奈良時代遺構の土器類も、古墳の追加的祭祀などに伴う遺物と考えられる。ただ、塩原屋敷遺跡は古墳群を東西に分ける浅い埋没谷上に立地しており、古墳と重複関係にある遺構は存在しない。このことから、塩原屋敷遺跡において出土した古墳関連遺物は何らかの理由により、比較的長い距離を移動していると推測される。

#### a. 縄文・弥生土器 [図58、写真24]

1・2は加曾利EⅢ式前後の胴部片である。3は弥生時代後期の壺と見られるが、胴部に簾状文がなく、樽式とは異なるようである。

#### b. 石器 [図58、写真24]

図化したのは打製石斧4点、剥片石器2点、磨石1点、砂岩製の研磨具1点である。打製石斧・磨石は、同図1・2の縄文時代中期後葉の土器の伴う可能性のある石器である。

#### c. 埴輪

#### 円筒・朝顔埴輪 [図59、写真24・25]

いずれも突帯を含む破片である。4には円形の透孔が認められる。胎土には片岩・石英またはチャートを含み、色調は赤褐色ないしに濃い赤褐色を呈する。

塩原屋敷遺構外出土縄文・弥生土器・石器観察表

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	— — —	外面—R.L.単節縄文施文後、棒状工具による縦位沈線。沈線による区画内は磨り消し。内面—磨き。	チャート・黒色藍物 内外一橙色	加曾利E 3式。
2	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	— — —	外面—R.L.単節縄文施文後、棒状工具による縦位沈線。沈線による区画内は磨り消し。内面—磨き。	チャート・黒色藍物 内外一橙色	加曾利E 3式。
3	弥生土器 壺	口径 底径 器高	— — —	類部～胴部付近の破片。	外面—ナデ。弱い縞帯状文。 内面—ナデ。	チャート・黒色藍 内外一灰黄色
No	器種	法量 (cm・g)/その他		備考		
4	打製石斧	長さ(8.1)	幅4.8 厚さ1.6 重さ64.6/頁岩。直接打撃による両面調整。刃部周辺に磨耗痕。	上部欠損。		
5	打製石斧	長さ(8.7)	幅6.6 厚さ2.2 重さ128.7/頁岩。直接打撃による両面調整。刃部周辺、側縁の一部に磨耗痕。	上部欠損。		
6	打製石斧	長さ(10.5)	幅9.0 厚さ2.15 重さ252.1/安山岩。直接打撃による両面調整。全体に磨耗痕。	上部欠損。		
7	打製石斧	長さ(8.7)	幅5.7 厚さ1.4 重さ61.5/頁岩。直接打撃による両面調整。全体に磨耗痕。	上部欠損。		
8	スレイバー	長さ6.9 幅5.6 厚さ2.0 重さ84.2/頁岩。鞆皮をもつ小型剥片の縁辺に割削痕。縁辺の一部に磨耗痕。				
9	スレイバー	長さ5.1 幅3.2 厚さ1.0 重さ14.22/頁岩。小型の薄型縦長剥片の側縁に調整割削。微細割削痕。				
10	磨石	長さ7.3 幅6.2 厚さ5.1 重さ302.4/安山岩。全体に磨耗痕。				
11	(研磨具)	長さ3.5 幅3.4 厚さ1.1 重さ18.6/砂岩。鞆皮を持つ小型半割錐の表裏に顕著な磨耗痕。				

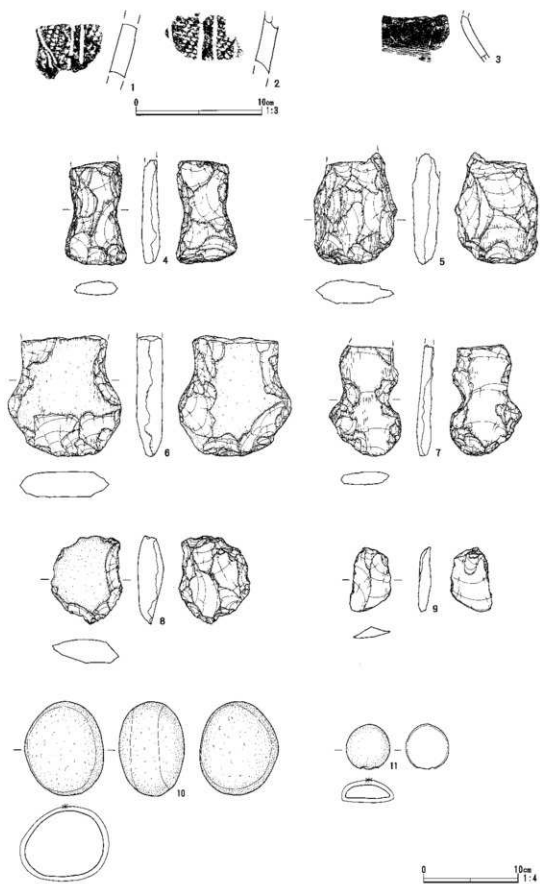


图58 塩原屋敷遺跡構外出土縄文・弥生土器・石器実測図

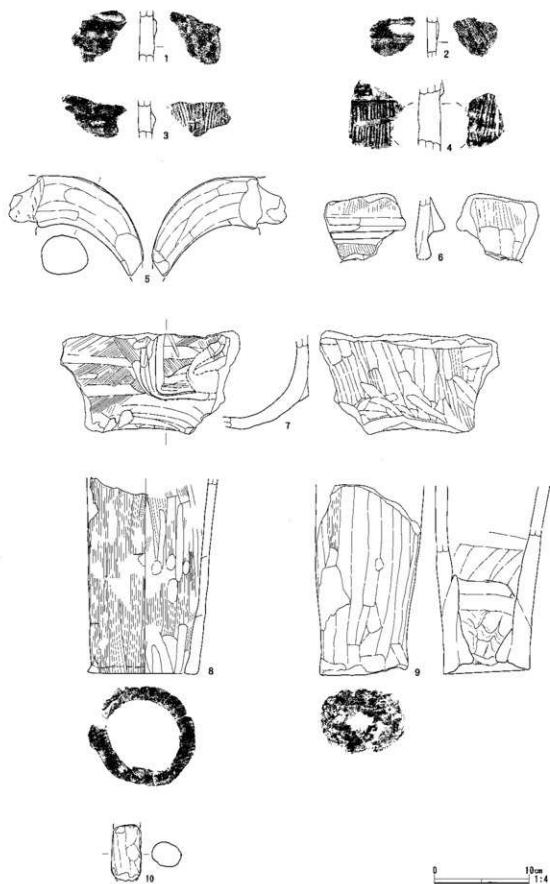


图59 塩原屋敷遺跡遺構外出土円筒・朝顔形埴輪、形象埴輪実測図

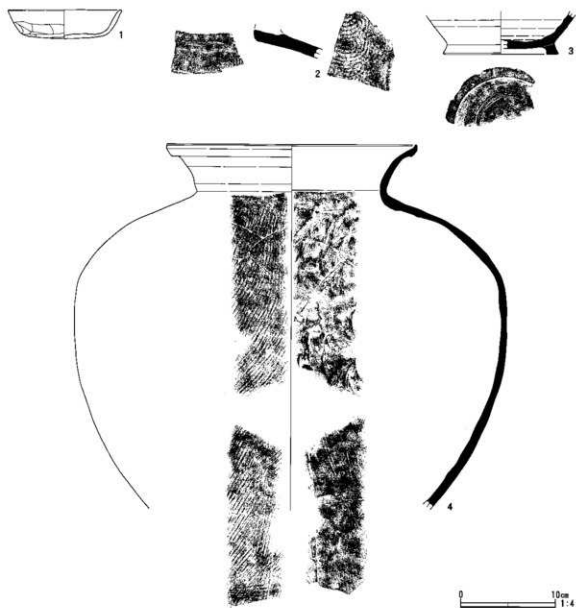


図60 塩原屋敷遺跡遺構外出土土器実測図

塩原屋敷遺構外出土土器観察表

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土器 環	口径 (12.0) 底径 9.9 器高 3.0	体部はやや湾曲して立ち上がり、口縁部に至る。底部はやや丸みを持つ。	外面-口縁部ナデ、体部ヘラケズリ、底部摩滅するがヘラケズリ。内面-摩滅のため調整不明瞭。	石英・白色粒 内-明赤褐色 外-ふい褐色	1/5残存。
2	須恵器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	胴部の破片で、口縁部の剝離痕あり。	外面-平行タタキ。 内面-同心円状の当て具痕。	チャート・黒色粒 内外-灰黄色	
3	須恵器 瓶	口径 — 底径 (12.0) 器高 —	断面台形で外側にふんばる高台。胴部はやや湾曲して立ち上がる。	ロクロ左回転。底部はヘラ切り後に高台貼付。	石英・白色粒 内外-灰色	底部1/3残存。内底部に自然軸。
4	須恵器 壺	口径 (26.4) 底径 — 器高 —	上位に膨らみを持つ胴部。口縁部は外反して開き、上端外側は肥厚、先端部は内屈、口唇部は尖る。	外面-口縁部回転ナデ、胴部平行タタキ。内面-口縁部回転ナデ、胴部同心円状の深い当て具痕。	石英・白色粒 内外-褐灰色	1/3残存。

## 形象埴輪

### 人物 [図59、写真25]

5は肩部から脱落した腕で、肩との接合部はソケット状を呈する。肩から手先に向かって、急激に径を減しながら湾曲している。小型の人物に伴うものと考えられる。6は半身像の上衣の裾部から台部にかけての破片である。本体に断面三角形の粘土紐を貼付して上衣の裾を表現し、台部には円形透孔の一部が観察される。胎土に片岩・チャートを含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

### 馬 [図59、写真25]

7は左側胴部の破片で、胴部本体に対して鉤形に粘土紐を貼付し表現している障泥の輪郭を表現している。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。8は脚部で蹄の表現はない。底面に作業台の木目疳痕が観察される。胎土に片岩・チャートを含み、色調はにぶい橙色を呈する。

### 器種不明 [図59、写真25]

9は全体の形状が動物の脚部に似るが、先端部の器壁が厚くなるとともに緩やかに窄まって、横断面が楕円形を呈し、粘土紐の積上痕は逆位になっている。胎土に粗粒の片岩・チャートを含み、色調はにぶい赤褐色を呈する。10は断面が円形を呈する棒状の破片で、調整は全面に縦位のナデを施している。男子人物の側頭部から垂下する美豆良の一部の可能性が考えられる。胎土に片岩・チャートを含み、色調は橙色を呈する。

### d. 土師器・須恵器 [図60、写真25]

1は丸みを帯びる底部から口縁部が直線的に立ち上がる器形で、外面調整は体部下半から底部にかけて粗いヘラケズリを加えている。2は瓶の底部付近の破片で、厚く外反する高台が付く。3・4は甕で、胴部に並行タタキを施し、内面には同心円状の当て具痕が観察される。

## IV 結 語

本書には小島御手長山古墳、坊主山古墳、下野堂御手長山古墳など旭・小島古墳群の中でも大型の部類に属する古墳とともに、中近世の館跡である塩原屋敷遺跡についての調査成果を掲載した。以下では、確認された遺構・遺物に関して、前章までに触れることのできなかった二、三の点についてまとめ、結語としたい。

小島御手長山古墳の調査では、墳丘の南東側裾部から周堀にかけての状況が明らかとなった。周堀の幅は約9.5mを測り、古墳群内では古墳時代後期後半最大の墳丘にふさわしい規模を有する。遺物は円筒輪軸片のみで、形象埴輪は破片も検出されていない。7次に及ぶ過去の調査では、墳丘南側の1次調査B・C・Dトレンチにおいて人物・馬など多数の形象埴輪片を出土していることと対照的である。円筒輪軸の出土はA・B・C・Eの各調査区で認められることから、墳丘を圍繞するように樹立されていたことは確実視される。こうした円筒輪軸の配列方式に対して、人物・馬に代表される形象埴輪の配置は、石室開口部付近に限定されていたことが推測できる。

坊主山古墳からは多様な形象埴輪が出土している。とくに、脚部のみ出土ではあるが、馬形埴輪は通常の事例に比較して格段に大型の個体が見られる。こうした超大型ともいべき馬形埴輪は、隣接する小島御手長山古墳や山の神古墳においても確認されており、6世紀末葉における旭・小島古墳群の特徴のひとつである。

下野堂御手長山古墳の調査では、横穴式石室と副葬品の一部を検出した。旭・小島古墳群内の大半の古墳が埋蔵施設まで削平を受けているなかで、貴重な成果であるといえる。石室は角閃石安山岩の川原石に5面加工を施して小口積みとした単室構造胴張形横穴式石室で、利根川左岸では伊勢崎市から大泉町、利根川右岸では熊谷市にかけて6世紀末葉から7世紀前半の古墳において散見される石室形式であり、旭・小島古墳群でも小島御手長山古墳や下野堂開拓1号墳で同形式の石室が採用されている。副葬品は鍔身間部が消滅した棘筥被片刃箭式長須鎌が主体で、無間端刃片刃箭式鎌を含まない。旭・小島古墳群の中では7世紀期前半を代表する古墳といえるだろう。

三奈山古墳は直径78.5mを測る大型円墳であったが、墳丘の全面調査を実施したにもかかわらず、埋葬施設・副葬品・埴輪・供献土器などの遺物は一切出土しなかった。本書では何らかの理由により構築途上で放棄された古墳との想定を行った。きわめて希有な事例であり今後に残された検討課題は多い。なお、墳丘内部から検出した火山灰がHr-FAとした場合、墳丘構築過程の一時点を集成9期のうちに置くことが可能である。

塩原屋敷遺跡については前述のとおり武田信玄の家臣であった塩原勘解由らが、武田家の滅亡後、当地に移住し居を構えたとする伝承をもつ。しかし、検出された遺物の中には青磁・内耳鍋・播鉢・常滑の甕・古瀬戸の瓶など中世に遡る資料も多く、一部の遺物の年代は、伝承よりもさらに遡る可能性が高い。また、屋敷本体の区画溝と考えられるSD-1の西方に隣接して、方形竅穴状遺構が散在しているが、これらの年代も中世に該当すると考えられる。なお、塩原屋敷遺跡の立地は、旭・小島古墳群の東群と西群の中間地点にあり古墳群を東西に分ける浅い埋没谷上に位置している。同様の立地は東五十子遺跡などにおいても認められるところであり、中世居館の選地上的特徴として注目される。

御手塚山古墳出土円筒埴輪観察表

番号	形状		高さ (cm)		重量 (g)	出土位置	道孔	口縁部装飾	外周装飾		内周装飾		断面		色調	備考
	口徑	底径	肩高	胴高					口徑	底径	装飾	中心部装飾	肩高	胴高		
1	-	-	-	-	-	上層部中央ナブ	-	上層部中央ナブ	1次ナブハナ	7本	3コハナ	7本	-	-	良好	彫刻刷色
2	-	-	-	-	-	上層部中央ナブ	-	上層部中央ナブ	1次ナブハナ	8本	ナブハナ	8本	-	-	良好	彫刻色
3	-	-	-	-	-	上層部中央ナブ	-	上層部中央ナブ	1次ナブハナ	10本	8コハナ・ナブハナ・ナブ	7本	-	-	良好	彫刻刷色
4	-	-	-	-	2.1	0.8	-	-	1次ナブハナ	9~10本	ナブ	-	-	-	良好	にぶい褐色
5	-	-	-	-	-	-	-	-	1次ナブハナ	10本	3コハナ・ナブ	10本	-	-	良好	にぶい灰青色
6	-	-	-	-	2.2	0.8	-	-	1次ナブハナ	6本	ナブハナ・ナブ	6本	-	-	良好	彫刻刷色
7	-	-	-	-	2.6	1.1	-	-	1次ナブハナ	6本	3コハナ・ナブハナ・ナブ	6本	-	-	良好	彫刻色
8	-	-	-	-	1.9	0.9 (円)	-	-	1次ナブハナ	8本	3コハナ・ナブ	8本	-	-	良好	にぶい褐色
9	-	-	-	-	1.7	0.7 (円)	-	-	1次ナブハナ	6本	ナブハナ・ナブ	6本	-	-	要修理	にぶい灰青色
10	-	-	-	-	2.0	0.8	-	-	1次ナブハナ	8本	ナブハナ・ナブ	8本	-	-	良好	彫刻刷色
11	-	-	-	-	1.7	0.9 (円)	-	-	1次ナブハナ	6本	3コハナ・ナブ	6本	-	-	良好	にぶい褐色
12	-	-	-	-	-	-	(円)	-	1次ナブハナ	6本	ナブハナ・ナブ	6本	-	-	良好	彫刻刷色
13	-	-	-	-	-	-	(円)	-	1次ナブハナ	6本	ナブ・縦線1本	-	-	-	良好	彫刻刷色
14	-	-	-	-	-	-	(円)	-	1次ナブハナ	6~8本	ナブ	-	-	-	良好	にぶい褐色
15	-	-	-	-	-	-	(円)	-	1次ナブハナ	6~7本	ナブハナ	8本	-	-	良好	彫刻色
16	-	-	-	-	-	-	-	-	1次ナブハナ	8本	ナブハナ・ナブ	6本	-	-	良好	にぶい褐色
17	-	-	-	-	-	-	-	-	1次ナブハナ	10本	ナブハナ	8~10本	-	-	良好	にぶい褐色





旭・小島古墳群遺構外出土円筒・朝顔形埴輪観察表

番号	品 名		出土 層 (cm)	出土 部	直 径	高 度	口部調整部		外部調整部		内面調整部	底面 形状	底面 状態	損傷 状況	色調	備 考
	口部	調整部					調整部	調整部								
1	127.0	127.2	25.1	15	10.1	2.2	0.4	円	3.8×6.6	6本	中央部のみ、若干箇 ナガ・調整部	6本	-	良好	明褐色	朝顔の片断・チャート系多量を含む。
2	-	-	-	-	-	1.6	0.7	-	上調整部ナ 1.3×ナハナ	5~6本	ナハナ・ナメハ ナ	-	-	良好	褐色	朝顔の片断・調整部・若干箇の調整部ナ 朝顔の片断・チャート系含む。同上調整部。
3	128.0	-	-	-	1.4	2	0.7	-	円ナナナ 1.3×ナハナ	12本	ナメハナ・ナナナ ナ	-	-	良好	に濃い褐色	朝顔の片断・白色石灰を含む。
4	20	-	-	-	1.8	1.8	0.2	-	調整部13本 外周10本 1.3×ナハナ	調整部13本 外周10本	ナメハナ・ナナナ ナ	-	-	良好	褐色	朝顔の片断・白色石灰を含む。内周側でハナ工 片断を含む。
5	-	-	-	-	1.8	0.8	(円)	-	1.3×ナハナ	11本	ナナナ・ナナナ ナ	-	-	良好	明赤褐色	片断・チャート・朝顔片を含む。
6	-	-	-	-	10.8	2	0.5	(円)	5.0×5.0	8本	ナメハナ・ナナナ ナ・調整部	-	-	やや円筒	灰褐色	朝顔の片断・朝顔片を含む。
7	-	-	-	-	1.5	0.5	円筒	-	1.3×ナハナ	10本	ナメハナ	-	-	良好	に濃い赤褐色	片断・チャート・赤褐色片を含む。
8	-	-	-	-	1.8	0.6	円筒	-	1.3×ナハナ	8本	ナメハナ・ナナナ ナ・調整部	-	-	良好	に濃い赤褐色	片断・調整部・チャート系含む。
9	-	-	-	-	2	1	不明	-	1.3×ナハナ	10本	ナナナ	-	-	良好	に濃い赤褐色	片断・調整部・チャート系含む。
10	-	-	-	-	14.6	-	-	-	1.3×ナハナ	8本	ナナナ・ナナナ ナ	-	-	良好	褐色	朝顔の片断・調整部を含む片断は確認する。
11	-	-	-	-	14.6	-	-	-	1.3×ナハナ	調整部1本 調整部5本	調整部1本 調整部5本	-	不明	良好	明赤褐色	調整部・チャート系含む。
12	-	-	-	-	13	-	-	-	1.3×ナハナ	8本	ナナナ	-	不明	良好	明赤褐色	片断・チャート系含む。
13	-	-	-	-	2.3	0.9	-	-	調整部ナ 1.3×ナハナ	6~7本	ナメハナ・ナナ ナ	-	-	良好	褐色	口部調整部、片断・チャート・調整部を含む。
14	-	-	-	-	-	-	-	-	円ナナナ 1.3×ナハナ	10本	ナメハナ	-	-	良好	明赤褐色	片断・チャート・赤褐色片を含む。
15	-	-	-	-	-	-	-	-	円ナナナ 1.3×ナハナ	12本	円ナナナ・ナナメハ ナ	-	-	良好	明赤褐色	片断・チャート系含む。
16	-	-	-	-	-	-	-	-	円ナナナ 1.3×ナハナ	11本	ナメハナ	-	-	良好	に濃い赤褐色	片断・チャート系含む。
17	-	-	-	-	-	-	-	-	円ナナナ 1.3×ナハナ	10本	円ナナナ	-	-	良好	明赤褐色	片断・チャート系含む。外周に調整部する。
18	-	-	-	-	-	-	-	-	調整部 1.3×ナハナ	6~7本	ナメハナ	-	-	良好	褐色	口部調整部、片断・チャート系含む。
19	-	-	-	-	-	-	-	-	円ナナナ 1.3×ナハナ	8本	ナナナ	-	-	良好	褐色	朝顔の片断・調整部を含む。

番号	注 意 (cm)				管 径	透 孔	口縁部調整	外形調整			内径調整			構成	色調	備 考			
	口縁	底面	側面	高さ				調整	1/2mm 以下	調整	調整	調整	調整				調整	調整	調整
20	-	-	-	2.2	0.2	-	-	1次チタハシ	8本	-	チタ	-	-	良好	青色	裏面凹部の消し孔、片割・チヤートを含む。			
21	-	-	-	2.3	0.7	(P)	-	1次チタハシ	7本	-	チタハシ・チタハシ チタチタチ	-	-	良好	赤褐色	裏面凹部・チヤートを含む。			
22	-	-	-	1.6	0.4	-	-	1次チタハシ	8本	-	チタメハシ	-	-	やや不良	灰青色	外周凸・側面凹部を含む。			
23	-	-	-	1.5	0.5	-	-	1次チタハシ	12本	-	チタチタチ	-	-	良好	にぶい赤褐色	片割・チヤートを含む。			
24	-	-	-	1.9	0.5	-	-	1次チタハシ	10本	-	チタメハシ・チタチ	-	-	良好	明褐色	片割・裏面・チヤートを含む。			
25	-	-	-	1.7	0.6	(P)	-	1次チタハシ	12本	-	チタハシ・チタチ	-	-	良好	明赤褐色	片割・チヤートを含む。			
26	-	-	-	1.7	0.6	(P)	-	1次チタハシ	8本	-	チタチタチ	-	-	良好	明赤褐色	側面凹部・チヤートを含む。			
27	-	-	-	1.6	0.3	-	-	1次チタハシ	9本	-	チタメハシ	-	-	やや不良	にぶい灰褐色	外周凸・側面凹部を含む。			
28	-	-	-	1.6	0.5	-	-	1次チタハシ	内面8本 外面10本	-	チタメハシ・チタチ	-	-	良好	明赤褐色	片割・チヤートを含む。			
29	-	-	-	1.8	0.6	-	-	1次チタハシ	10本	-	チタメハシ	-	-	良好	にぶい赤褐色	片割・チヤートを含む。			
30	-	-	-	-	-	-	-	1次チタハシ	8本	-	チタメハシ・チタチ	-	-	良好	にぶい赤褐色	チヤート・白色部・側面凹部を含む。			
31	-	-	-	-	-	-	-	1次チタハシ	9本	-	チタチタチ	-	-	やや不良	にぶい赤褐色	外周凸・側面凹部を含む。			
32	-	-	-	-	-	-	-	1次チタハシ	調整8本 内面8本	-	チタハシ	-	-	良好	明赤褐色	片割・側面を含む。			
33	-	-	-	-	-	-	-	1次チタハシ	8本	-	チタハシ	-	-	良好	暗色	片割・チヤートを含む。			
34	-	-	-	-	-	-	-	1次チタハシ	10本	-	チタメハシ	-	-	良好	明赤褐色	片割・チヤートを含む。			
35	-	-	-	-	-	-	-	1次チタハシ	8本	-	チタメハシ・チタチ	-	-	良好	明赤褐色	片割・チヤートを含む。			
36	-	-	-	-	-	-	-	1次チタハシ	8本	-	チタチタチ	-	-	やや不良	にぶい灰褐色	外周凸・側面凹部を含む。			
37	-	-	-	1.6	0.6	-	-	1次チタハシ	8本	-	チタハシ・チタメハシ チタチタチ	-	-	良好	にぶい赤褐色	裏面凹部の消し孔、片割・チヤートを含む。			
38	-	-	-	-	-	-	-	1次チタハシ	11本	-	チタメハシ・チタチ	-	-	良好	にぶい赤褐色	透し孔部に2本の突起部があり、片割・チヤートを含む。			
39	-	-	-	-	-	-	-	1次チタハシ	10本	-	チタチ	-	-	良好	青色	裏面凹部の消し孔、側面の片割・チヤートを含む。			

番号	法 規 (cm)			管 径	透 孔	口 径 部 置 部	外 径 部 置 部		内 径 部 置 部			組 成	色 調	備 考
	口 径 部 置 部	法 規	管 径				管 径	管 径	管 径	管 径	管 径			
40	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	9本	-	ナシ	-	良好	明赤褐色 表面に黒いシミ、片管・チャートを含む。
41	-	-	-	-	不明	-	調度	1次管径ハシ	11本	-	ナシ・ハシ	-	良好	明褐色 外周に黒いシミ、片管・チャート・赤褐色を含む。
42	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	7～8本	-	ナシ・ハシ	-	良好	褐色 表面に黒いシミ、片管・チャートを含む。
43	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	11本	-	ナシ	-	良好	褐色 外周に黒いシミ、片管・チャート・赤褐色を含む。
44	-	-	-	2.4	0.8	-	調度	1次管径ハシ	8本	-	ナシ	-	良好	褐色 管径約13%、第1管径に黒いシミあり、片管・チャートを含む。
45	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	9本	-	ナシ	-	不明	褐色 片管・チャートを含む。
46	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	7～8本	-	ナシ、基部の一部にコゴハシ	-	良好	褐色 片管・チャート・白いシミ、褐色を含む。
47	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	8本	-	ナシ・ハシ	-	不明	褐色 片管・チャート・白いシミ、褐色を含む。
48	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	10本	-	ナシ	-	良好	褐色 片管・チャートを含む。
49	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	10本	-	ナシ・ハシ	-	良好	明赤褐色 表面に黒いシミ、片管・チャートを含む。
50	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	8本	-	ナシ	-	良好	褐色 表面に黒いシミ、片管・チャート・赤褐色を含む。
51	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	8本	-	ナシ・ハシ	-	良好	赤褐色 表面に黒いシミ、片管・チャート・白いシミを含む。
52	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	9本	-	ナシ・ハシ	-	良好	褐色 表面に黒いシミ、片管・チャート・赤褐色を含む。
53	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	7本	-	ナシ・ハシ	-	良好	褐色 表面に黒いシミ、片管・チャート・赤褐色を含む。
54	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	8本	-	ナシ・ハシ	-	良好	褐色 表面に黒いシミ、片管・チャート・赤褐色を含む。
55	-	-	-	-	-	-	調度	1次管径ハシ	9本	-	ナシ・ハシ	-	不明	褐色 片管・チャート・赤褐色を含む。

塩原屋敷道路橋外出土円筒形塩輪観察表

番号	法 規 (cm)			管 径	透 孔	口 径 部 置 部	外 径 部 置 部		内 径 部 置 部			組 成	色 調	備 考
	口 径 部 置 部	法 規	管 径				管 径	管 径	管 径	管 径	管 径			
1	-	-	-	-	2	0.4	調度	1次管径ハシ	日本	-	ナシ・ハシ	-	良好	褐色 片管・右側・チャート・白いシミ、褐色を含む。
2	-	-	-	-	2.5	0.3	調度	1次管径ハシ	日本	-	ナシ・ハシ	-	良好	赤褐色 片管・チャート・白いシミ、褐色を含む。
3	-	-	-	-	2.6	0.5	不明	-	不明	-	ナシ・ハシ	-	良好	赤褐色 片管・右側・チャート・白いシミ、褐色を含む。
4	-	-	-	-	不明	0.4	調度	1次管径ハシ	7本	-	ナシ・ハシ	-	良好	赤褐色 片管・右側・チャート・白いシミ、褐色を含む。

## 【文 献】

- 青木 敬 2005 「墳丘構築の研究—墳丘からみた古墳の地域性—」六一書房 東京。
- 新井房夫 1979 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』No157 ニューサイエンス社 東京 pp.41-52。
- 中世土器研究会 1995 「概説中世の土器・陶磁器」真隣社 京都。
- 江原昌俊・大谷 徹 2005 「北武蔵における古墳時代中期群集墓の形成」『考古学ジャーナル』No528 ニューサイエンス社 東京 pp.16-18。
- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成畿内編』山川出版社 東京 pp.24-26。
- 橋本博文・佐々木幹雄ほか 1980 「有勝寺北裏遺跡」有勝寺北裏遺跡調査会 東京。
- 本庄市 1986 『本庄市史』通史編Ⅰ 本庄市史編集室 本庄。
- 本庄市教育委員会 1984 『本庄遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第6集 本庄市教育委員会 本庄。
- 河野一隆 2002 「石製模造品」『考古資料大観』9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器 小学館 東京 pp.331-340。
- 北山峰生 2005 「古墳出土の石製模造品」『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』第54回埋蔵文化財研究会発表要旨・資料集 第54回埋蔵文化財研究会事務局 pp.157-180。
- 恋河内昭彦 1996 「第V章まとめ」『辻堂遺跡Ⅰ—県営水田農業確立排水対策特別事業（やばり川地区）に伴う辻堂遺跡B地点発掘調査報告書—』児玉町文化財調査報告書第19集 児玉町教育委員会児玉 pp.63-90。
- 町田 洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス—日本列島とその周辺』東京大学出版会 東京 p.276。
- 松本 完 2002 「大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第2次）・北廻前山古墳群（第2・3次）発掘調査報告書—新幹線本庄新駅（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ—」本庄市遺跡調査会報告第6集 本庄市遺跡調査会 本庄。
- 美里町 1986 「第二章第四節 古墳時代」『美里町史』通史編 児玉郡美里町 pp.135-191。
- 中村倉司 1999 「埼玉県における5世紀代の土器—和泉式土器の行方—」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 藤沢 pp.91-118。
- 並木 隆 1976 「7 本庄市旭古墳群の調査」『第9回遺跡発掘報告会発表要旨』埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会 浦和 pp.8-9。
- 南毛古墳文化研究会 2001 「本庄市域における古式古墳調査の成果と課題」第5回群馬県古墳時代研究会・南毛古墳文化研究会合同検討会資料 本庄。
- 太田博之 1991 「本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ—公御塚古墳—」本庄市埋蔵文化財調査報告第19集 本庄市教育委員会 本庄。
- 太田博之 2001 「旭・小島古墳群—前の山古墳—」本庄市埋蔵文化財調査報告第23集 本庄市教育委員会 本庄。
- 太田博之 2004 「旭・小島古墳群—上前原1～3・5～11号墳—」本庄市埋蔵文化財調査報告第27集 本庄市教育委員会 本庄。
- 太田博之・松本 完・的野善行 2006 「旭・小島古墳群—林地区Ⅰ—」本庄市埋蔵文化財調査報告書第3集 本庄市教育委員会 本庄。

- 太田博之・松本 完・的野善行 2006 『塩原屋敷遺跡』本市市埋蔵文化財調査報告書第32集 本市市教育委員会 本庄。
- 太田博之 2007 『武蔵北部の首長墓』『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊15 雄山閣 東京。
- 太田博之 2007 『旭・小島古墳群―林地区Ⅱ―』本市市埋蔵文化財調査報告書第6集 本市市教育委員会 本庄。
- 太田博之 2008 『旭・小島古墳群―杉ノ根・屋敷内・三奈山・森西・森ノ下地区―』本市市埋蔵文化財調査報告書第11集 本市市教育委員会 本庄。
- 大谷 徹 1998 『新屋敷遺跡D区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第194集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 大里。
- 岡本健一 2003 『埼玉県における後期前方後円墳の展開』『後期古墳の諸段階』第8回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会 佐倉。
- 坂本和俊 1985 『埼玉県における円筒埴輪編年の諸問題』『埴輪の変遷―その普遍性と地域性―』北武蔵古代文化研究会 pp.63-69。
- 坂本和俊 1986 『埼玉における前期古墳の形成』『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室 浦和 pp.204-207。
- 埼玉県 1982 『下野堂(しものどう)古墳群』『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳 浦和 pp.674-677。
- 埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』浦和。
- 埼玉県立本庄高等学校考古学部 1975 『いぶき』8・9合併号 本庄。
- 菅谷浩之 1976 a 『下野堂遺跡』『本市市史』資料編 考古資料 本市市 本庄 pp.59-62。
- 菅谷浩之 1976 b 『有勝寺北裏埴輪窟跡』『本市市史』資料編 考古資料 本市市 本庄 pp.100-103。
- 菅谷浩之 1976 c 『赤坂埴輪窟跡』『本市市史』資料編 考古資料 本市市 本庄 p.103。
- 菅谷浩之 1984 『北武蔵における古式古墳の成立―児玉地方からみた北武蔵の古式古墳―』児玉町史資料調査報告 古代第1集 児玉町教育委員会・児玉町史編纂委員会 児玉郡児玉町。
- 杉山晋作 1985 『石製刀子とその使途』『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 佐倉 pp.115-133。
- 杉山晋作・太田博之 2005 『関東における古墳時代中期群集墓の墓制変容』『考古学ジャーナル』No528 ニューサイエンス社 東京 pp.3-4。
- 塚田良道・太田博之 1990 『埼玉県の円墳』『古代学研究』123号 古代学研究会。
- 魚津知克 2005 『鉄製農具の副葬と農具形石製祭器の副葬』古代 118号 早稲田大学考古学会 東京 pp.79-103。
- 若松良一 2007 『埼玉古墳群』『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊15 雄山閣 東京。
- 和田晴吾 1992 『群集墳と終末期古墳』『新版古代の日本』第五巻近畿 I pp.325-350。
- 横山卓雄・埴原 徹・山下 透 1986 『温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定』『第四紀研究』25 第四紀研究会 東京 pp.21-31。
- 横山卓雄・山下 透 1986 『温度変化型屈折率測定装置(RIMS86)による斜方輝石、角閃石の屈折率測定の試み』『京都大学教養部地学報告』21 京都 pp.30-36。

# 写 真



御手長山古墳G地点 周堀検出状況 [南東から]



御手長山古墳G地点 SK検出状況 [南西から]



下主山古墳A地点 周堀検出状況 [北西から]



下野堂御手長山古墳A地点 周堀検出状況  
[北西から]



下野堂御手長山古墳B地点 石室検出状況  
[西から]



下野堂御手長山古墳B地点 石室検出状況  
[東から]



下野堂御手長山古墳B地点 石室検出状況  
[東から]



三奈山古墳B地点 周堀検出状況 [南東から]

## 写真2



三空山古墳空中写真（昭和56年撮影）



往時の三空山古墳全景【南から】



三空山古墳周堀検出状況【西から】



三空山古墳周堀検出状況【陸橋部分】



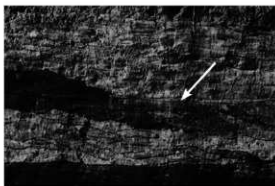
三空山古墳西断面中央付近盛土状況



三空山古墳東断面中央付近盛土状況



三空山古墳南断面中央付近盛土状況



三空山古墳北断面中央付近盛土状況  
（矢印はFA検出部分）





三奈山古墳E地点 周堀検出状況 [北西から]



屋敷内4号墳A地点 周堀検出状況 [東から]



屋敷内4号墳A地点 周堀検出状況 [北西から]



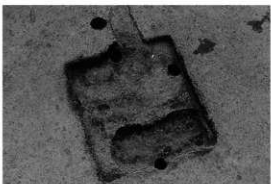
塩原屋敷遺跡 内出前II A地点  
調査区全景 [北東から]



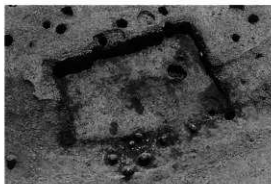
塩原屋敷遺跡 内出前II A地点  
調査区全景 [北東から]



塩原屋敷遺跡SF-2検出状況 [東から]

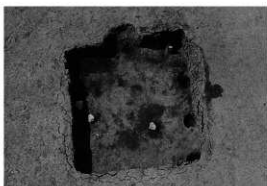


塩原屋敷遺跡SF-3検出状況 [北西から]



塩原屋敷遺跡SF-4検出状況 [北西から]

## 写真4



塩原屋敷遺跡SF-5検出状況【北から】



塩原屋敷遺跡SF-7, SD-21・22検出状況  
【北東から】



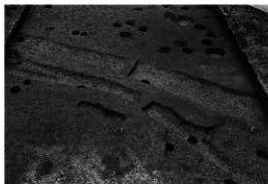
塩原屋敷遺跡SD-1・7・8・9検出状況  
【北東から】



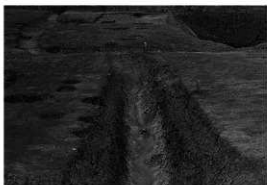
塩原屋敷遺跡SD-1・8検出状況【北東から】



塩原屋敷遺跡SD-1検出状況【北から】



塩原屋敷遺跡SD-2・3検出状況【南西から】



塩原屋敷遺跡SD-14・16検出状況【東から】



塩原屋敷遺跡SD-17検出状況【南東から】



塩原屋敷遺跡SD-1検出状況 [北東から]



塩原屋敷遺跡SD-4検出状況 [北西から]



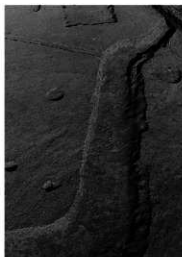
塩原屋敷遺跡SD-10検出状況 [南東から]



塩原屋敷遺跡SD-11・12検出状況 [北西から]

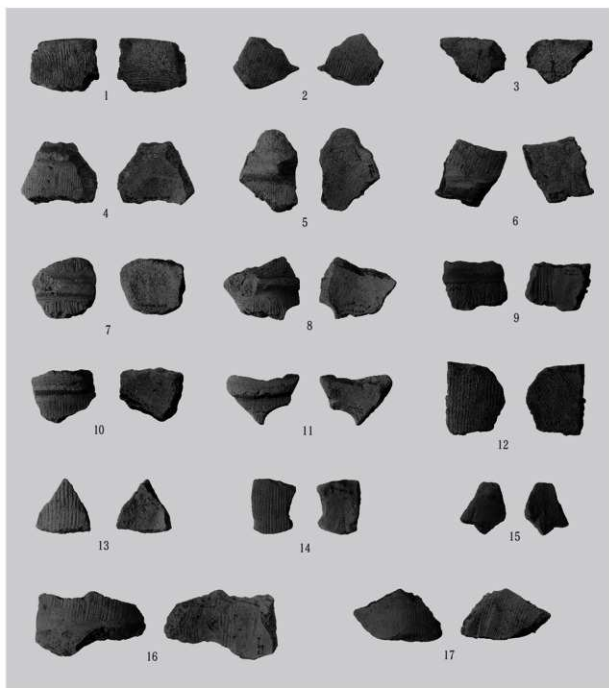


塩原屋敷遺跡SD-14検出状況 [西から]



塩原屋敷遺跡SD-22検出状況 [西から]

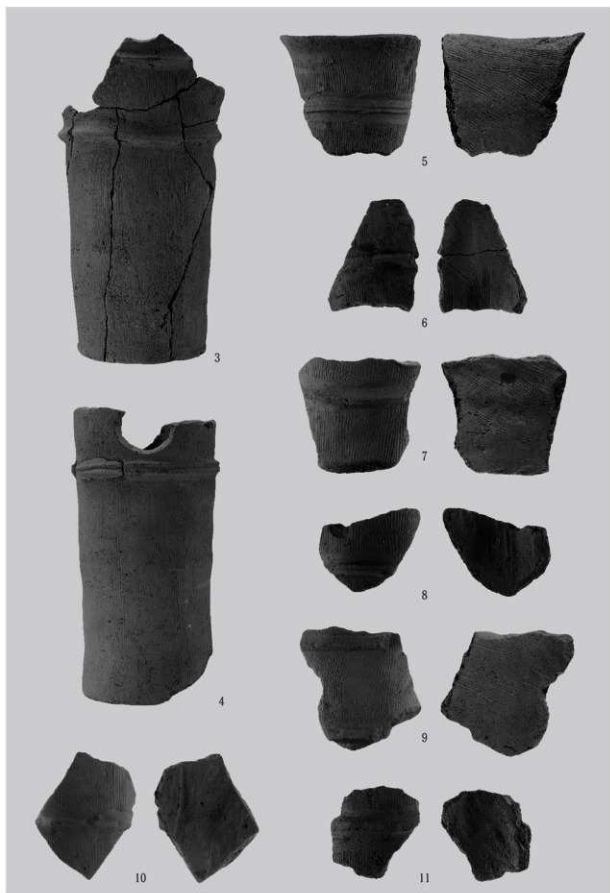
写真6



御手長山古墳出土土円筒埴輪

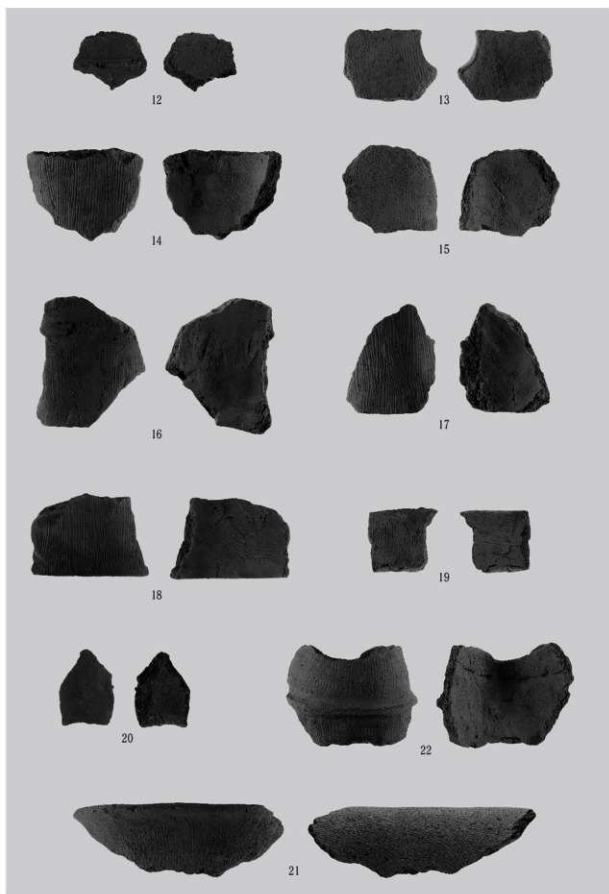


坊主山古墳出土土円筒・朝顔形埴輪(1)

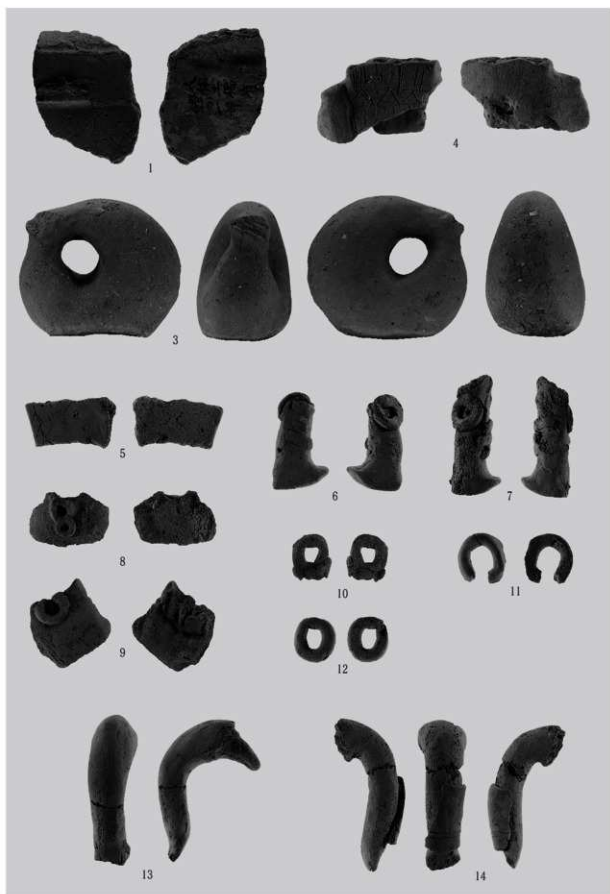


坊主山古墳出土土円筒・朝顔形埴輪(2)

写真8



坊主山古墳出土土丹筒・朝顔形埴輪(3)



坊主山古墳出土形象埴輪(1)

写真10



坊主山古墳出土土形象埴輪(2)



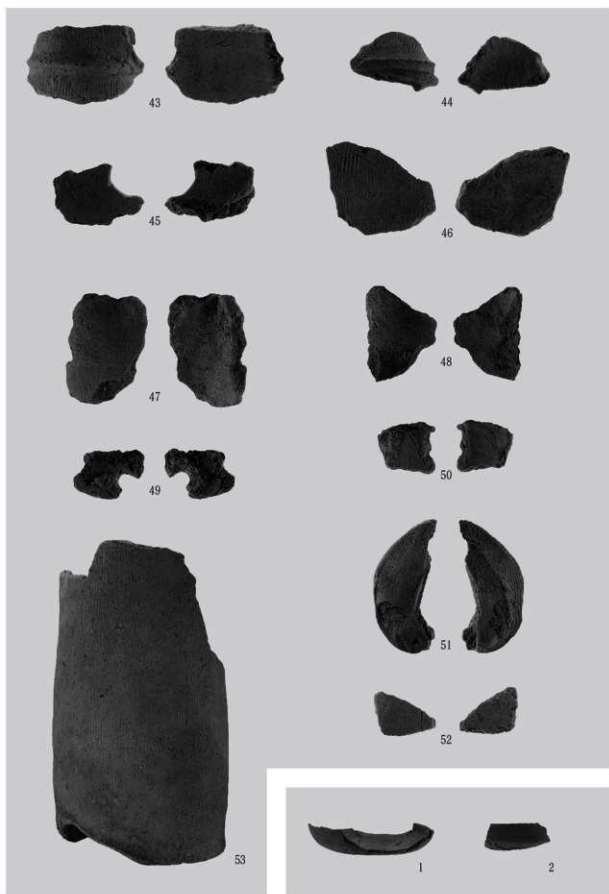


坊主山古墳出土土形象埴輪(3)

写真12



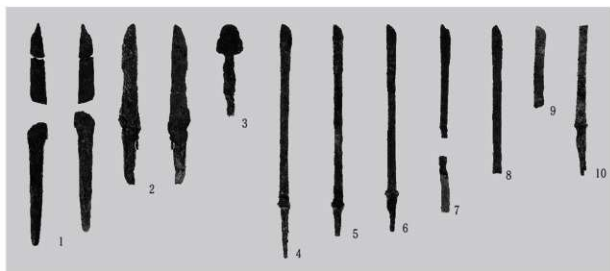
坊主山古墳出土形象埴輪(4)



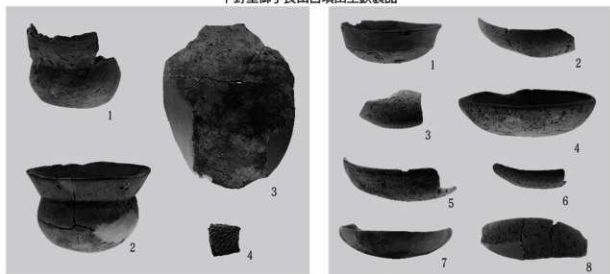
坊主山古墳出土形象埴輪(5)

坊主山古墳出土土器

写真14



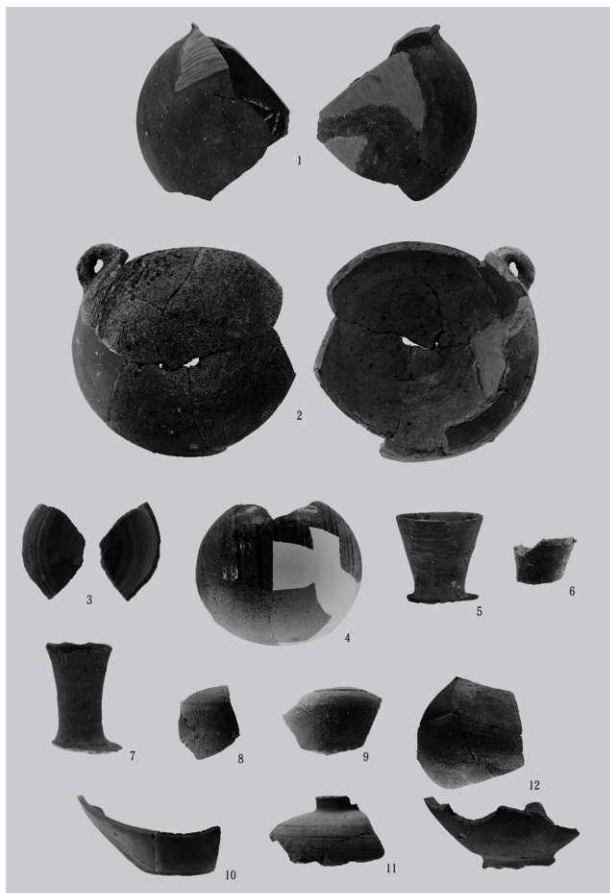
下野堂御手長山古墳出土鉄製品



屋敷内4号墳出土土器

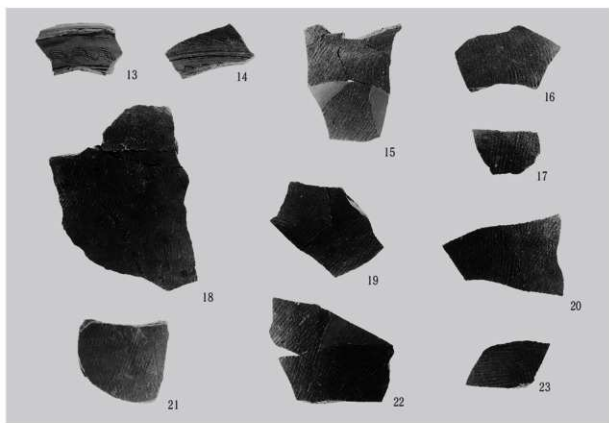


旭・小島古墳群遺構外出土遺物(1)



旭・小島古墳群遺構外出土遺物(2)

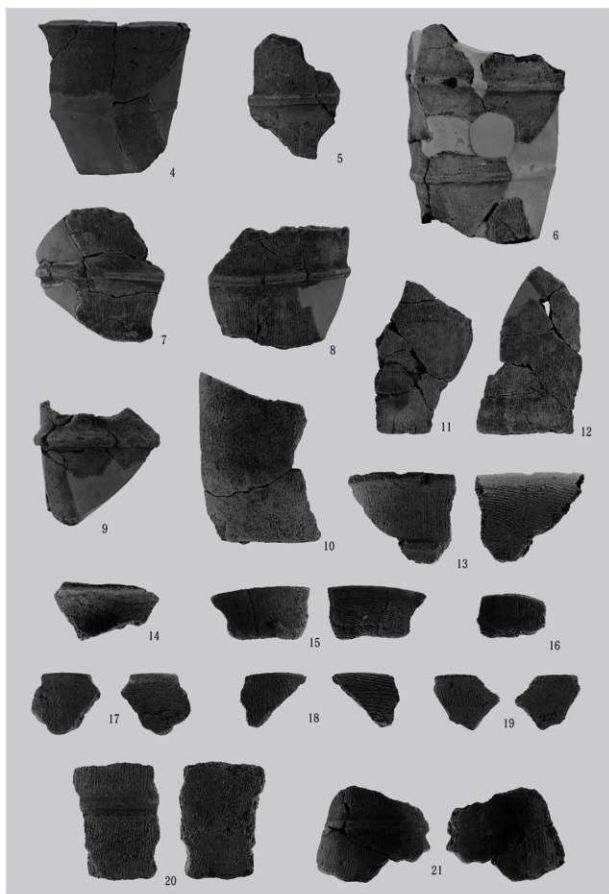
写真16



旭・小島古墳群遺構外出土遺物(3)

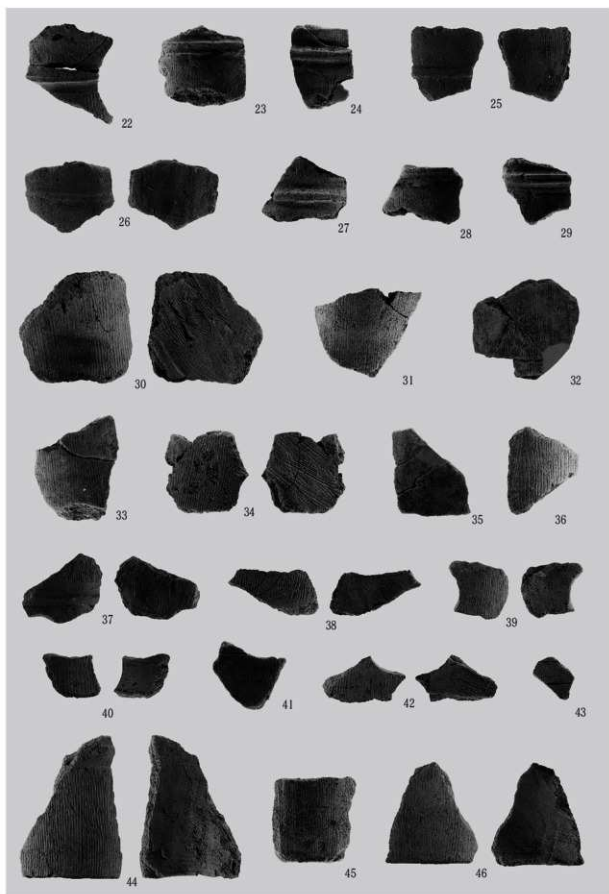


旭・小島古墳群遺構外出土遺物(4)



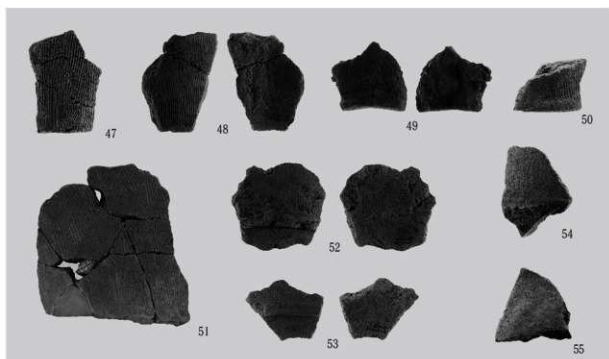
旭・小島古墳群遺構外出土遺物(5)

写真18

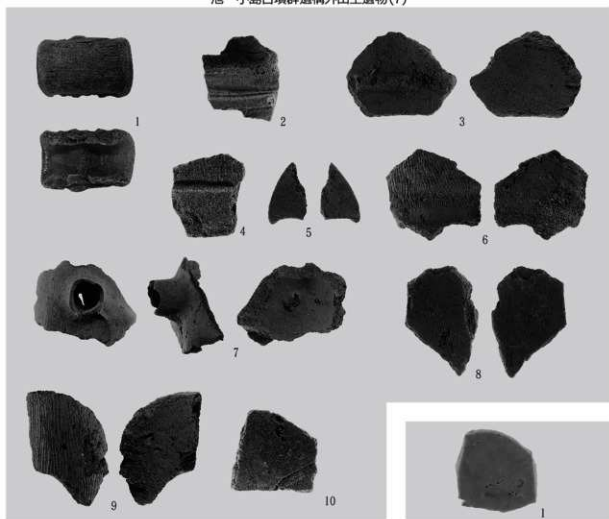


旭・小島古墳群遺構外出土遺物(6)



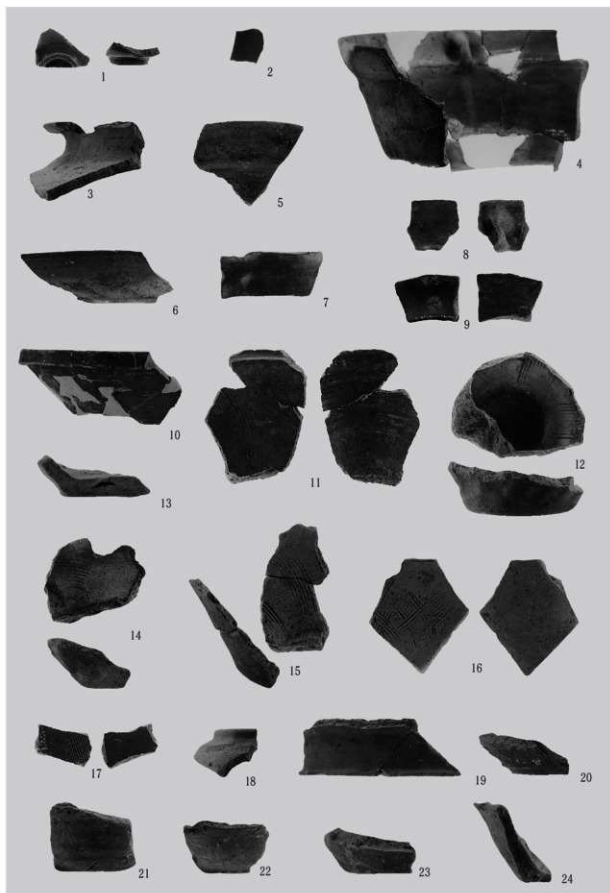


旭・小島古墳群遺構外出土遺物(7)

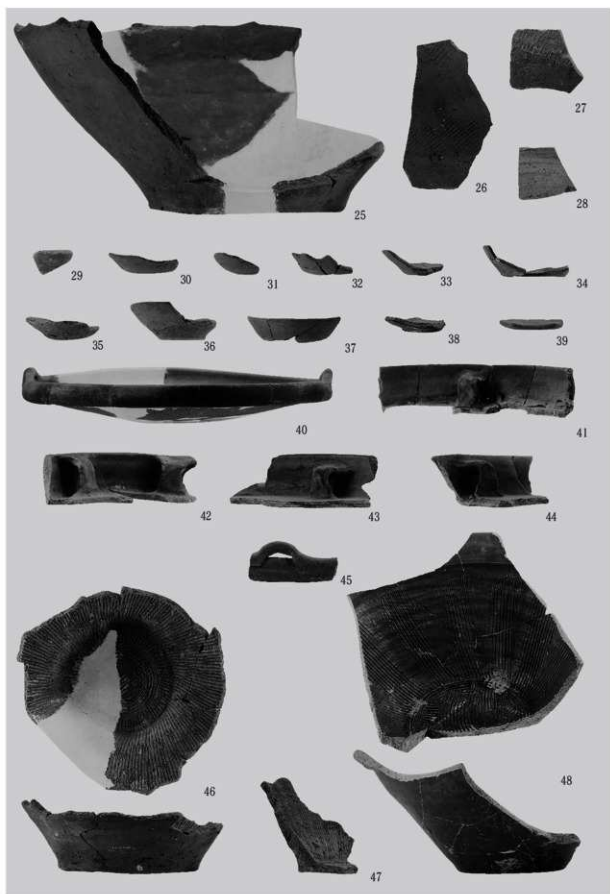


旭・小島古墳群遺構外出土遺物(8)

旭・小島古墳群遺構外出土遺物(9)



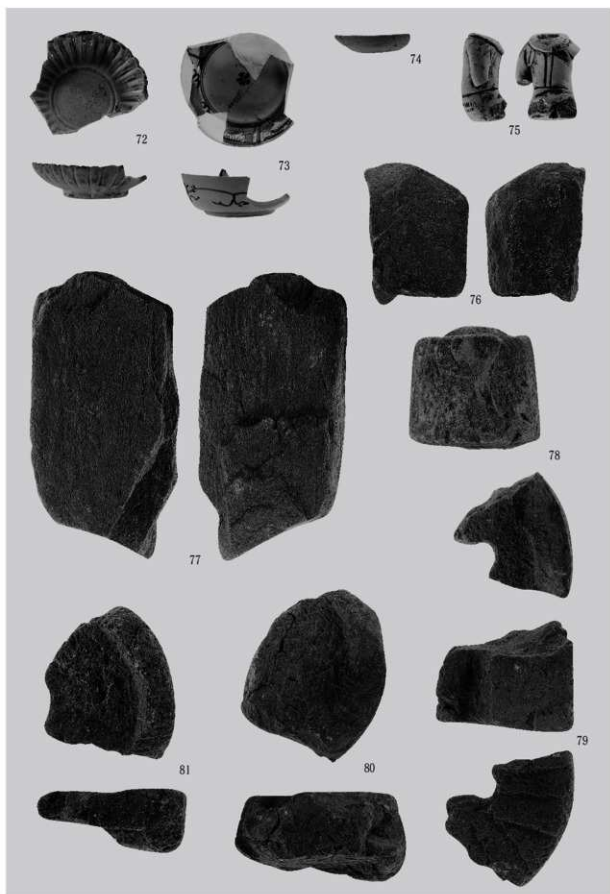
塩原屋敷遺跡出土遺物(1)



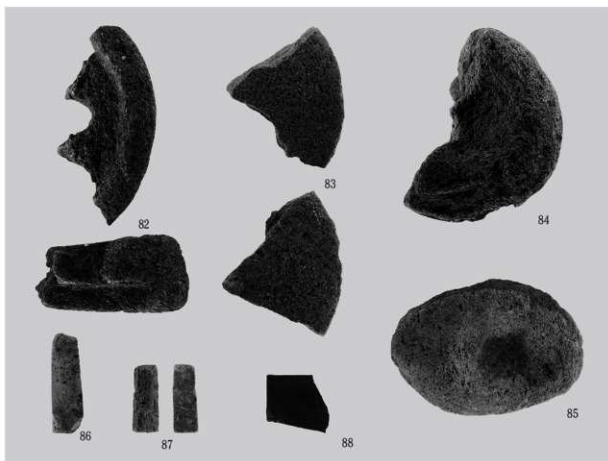
塩原屋敷遺跡出土遺物(2)



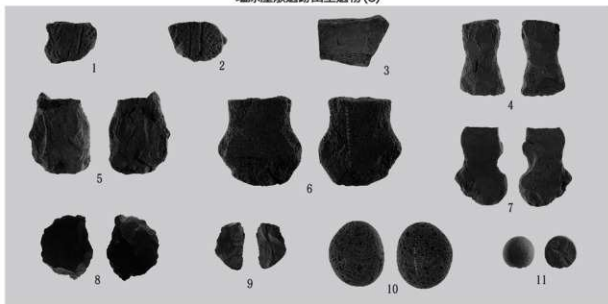
塩原屋敷遺跡出土遺物(3)



塩原屋敷遺跡出土遺物(4)



塩原屋敷遺跡出土遺物(5)



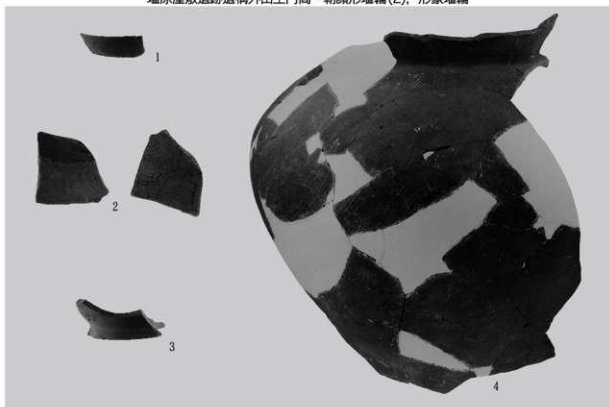
塩原屋敷遺跡遺構外出土縄文・弥生土器・石器



塩原屋敷遺跡遺構外出土土筒・朝顔形埴輪(1)

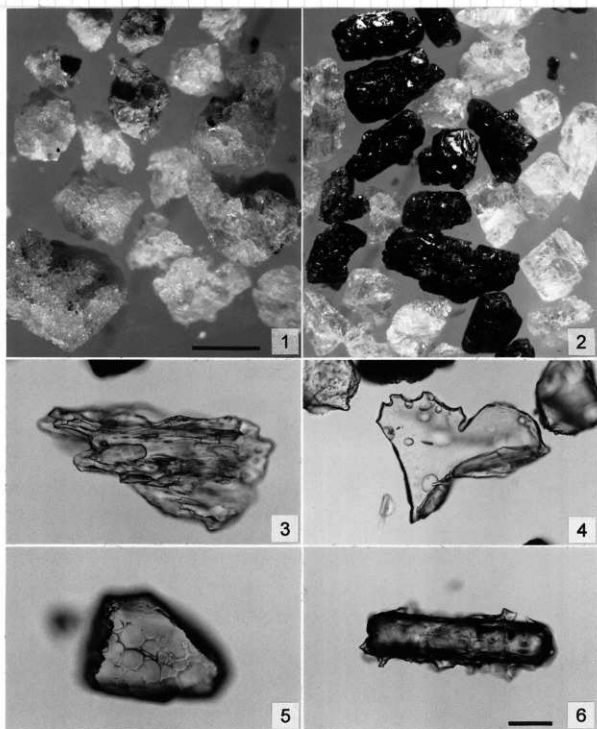


塩原屋敷遺跡遺構外出土円筒・朝顔形埴輪(2)、形象埴輪



塩原屋敷遺跡遺構外出土土器

写真26



1. 軽石（実体顕微鏡）スケール1.0mm

2. 重鉱物および斜長石（偏光顕微鏡）スケール1.0mm

3. 軽石型繊維状ガラス（偏光顕微鏡）スケール0.1mm

4. バブル型Y字状ガラス（偏光顕微鏡）スケール0.1mm

5. ガラス付着単斜輝石（偏光顕微鏡）スケール0.1mm

6. ガラス付着斜方輝石（偏光顕微鏡）スケール0.1mm

テフラの顕微鏡写真（スケール、No1・2共通、No3～6共通）



## 報告書抄録

ふりがな	あさひ・おじまこふんぐん しおぼらやしきいせき							
書名	旭・小島古墳群 塩原原敷遺跡							
副書名	小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅶ							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	太田博之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会 電話0495-25-1186							
発行年月日	西暦 2009 (平成21) 年 3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (m)	調査面積	調査原因
		市町村	道跡番号	° ' "	° ' "			
旭・小島古墳群	埼玉県本庄市 小島2丁目・小島3丁目・下野堂1丁目・下野堂3丁目・万年寺1丁目	112119	171	36°14'48"	139°10'19"	19890427 } 20061114	7,848㎡	区画整理
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
旭・小島古墳群	古墳	古墳時代前期～終末期		古墳		埴輪、土師器、須恵器、鉄鏃、刀子		
塩原原敷遺跡	館跡	中世～江戸時代		溝・方形竪穴状遺構		土器・陶磁器、縄文・弥生土器、石器、埴輪、土師器、須恵器		

---

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第14集

**旭・小島古墳群 塩原屋敷遺跡Ⅱ**

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅶ

---

平成21年3月25日 印刷

平成21年3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1186

印刷 朝日印刷工業株式会社